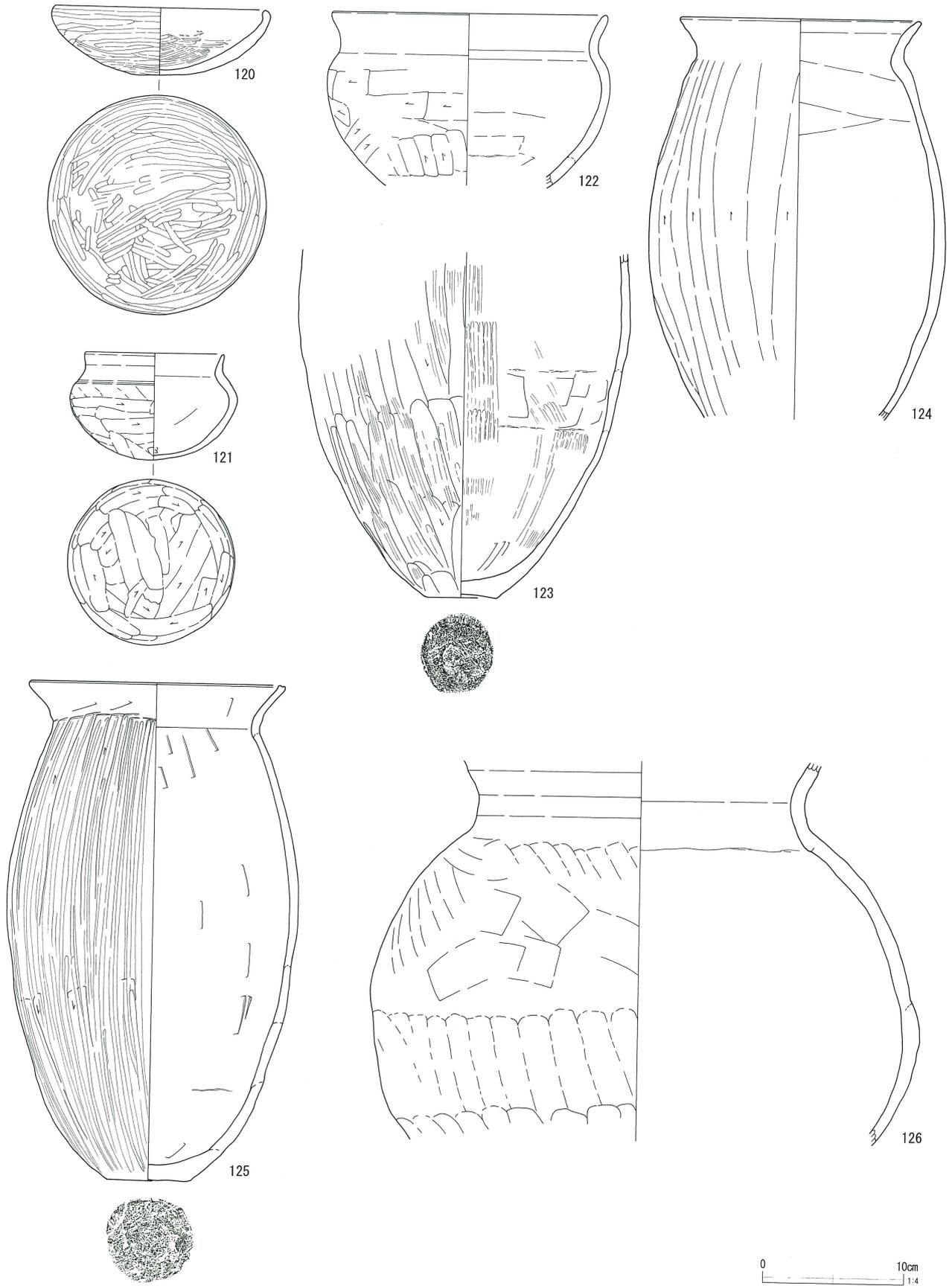
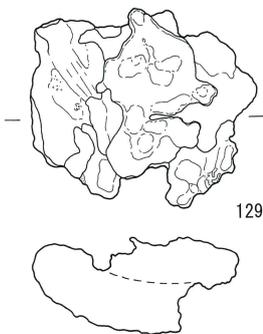
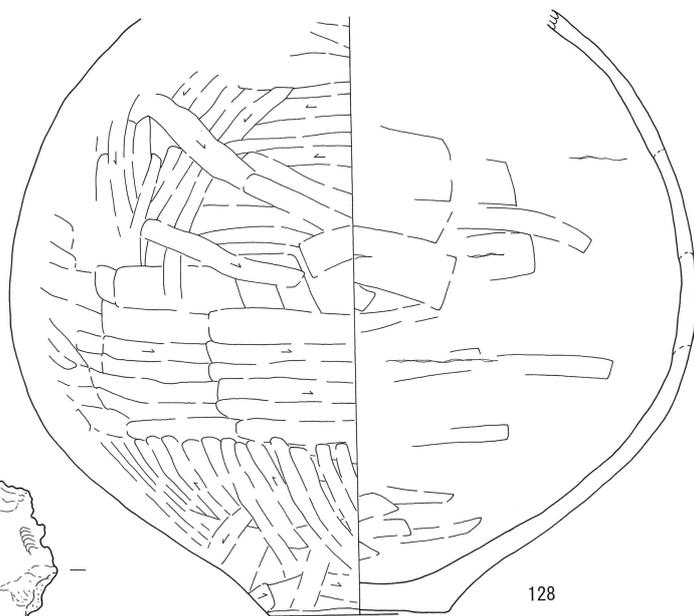
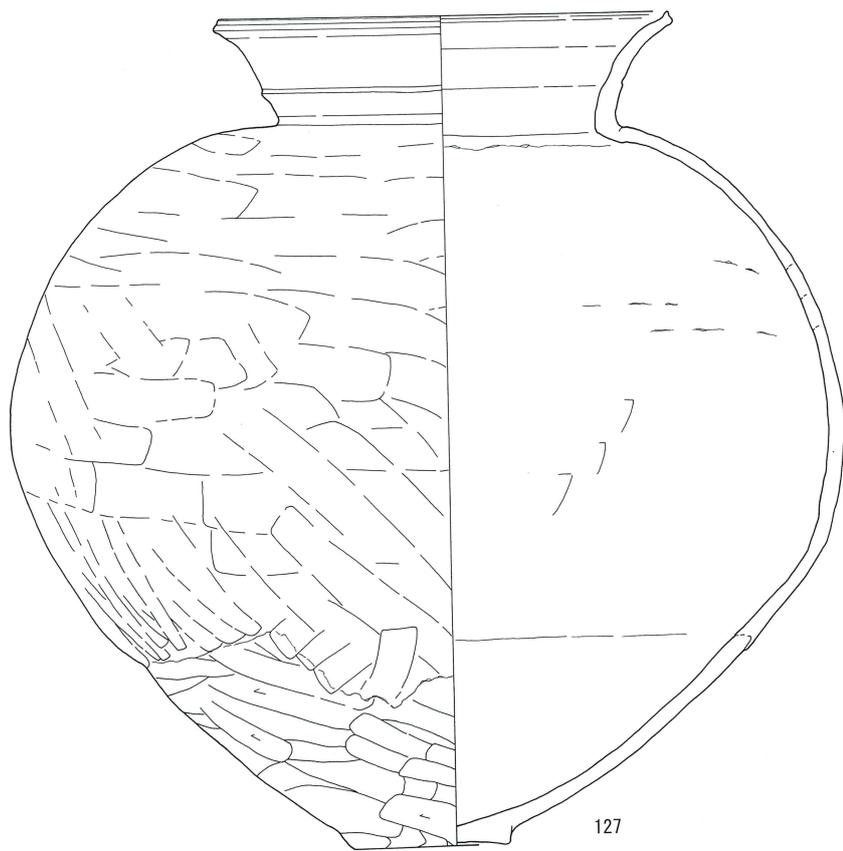


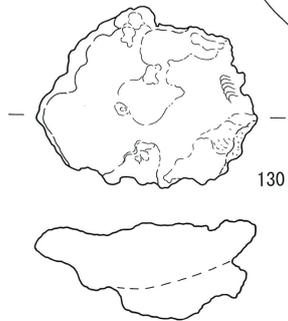
E-5



第361图 流路跡出土遺物 (12)



129

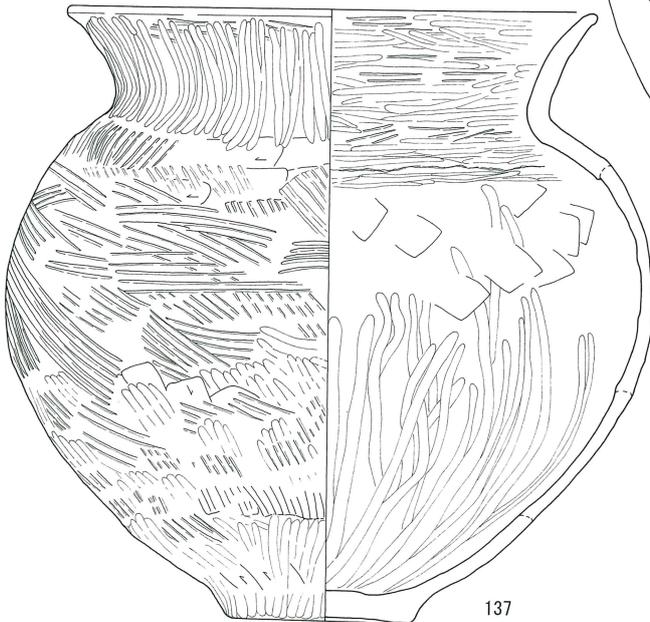
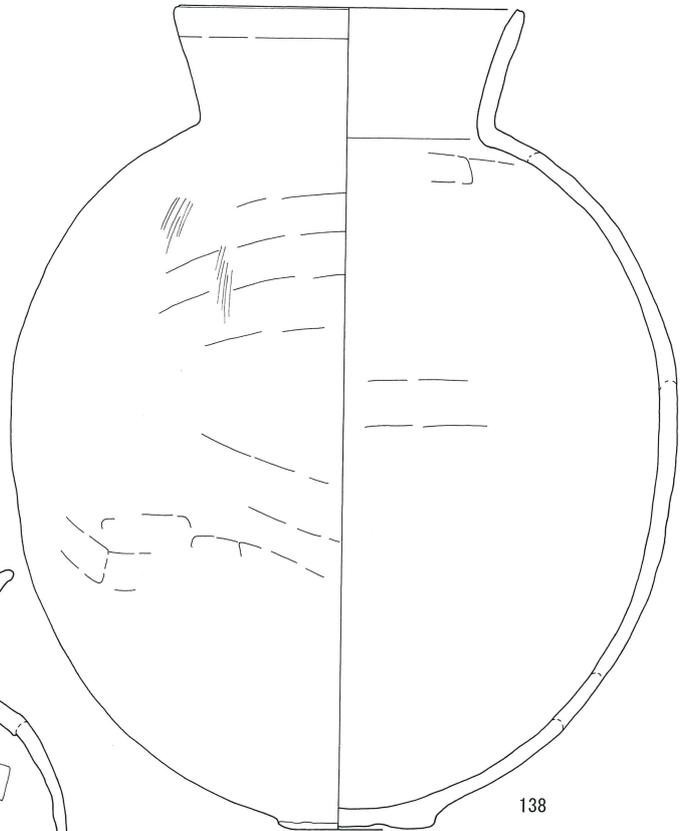
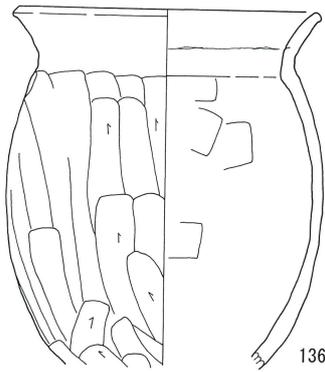
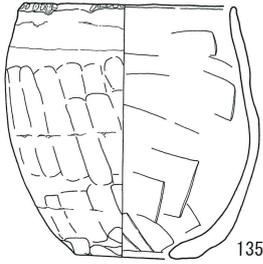
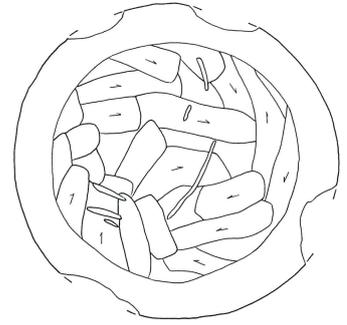
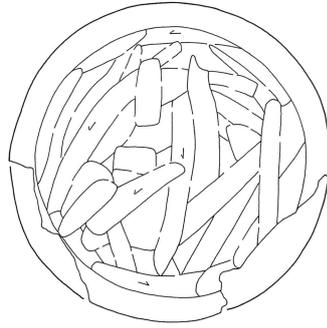
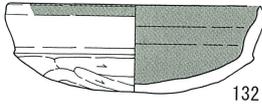
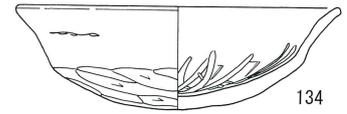
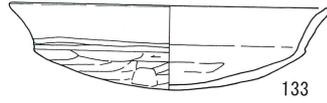
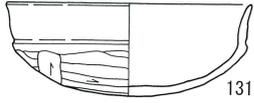


130



第362図 流路跡出土遺物 (13)

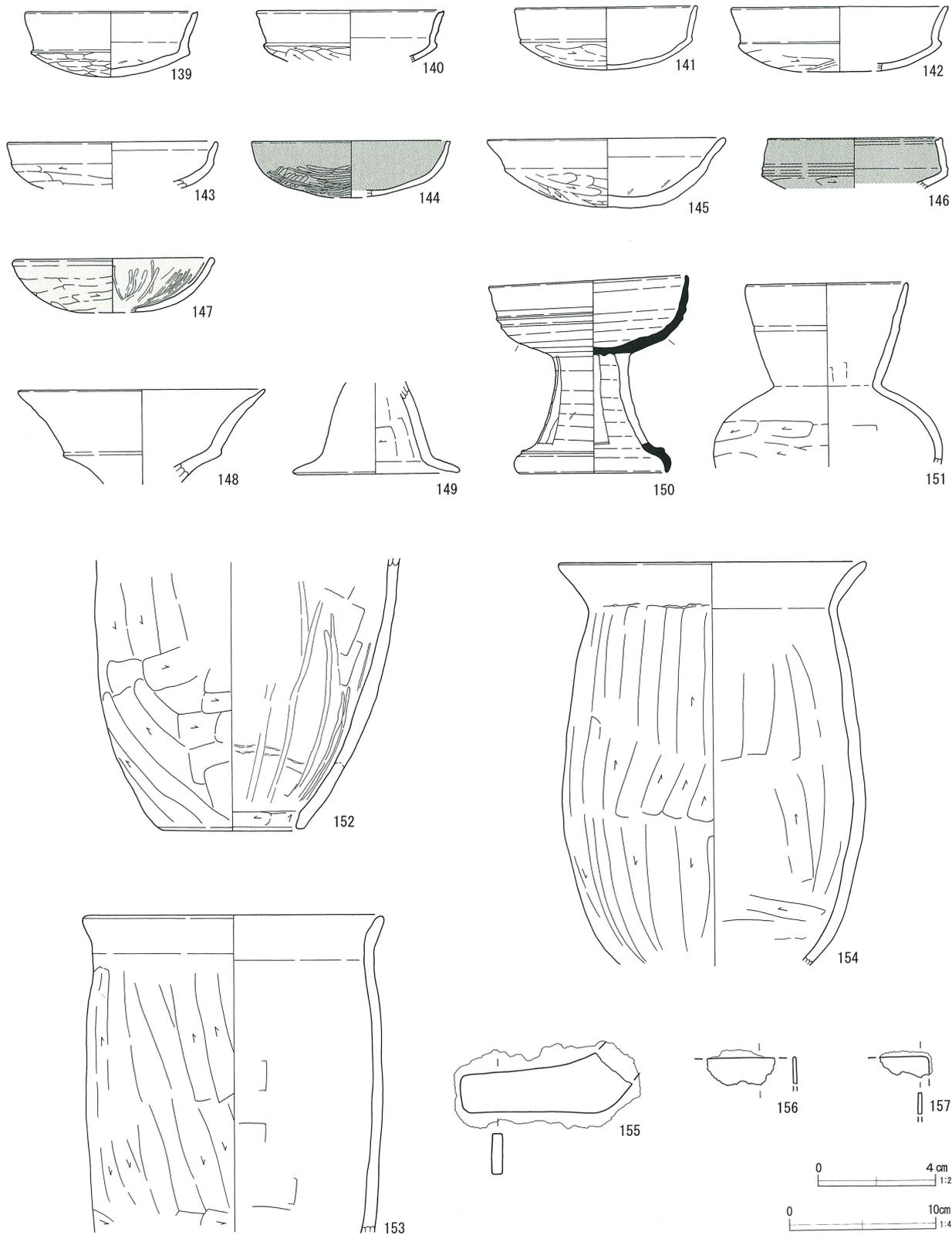
E-6



0 10cm
1:4

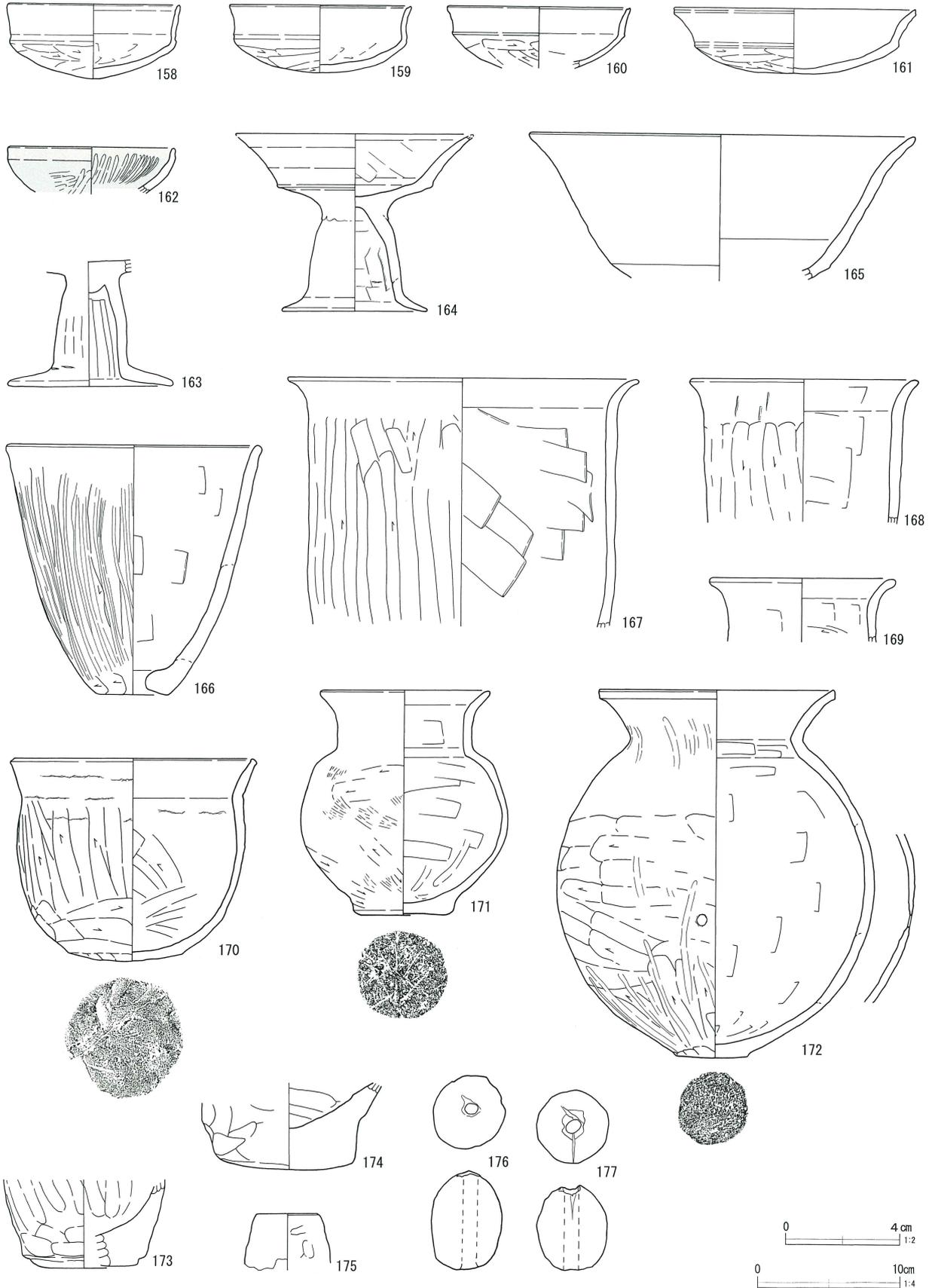
第363図 流路跡出土遺物 (14)

F-1



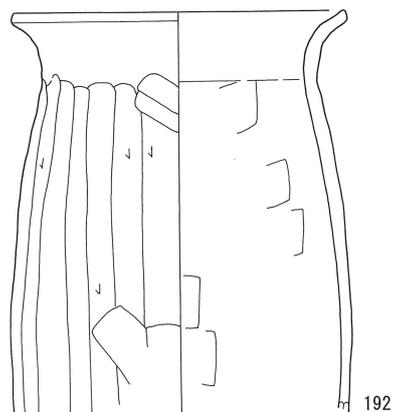
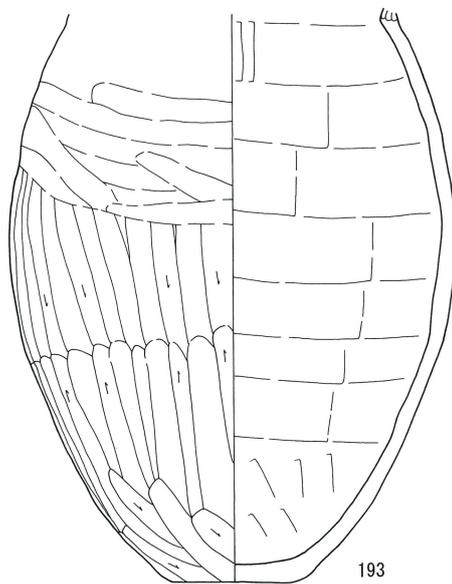
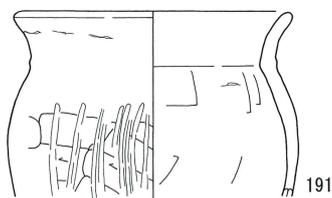
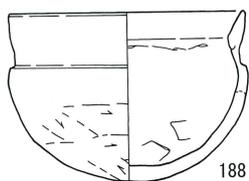
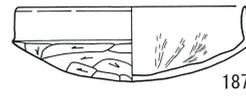
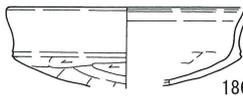
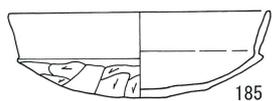
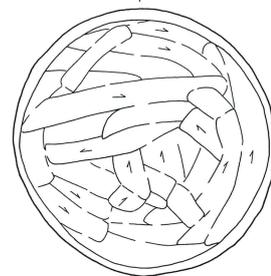
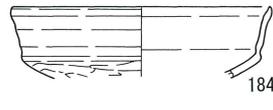
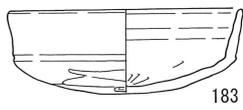
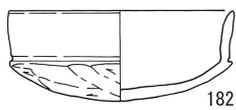
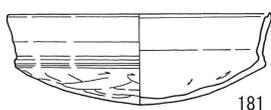
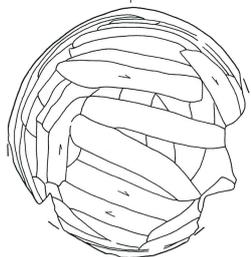
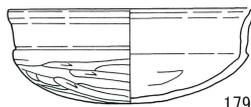
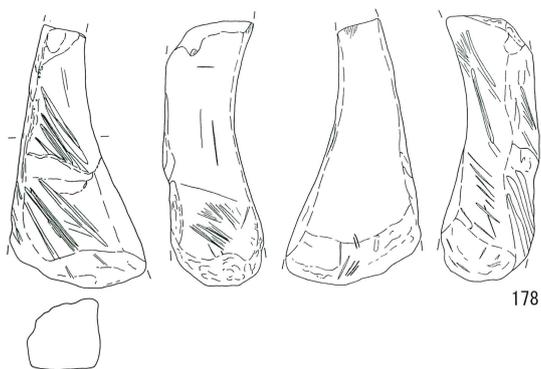
第364図 流路跡出土遺物 (15)

F-2



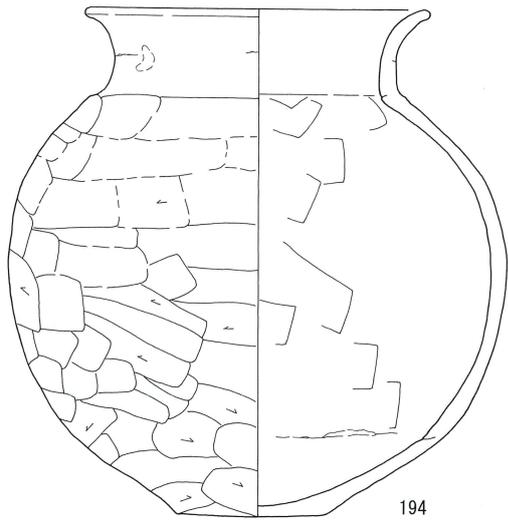
第365図 流路跡出土遺物 (16)

F-3

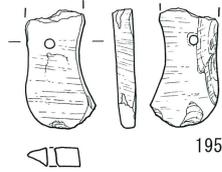


0 10cm 1:4

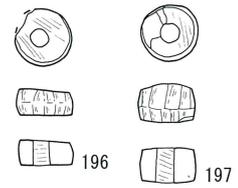
第366图 流路跡出土遺物 (17)



194

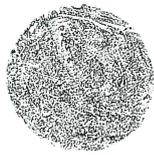


195

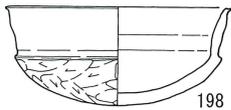


196

197



F-4



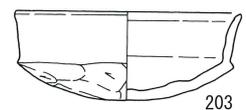
198



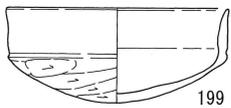
201



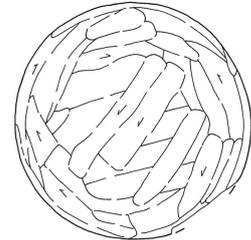
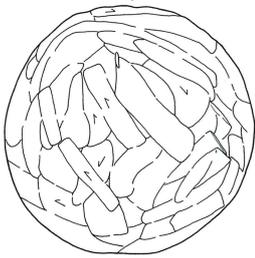
202



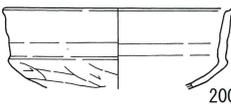
203



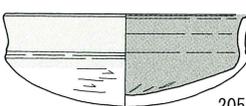
199



204



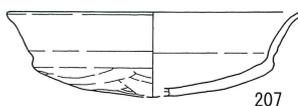
200



205



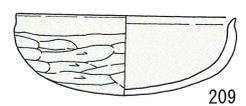
206



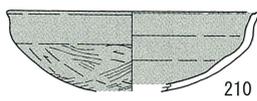
207



208



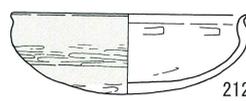
209



210



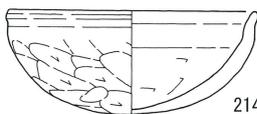
211



212



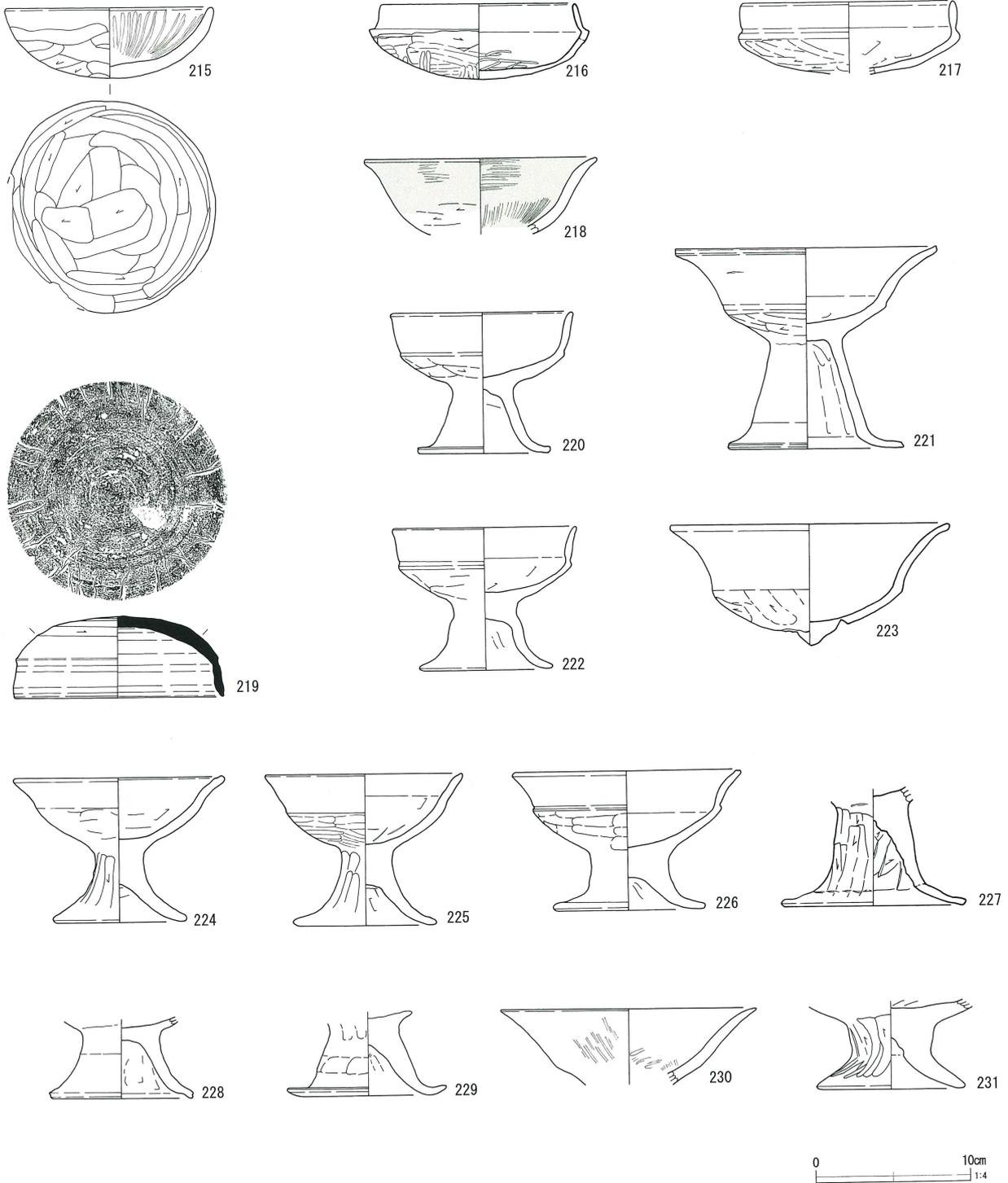
213



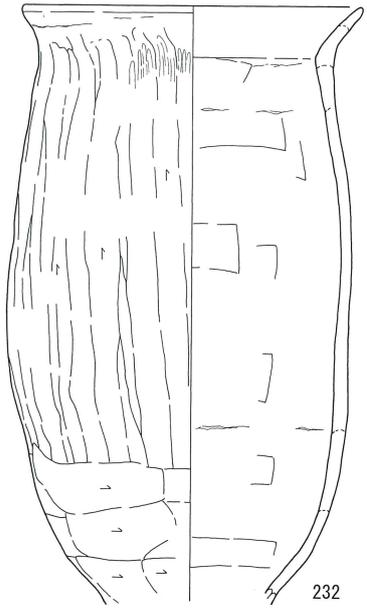
214



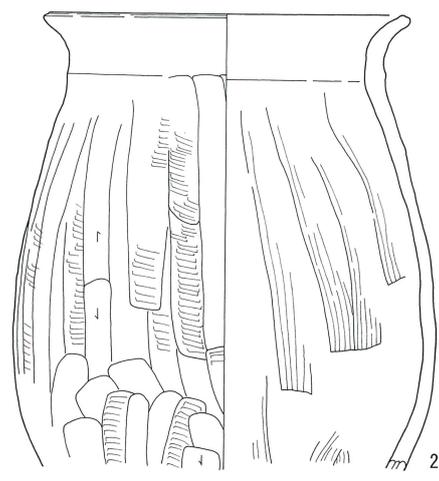
第367图 流路跡出土遺物 (18)



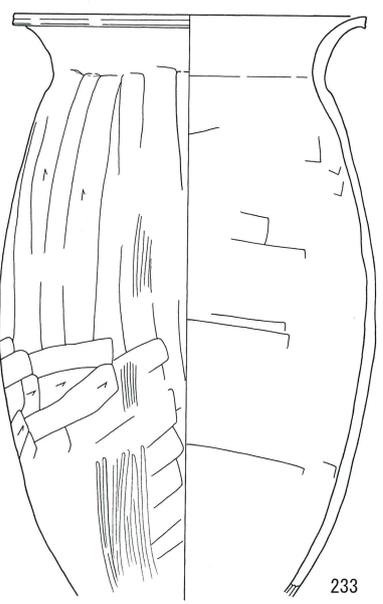
第368図 流路跡出土遺物 (19)



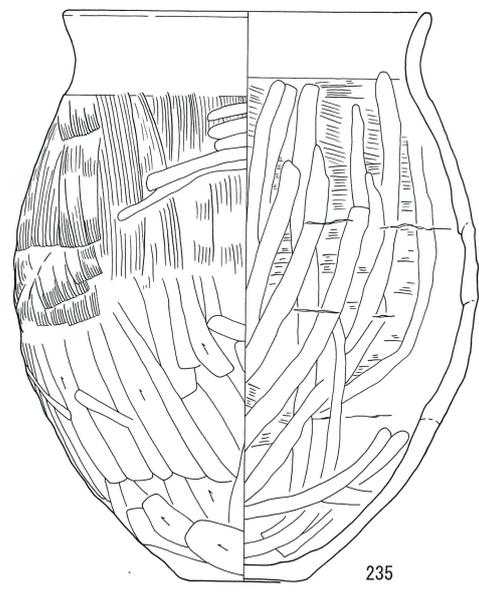
232



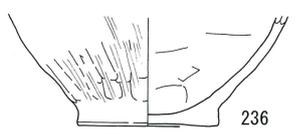
234



233



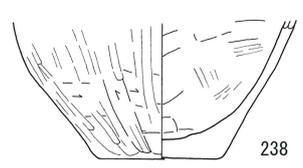
235



236



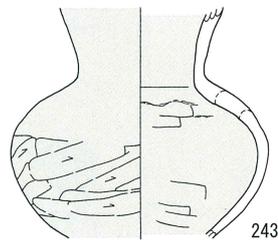
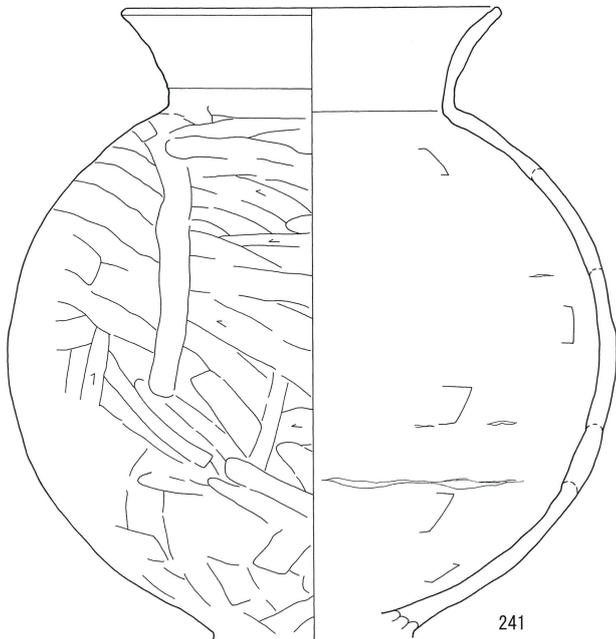
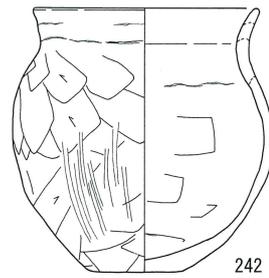
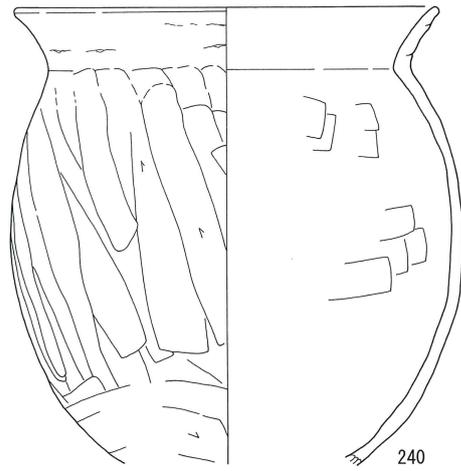
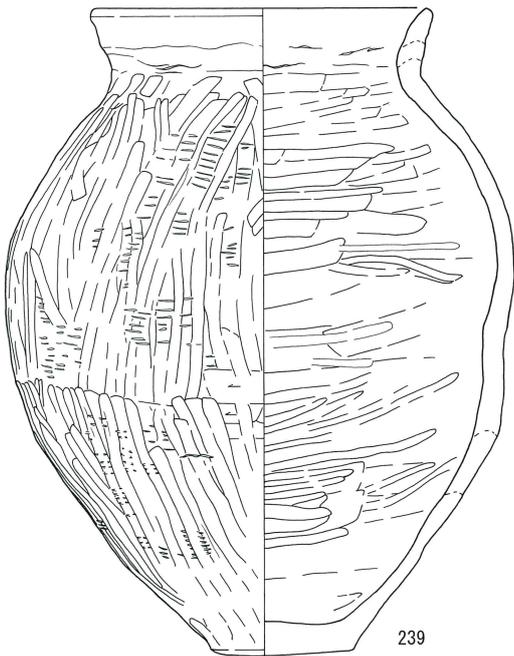
237



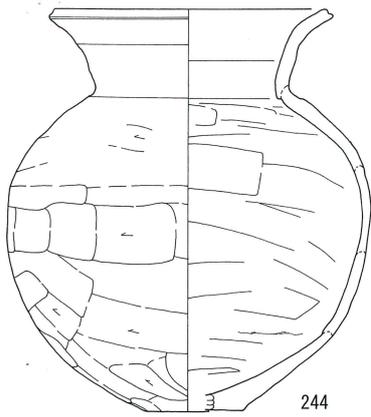
238



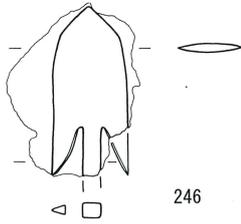
第369図 流路跡出土遺物 (20)



第370図 流路跡出土遺物 (21)



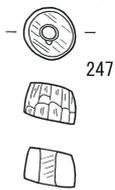
244



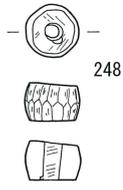
246



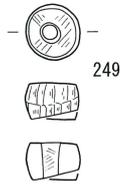
245



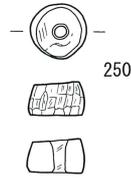
247



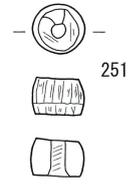
248



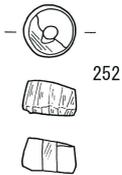
249



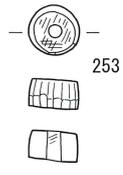
250



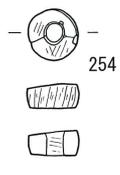
251



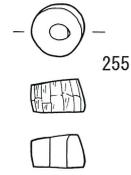
252



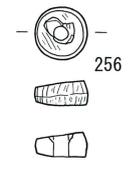
253



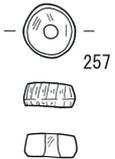
254



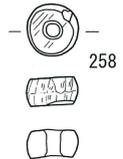
255



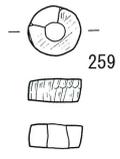
256



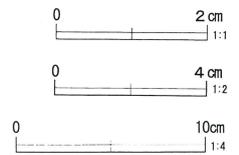
257



258

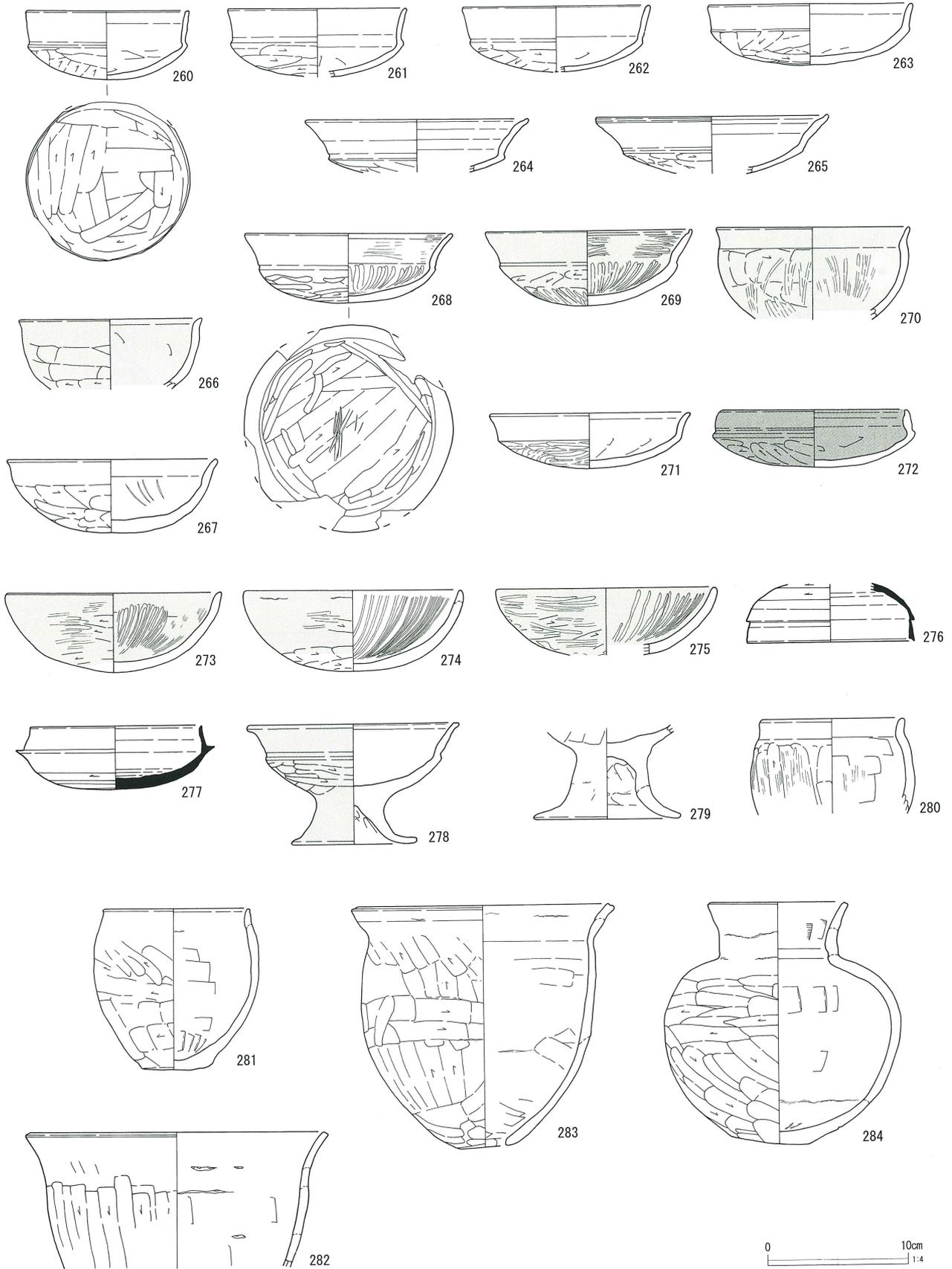


259

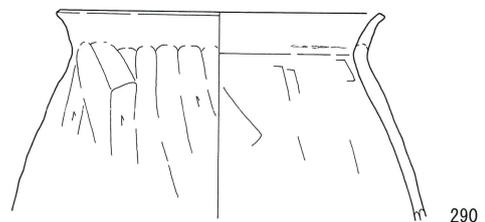
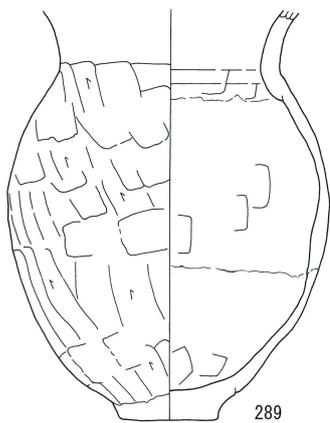
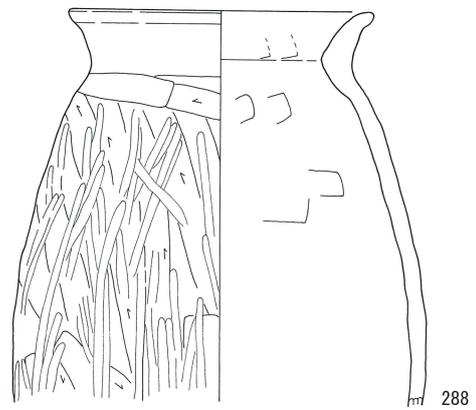
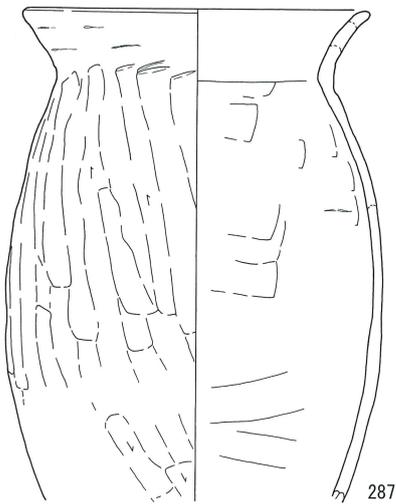
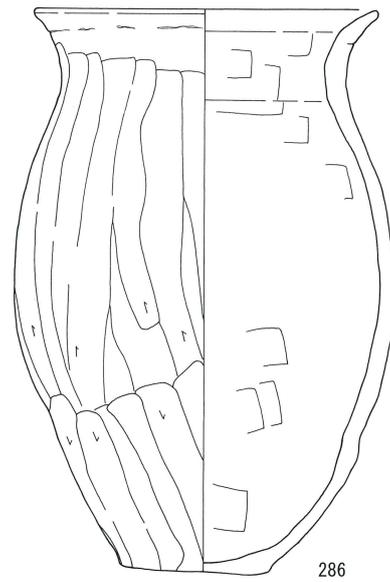
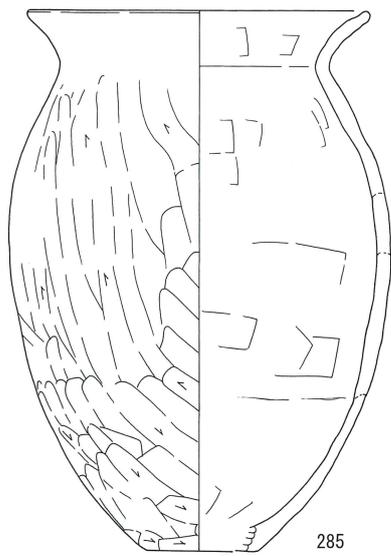


第371図 流路跡出土遺物 (22)

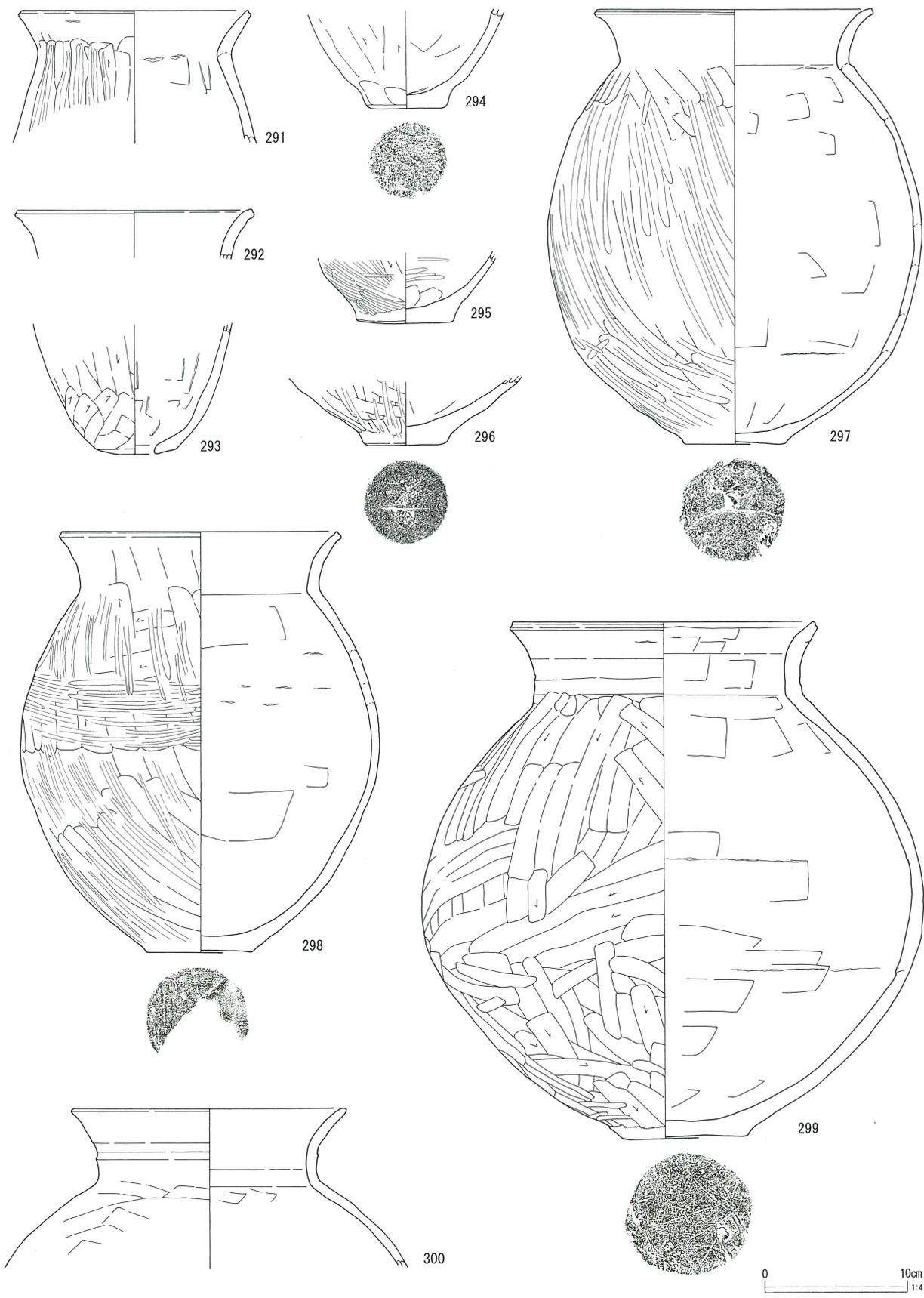
F-5



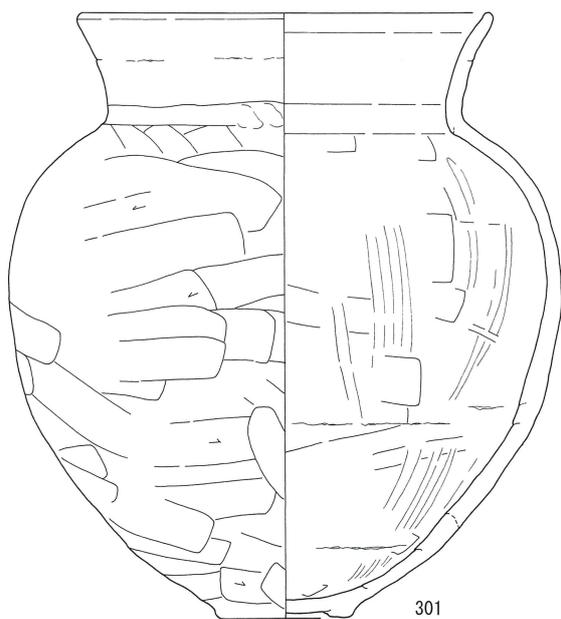
第372図 流路跡出土遺物 (23)



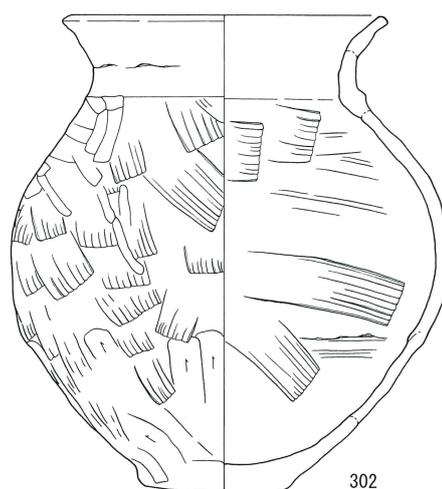
第373図 流路跡出土遺物 (24)



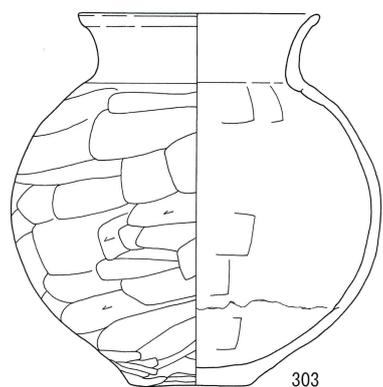
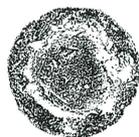
第374図 流路跡出土遺物 (25)



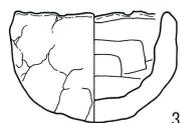
301



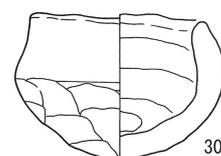
302



303



304



305



306



307



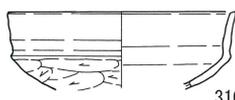
308



F-6



309



310



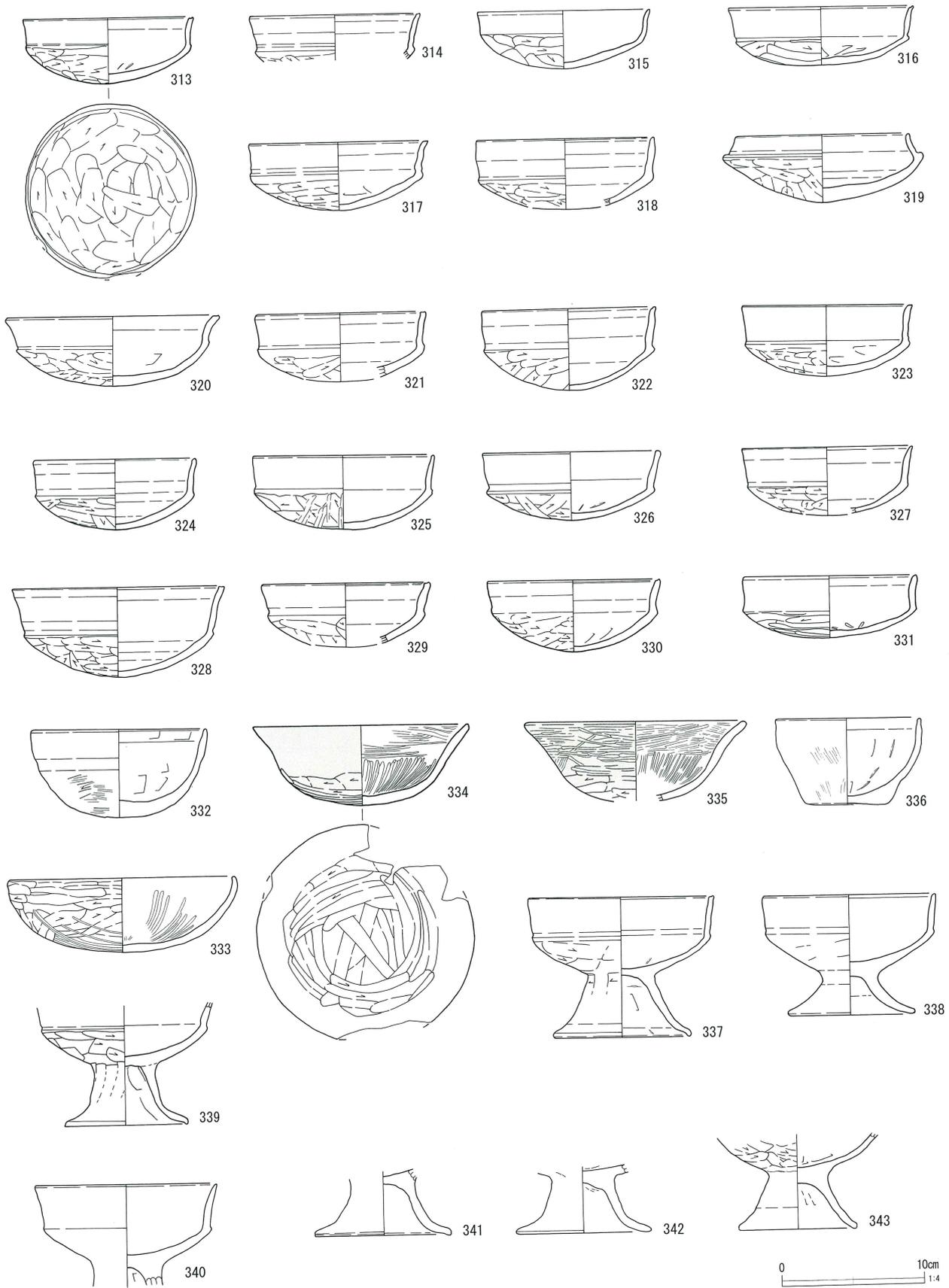
311



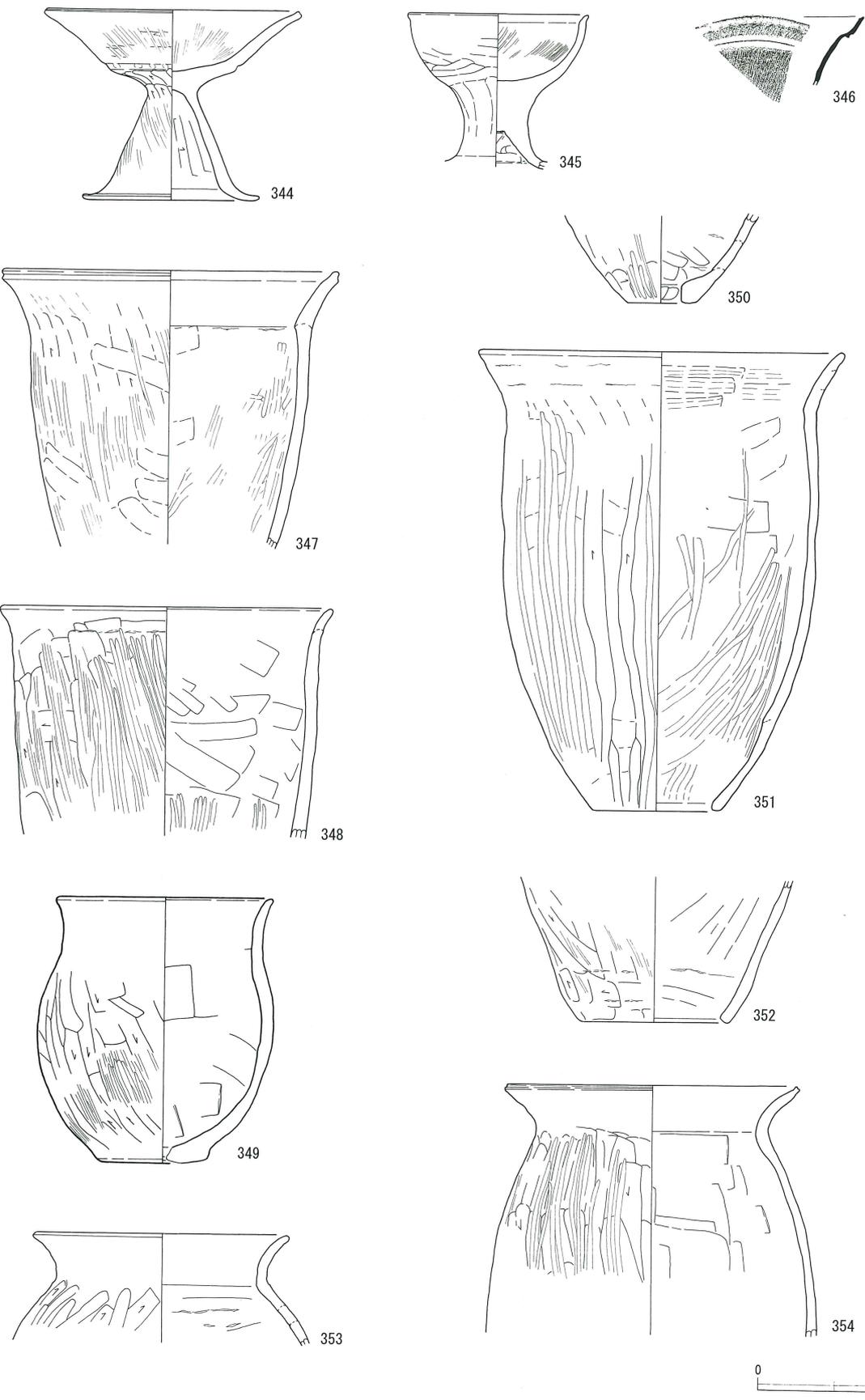
312



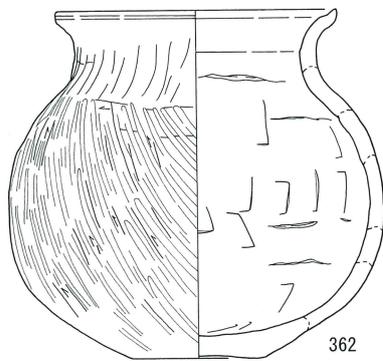
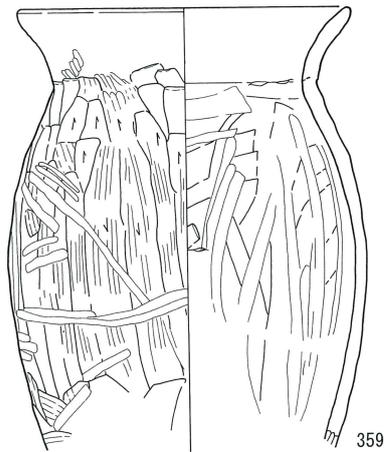
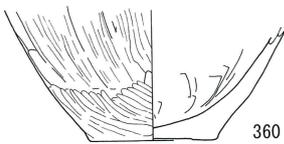
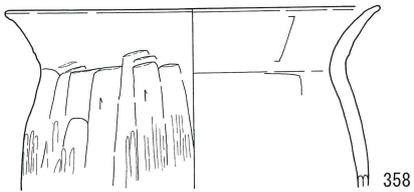
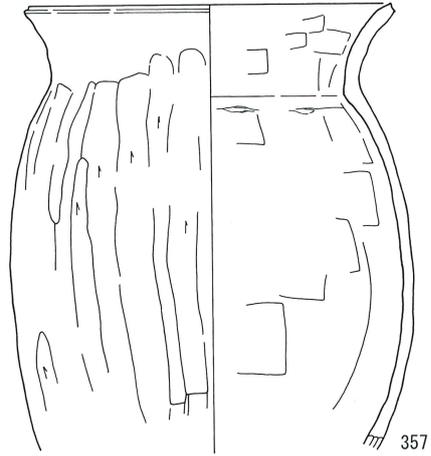
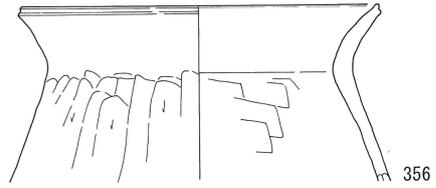
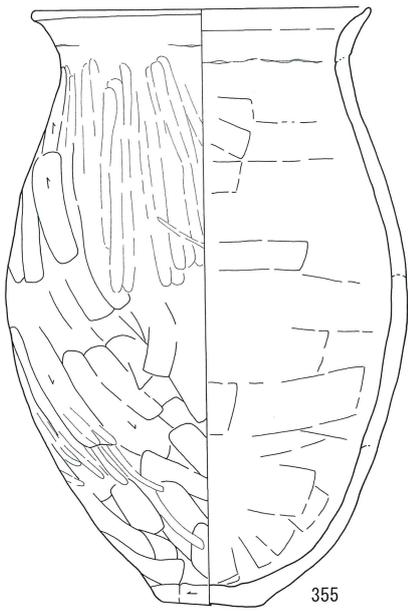
第375図 流路跡出土遺物 (26)



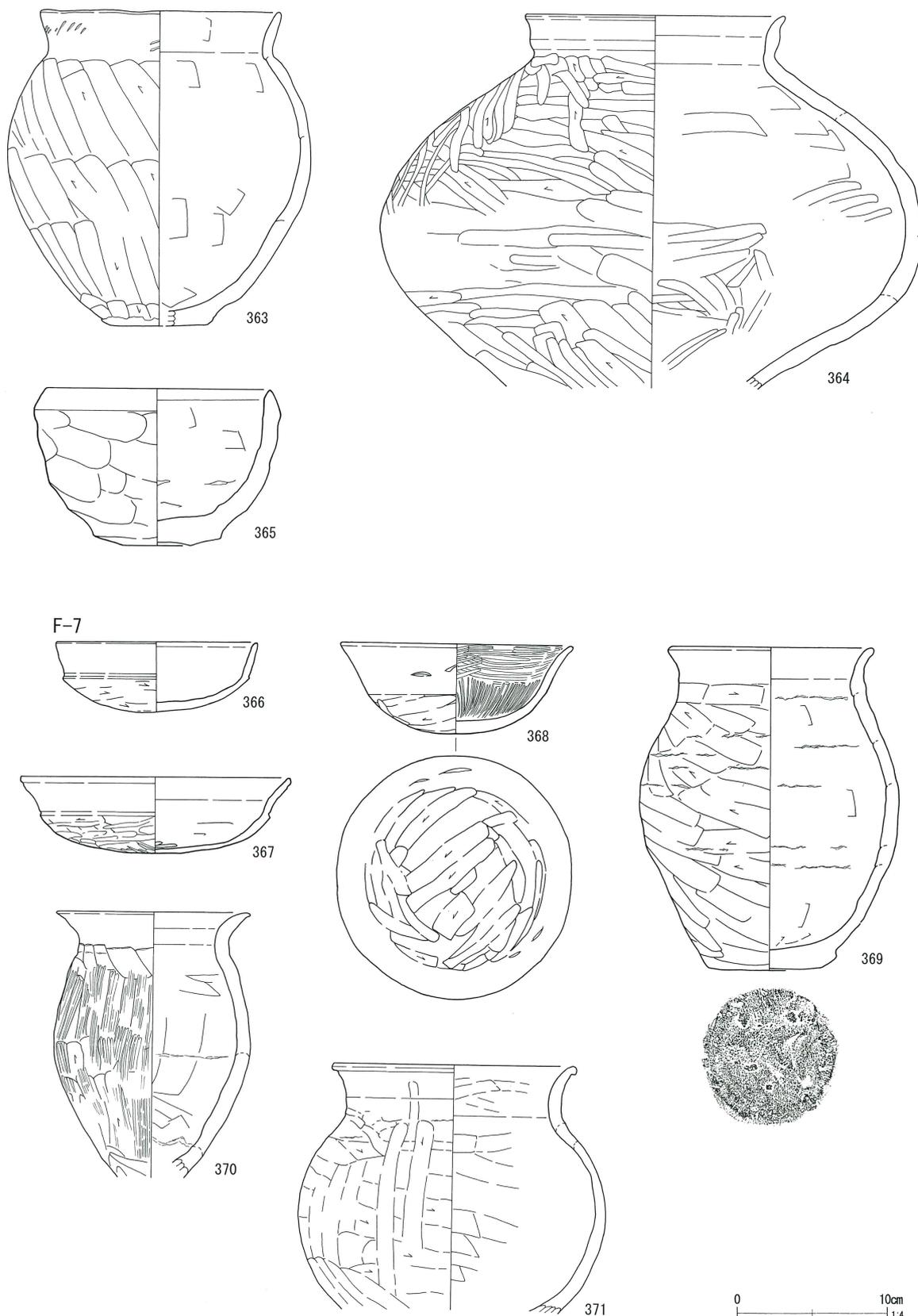
第376图 流路跡出土遺物 (27)



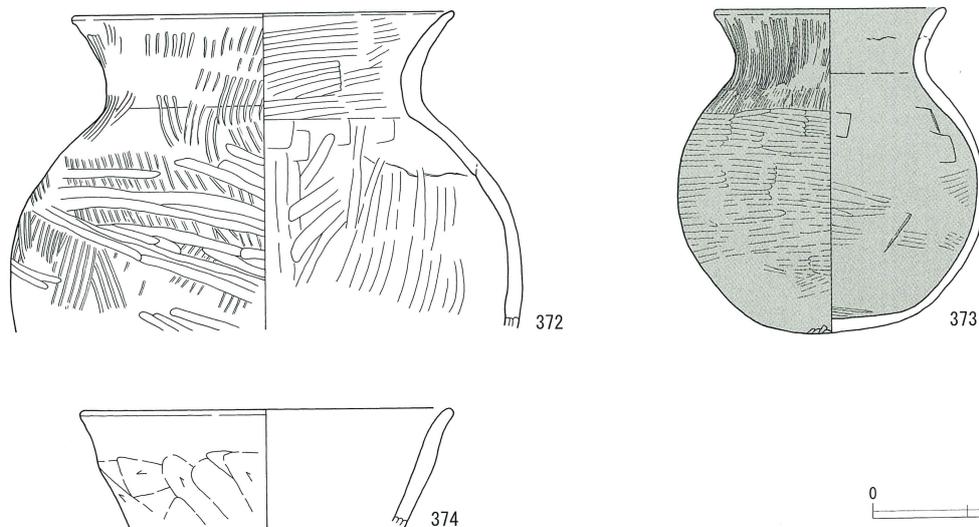
第377図 流路跡出土遺物 (28)



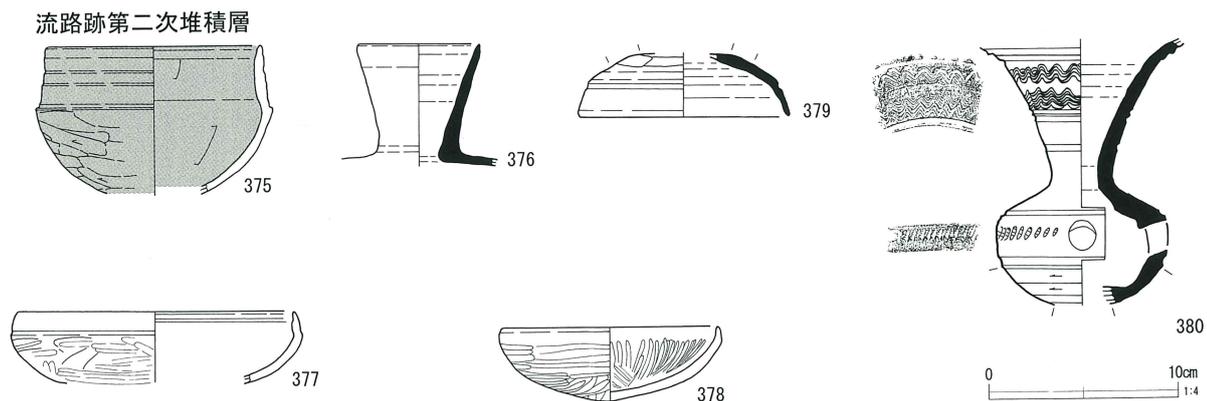
第378図 流路跡出土遺物 (29)



第379図 流路跡出土遺物 (30)



第380図 流路跡出土遺物 (31)



第381図 流路跡出土遺物 (32)

また、粗粒砂である第二次堆積層からも、遺物は出土しているが、その量はごくわずかである。このことは、先述のように、この層が河川の氾濫に由来していること、またその形成期間が非常に短期間だったことに起因するものと思われる。

第381図では、第二次堆積層出土遺物を示した。出土遺物には、土師器杯や須恵器杯・提瓶・ハソウなどが見られた。377は6世紀前半、375は7世紀第I四半期、378は7世紀第IV四半期に位置づけられ、

6世紀後半頃とした第二次堆積層の形成年代と合わないが、377は居住域から流されてきた混入で、375と378は本来、第二次堆積層に掘り込まれた遺構に帰属したものであろう。

376の須恵器甕や379の須恵器杯蓋は、6世紀後半に位置づけられ、第二次堆積層の形成年代を表しているものと思われる。

第133表 流路跡出土遺物観察表 (E-1) (第350~352図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版	
1	土師器	坏	13.3	5.2	—	142.5	75	群東	雲	普通	橙	E-1g79	174-10	
2	土師器	坏	11.9	5.0	—	184.7	85	群東	雲、針	普通	橙			
3	土師器	坏	(12.3)	4.1	—	44.8	20	埼玉北	雲、針	普通	橙	E-1g80		
4	土師器	坏	(13.6)	4.4	—	93.4	35	群東	雲	普通	橙	E-1g89		
5	土師器	坏	(11.7)	4.9	—	121.5	55	埼玉北	雲、角	普通	橙	E-1g90		
6	土師器	坏	11.8	4.4	—	99.8	55	埼玉南	雲	普通	橙	E-1g89		175-1
7	土師器	坏	13.0	4.1	—	147.6	90	埼玉北	針	普通	にぶい橙	外面赤彩か		175-2
8	土師器	坏	(13.8)	4.4	—	116.0	45	太田	針	良好	黒			
9	土師器	坏	(16.1)	4.5	—	147.7	50	下総	針	普通	橙			
10	土師器	坏	(16.2)	4.2	—	64.1	20	埼玉北	針	普通	橙			
11	土師器	高坏	(16.7)	10.8	—	255.3	25	群東	角	普通	橙	E-1g		
12	土師器	高坏	—	4.4	9.4	127.5	50	群東		普通	橙			
13	土師器	甕	18.0	35.3	5.9	2112.2	85	埼玉北	角	普通	淡橙	E-1g90	218-1	
14	土師器	甕	17.4	22.5	—	1172.5	50	埼玉北	雲	普通	灰黄	E-1g79	194-1	
15	土師器	甕	18.2	27.2	—	1266.8	75	埼玉南	角	良好	赤褐	E-1g80・81、E-2g71	218-2	
16	土師器	甕	—	13.7	6.7	559.8	30	栃南	角	普通	にぶい黄橙	E-1g80	194-2	
17	土師器	甕	(18.4)	12.7	—	194.2	10	茨西	雲	普通	橙	E-1g89		
18	土師器	甕	21.0	35.0	6.8	3874.0	85	埼玉東	角	普通	にぶい橙	E-1g79	218-3	
19	土師器	甕	18.4	33.1	7.2	2822.2	70	埼玉北	角	普通	にぶい黄橙	E-1g79・80	218-4	
20	土師器	甕	(18.8)	33.6	6.9	2970.5	95	群東	雲	普通	にぶい黄橙	赤彩か	219-1	
21	土師器	壺	(17.1)	30.4	10.4	2937.9	75	茨西		普通	にぶい黄橙		219-2	
22	土師器	甕	15.0	19.3	7.4	1185.3	85	茨西	雲、針	普通	明黄褐	E-1g79	194-3	
23	土製品	ミニチュア	2.6	3.7	3.5	58.8	95		角	普通	にぶい橙	E-1g80	175-3	
24	鉄製品	不明	長4.9幅1.9厚(0.4)重21.2										E-1g 延板状	237-1

第134表 流路跡出土遺物観察表 (E-2) (第352~354図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
25	土師器	坏	11.6	5.2	—	142.7	70	群東		普通	橙	E-2g84	175-4
26	土師器	坏	11.9	4.2	—	152.0	90	群東		普通	黄橙	E-2g84	175-5
27	土師器	坏	12.4	4.5	—	211.3	100	群東		普通	橙	E-2g71	175-6
28	土師器	坏	11.6	4.2	—	120.3	95	群東		普通	橙	E-2g	175-7
29	土師器	坏	11.6	4.7	—	125.8	90	群東		普通	黄橙	E-2g84	175-8
30	土師器	坏	12.0	5.5	—	177.9	100	群東		普通	橙	E-2g72	175-9
31	土師器	坏	12.3	4.3	—	164.9	95	群東		普通	橙	E-2g71	175-10
32	土師器	坏	12.3	5.2	—	171.2	100	群東		普通	橙	E-2g75	176-1
33	土師器	坏	(13.4)	5.2	—	115.9	45	埼玉北		普通	橙	E-2g	176-2
34	土師器	坏	14.0	4.8	—	170.6	65	群東	針	普通	橙	E-2g	176-3
35	土師器	坏	13.0	5.7	—	173.6	100	群東		普通	橙	E-2g72	176-4
36	土師器	坏	(17.0)	4.4	—	198.7	60	埼玉北		普通	橙	E-2g	176-5
37	土師器	坏	(17.2)	3.7	—	124.1	15	埼玉北		普通	明黄橙	E-2g74・84	
38	土師器	坏	(18.8)	4.4	—	43.1	15	埼玉北		普通	橙	E-2g	
39	土師器	坏	13.5	4.0	—	203.9	90	佐野	雲	良好	橙	E-2g73、F-2g73	176-6
40	土師器	坏	(11.8)	4.8	—	111.2	30	茨西		良好	にぶい赤褐	E-2g73・91、F-2g73	
41	土師器	坏	(13.6)	2.9	—	31.6	20	群西	角	普通	橙	E-2g79・85・96	
42	土師器	坏	14.9	4.8	—	137.3	70	栃南~茨西		普通	赤	E-2g73・75・84・94	176-7
43	土師器	壺	11.0	5.1	4.9	213.7	70	茨西	角	普通	黄橙	E-2g	176-8
44	土師器	壺	13.0	8.9	5.4	499.7	85	茨西~千葉	角	普通	にぶい黄橙		194-4
45	須恵器	臚	—	4.3	—	53.6	5	菅ノ沢		普通	灰	E-2g98	
46	土師器	高坏	16.7	12.4	11.9	585.2	80	群東	雲	普通	橙	E-2g86 全面赤彩か	194-5
47	須恵器	高坏	—	4.2	—	36.4	5	南比企	角、針	良好	灰	E-2g86	
48	土師器	甕	(20.6)	16.8	5.2	815.2	50	茨西	角	普通	橙	E-2g75・84	194-6
49	土師器	甕	27.4	30.2	10.7	2108.1	70	埼玉北	角	普通	橙		219-3

第135表 流路跡出土遺物観察表 (E-2) (第354~356図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
50	土師器	甌	26.5	29.0	9.6	2131.0	95	群東		普通	黄褐	E-2g	219-4
51	土師器	甕	(28.2)	16.3	-	244.5	5	常陸	角	普通	にぶい黄橙	E-2g	
52	土師器	甕	17.0	26.5	-	1142.8	50	埼玉	角	普通	橙	E-2g	220-1
53	土師器	甕	(18.6)	21.8	-	506.5	20	群東	角	普通	灰黄	E-2g	220-2
54	土師器	甕	(17.0)	8.2	-	258.5	20	群東	雲、角	良好	灰黄	E-2g	
55	土師器	甕	(18.4)	6.2	-	112.0	5	群東	角	普通	にぶい赤褐	E-2g94	
56	土師器	甕	(18.0)	8.5	-	342.7	15	群東	角	普通	赤褐	E-2g73	
57	土師器	甕	(16.0)	12.2	-	220.7	10	茨西	角	普通	橙	E-2g93・94	
58	土師器	甕	(18.8)	12.8	-	361.5	20	茨西	雲、角	普通	にぶい黄橙	E-2g	
59	土師器	甕	18.4	27.2	-	1445.2	65	茨西		普通	灰黄	E-2g	220-3
60	土師器	甕	18.4	19.4	-	1405.4	25	茨西	角	普通	淡橙	E-2g73	195-1
61	土師器	甕	(12.6)	15.2	-	536.8	35	茨西		普通	にぶい黄橙	E-2g86・97	
62	土師器	甕	(17.2)	16.5	-	385.8	30	茨西	角	普通	淡橙	E-2g73	
63	土師器	甕	(20.0)	29.4	4.2	2632.6	40	茨西	雲、角	普通	にぶい赤褐	E-2g84	220-4
64	土師器	甕	(18.0)	13.2	-	401.0	30	茨西	角、軽	普通	にぶい赤褐	E-2g75・84・85	195-2
65	土師器	甕	(16.6)	8.3	-	84.2	5	茨西	雲	普通	橙	E-2g	
66	土師器	甕	18.6	10.0	-	398.0	20	茨西		良好	橙	E-2g	
67	土師器	甕	(16.0)	7.8	-	181.4	15	茨西	雲、針	普通	橙	E-2g	
68	土師器	甕	18.1	13.7	-	290.3	15	栃南		普通	浅黄	E-2g	195-3
69	土師器	甕	17.2	27.7	-	1708.7	85	栃南	角、軽	普通	赤橙	E-2g73・83	221-1
70	土師器	甕	21.0	29.4	5.8	2313.0	70	埼玉	角	普通	にぶい橙	E-2g75・84・85	221-2
71	土師器	甕	(21.0)	6.3	-	239.6	5	群東		普通	にぶい黄	E-2g84	
72	土師器	壺	13.8	21.8	-	1293.4	60	埼玉	雲	良好	橙	E-2g73	195-4
73	土師器	埴	-	7.1	3.2	310.2	85	栃南	雲	良好	橙	E-2g73	195-5
74	土師器	甕か	-	5.9	(5.3)	160.7	20	茨西	角	普通	明黄褐	E-2g83	
75	土製品	ミニチュア	(4.9)	3.9	(3.9)	30.5	40			普通	にぶい橙	E-2g	
76	石製品	白玉	径0.72孔径0.20厚0.45重0.42				-					E-2g	234-1
77	土製品	土玉	径2.4×(2.2)孔径0.5×(0.5)厚2.7重7.0残50							普通	にぶい橙	E-2g	233-1
78	土製品	土玉	径2.6×2.5孔径0.5×0.6厚2.6重16.0残100							普通	灰褐	E-2g	233-2
79	貝殻・炭		長2.3幅2.0厚1.6重3.9								浅黄橙	E-2g、5孔、被熱	238-2

第136表 流路跡出土遺物観察表 (E-3) (第357図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
80	土師器	坏	13.0	5.0	-	166.6	95	群東	雲	普通	橙	E-3g	176-9
81	土師器	坏	(12.6)	5.0	-	51.1	15		雲、針	普通	橙	E-3g85	
82	土師器	坏	(15.8)	6.4	-	58.4	20	埼玉		普通	橙	E-3g84	
83	土師器	坏	(11.9)	4.6	-	77.2	40	群東		普通	橙	E-3g98	
84	土師器	坏	(13.7)	5.5	-	147.0	35	茨西		普通	にぶい橙	E-3g81	
85	土師器	高坏	(13.2)	9.2	(8.6)	294.4	65	群東		普通	にぶい黄橙	E-3g81	
86	土師器	高坏	(16.0)	5.0	-	118.6	15	茨西	雲	普通	橙	E-3g85	
87	土師器	甕	17.1	31.7	6.6	1911.4	95	栃南		普通	にぶい橙	E-3g 内外面輪積痕	221-3

第137表 流路跡出土遺物観察表 (E-4) (第357図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
88	土師器	坏	12.1	4.6	-	182.8	95	埼玉	雲、角	普通	橙	E-4g	176-10
89	土師器	坏	12.3	5.1	-	184.0	100	群東		良好	明赤褐	E-4g78	177-1
90	土師器	坏	(12.0)	5.2	-	173.9	90	埼玉	雲、針	普通	橙	E-4g78	177-2
91	土師器	坏	(12.2)	5.4	-	113.0	50	群東		普通	橙	E-4g78	177-3
92	土師器	坏	(12.2)	3.9	-	82.3	30	群東	雲	普通	橙	E-4g82	
93	土師器	坏	12.4	5.5	-	144.1	80	埼玉		普通	にぶい褐	E-4g78	
94	土師器	坏	12.7	5.4	-	179.0	80	群東		普通	橙	E-4g67・68、E-5g68	177-4
95	土師器	坏	13.2	4.8	-	165.5	70	群東	雲	普通	橙	E-4g78	
96	土師器	坏	15.2	4.4	-	211.8	85	埼玉	角	普通	橙	E-4g	177-5
97	土師器	坏	(5.9)	7.5	-	149.1	45	群東		普通	橙	E-4g78	

第138表 流路跡出土遺物観察表 (E-4) (第357~360図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版	
98	土師器	坏	(17.4)	6.3	—	388.1	75	茨西	雲	良好	橙	E-4g94	177-6	
99	土師器	坏	16.2	4.0	—	232.0	95	群東	雲、針	良好	橙	E-4g64	177-7	
100	土師器	坏	(11.8)	4.2	—	130.3	55	埼玉北	角	良好	橙	E-4g		
101	土師器	坏	(10.8)	4.6	—	145.2	70	埼玉北		普通	褐灰	E-4g52		
102	土師器	坏	12.9	5.2	—	149.0	70	群東		普通	橙	E-4g67	177-8	
103	土師器	坏	12.2	4.6	—	158.1	70	埼玉南	雲、針	良好	にぶい黄橙	E-4g	177-9	
104	土師器	坏	11.9	4.8	—	158.1	80	比企		普通	にぶい橙	E-4g	177-10	
105	土師器	甌	18.3	15.9	4.2	861.5	95	埼玉北		普通	にぶい橙	E-4g61	195-6	
106	土師器	鉢	15.2	10.0	6.0	443.7	80	茨西	雲	普通	浅黄	E-4g38・68	196-1	
107	土師器	甌	26.6	29.2	10.3	2010.0	80	群東	雲	普通	にぶい黄橙	E-4g62	196-2	
108	土師器	甕	18.1	17.0	—	547.6	30	群東		普通	浅黄	E-4g83 被熱	196-3	
109	土師器	甕	(17.0)	33.1	—	1621.7	75	埼玉北	角	普通	明褐灰	E-4g83	221-4	
110	土師器	甕	22.2	38.0	8.2	2494.3	65	群東		普通	灰黄褐	E-4g68、E-5g68	221-1	
111	土師器	甕	(20.4)	4.2	—	89.0	5	埼玉北	角	普通	にぶい黄橙	E-4・5g		
112	土師器	甕	(17.5)	33.4	4.3	1543.5	60	茨西		普通	橙	E-4g83	222-2	
113	土師器	甕	17.3	31.7	—	604.5	30	茨西	雲、角	普通	にぶい黄橙	E-4g52	222-3	
114	土師器	甕	—	22.1	5.8	737.2	35	群東	角	普通	にぶい橙	E-4g53	196-4	
115	土師器	甕	16.3	30.2	—	1177.0	75	栃南		普通	にぶい橙	E-4g67	222-4	
116	土師器	甕	18.3	32.1	6.0	1663.1	90	栃南	雲、角	良好	浅黄橙	E-4g63	223-1	
117	土師器	甕	16.4	16.1	—	489.9	25	群東		普通	にぶい橙	E-4g86		
118	土師器	壺	—	20.8	5.0	1590.5	70	群東	雲	良好	橙	E-4g31		
119	土製品	土玉	径2.4×(2.5)孔径0.5×(0.5)厚2.7重6.7残30								普通	にぶい橙	E-4g	233-1

第139表 流路跡出土遺物観察表 (E-5) (第361・362図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
120	土師器	坏	14.8	4.8	—	302.6	95	茨西		普通	にぶい橙	E-5g91	178-1
121	土師器	坏	9.9	7.7	—	276.2	90	埼玉北	雲	良好	橙	E-5g55	196-5
122	土師器	甕	(19.4)	12.4	—	368.9	65	埼玉北		普通	橙	E-5g91	196-6
123	土師器	甕	—	24.5	5.2	975.5	30	埼玉北	雲、角	普通	灰黄褐	E-5g75	197-1
124	土師器	甕	16.7	28.4	—	1075.6	30	群東		普通	にぶい橙	E-5g97 外面一部被熱	223-2
125	土師器	甕	(17.4)	35.3	6.0	1490.2	65	栃南	角	普通	灰黄	E-5g85	223-3
126	土師器	壺	—	27.2	—	2451.3	50	茨西	角、軽	普通	にぶい黄橙	E-5g89	197-2
127	土師器	壺	23.7	44.0	8.3	6808.1	85	埼玉北	雲、角、軽	良好	明赤褐	E-5g73	223-4
128	土師器	壺	—	31.8	9.5	1932.4	40	茨西	雲	普通	灰白	E-5g91	197-3
129	鉄滓		長8.9幅6.8厚3.7重220.8									E-5g	236-3
130	鉄滓		長8.7幅7.0厚3.8重170.6									E-5g	236-3

第140表 流路跡出土遺物観察表 (E-6) (第363図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
131	土師器	坏	(13.0)	4.9	—	135.6	90	群東	雲、角	良好	橙	E-6g95	178-2
132	土師器	坏	(13.3)	4.6	—	124.8	45	栃南	雲	普通	浅黄	E・F-6g 内面漆付着	178-3
133	土師器	坏	17.0	4.5	—	235.1	90	埼玉北	雲、角、軽	良好	明赤褐	E-6g68	178-4
134	土師器	坏	17.0	5.5	—	374.6	90	茨西	角	良好	にぶい黄橙	E-6g92	178-5
135	土師器	甌	11.2	13.4	6.5	497.8	80	茨西	角、軽	良好	橙	E-6g94	197-4
136	土師器	甕	(15.9)	18.9	—	888.5	80	群東	角	普通	明赤褐	E-6g82	197-5
137	土師器	甕	27.4	32.3	9.6	4890.8	95	茨西	雲、角	良好	にぶい黄橙	E-6g96	224-1
138	土師器	壺	17.8	43.4	8.3	4028.4	50	栃南	雲	普通	橙	E-6g84	224-2

第141表 流路跡出土遺物観察表 (F-1) (第364図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
139	土師器	坏	11.8	4.5	—	116.2	50	埼玉北		普通	橙	F-1g	
140	土師器	坏	(12.8)	3.5	—	34.3	20	埼玉北		良好	橙	F-1g	
141	土師器	坏	(12.4)	4.3	—	77.3	40	埼玉北	針	普通	橙	F-1g	

第142表 流路跡出土遺物観察表 (F-1) (第364図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
142	土師器	坏	(14.8)	4.4	—	61.7	20	群東	針	普通	橙	F-1g	
143	土師器	坏	(14.2)	3.2	—	33.4	10	茨西	雲	普通	にぶい黄橙	F-1g	
144	土師器	坏	13.7	3.8	—	122.5	70	佐野	雲	普通	黒	F-1g	
145	土師器	坏	16.2	4.7	—	253.8	50	茨西	針	良好	灰黄褐	F-1g 底部外面に黒斑	178-6
146	土師器	坏	(11.8)	3.5	—	52.7	15	栃南		良好	黒	F-1g	
147	土師器	坏	(13.4)	3.7	—	106.8	20	栃南	雲	普通	赤	F-1g	
148	土師器	高坏	17.0	6.4	—	334.4	40	群東	針	普通	橙	F-1g	
149	土師器	高坏	—	6.3	(11.0)	90.7	10	群東	雲、針	普通	橙	F-1g	
150	須恵器	高坏	13.6	13.5	10.2	358.9	60	東海	針	普通	灰白	F-1g	197-6
151	土師器	埴	(10.8)	9.6	—	217.8	25	群東		普通	橙	F-1g	
152	土師器	甑	—	18.5	9.9	797.5	45	栃南	雲	普通	浅黄	F-1g	
153	土師器	甕	(10.0)	21.7	—	1029.7	50	茨西		普通	にぶい黄橙	F-1g	
154	土師器	甕	(10.3)	27.6	—	1131.1	35	茨西		普通	浅黄	F-1g	224-3
155	鉄製品	不明	長(5.9)幅1.8厚0.4重37.0									延板状 F-1g	
156	鉄製品	不明	長(2.3)幅(0.9)厚(0.1)重1.9									板状 F-1g	237-2
157	鉄製品	不明	長(1.7)幅(0.7)厚(0.1)重1.1									板状 F-1g	234-2

第143表 流路跡出土遺物観察表 (F-2) (第365・366図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版	
158	土師器	坏	(12.2)	5.2	—	139.4	45	埼玉北	雲、角、針	良好	橙	底部外面大黒斑	178-7	
159	土師器	坏	(12.8)	4.8	—	99.3	40	埼玉北		普通	橙	外面赤彩か		
160	土師器	坏	(12.8)	4.3	—	26.3	25	群東		普通	にぶい橙	F-2g		
161	土師器	坏	17.0	4.6	—	212.4	75	埼玉北	雲	普通	橙	F-2g	178-8	
162	土師器	坏	(11.6)	3.2	—	28.1	15	栃南	針	良好	赤褐	F-2g		
163	土師器	高坏	—	8.9	11.5	255.3	55	群東	雲	良好	橙	F-2g		
164	土師器	高坏	—	12.4	(10.1)	218.0	35	群東	雲、針	普通	橙	F-2g		
165	土師器	高坏	(27.4)	10.1	—	156.2	15	群東		良好	橙	F-2g		
166	土師器	甑	(17.4)	17.5	(5.1)	503.7	35	茨西	雲、角	普通	にぶい褐	F-2g		
167	土師器	甕	(24.2)	17.4	—	301.5	10	埼玉北	雲	普通	橙	F-2g		
168	土師器	甑か	(15.8)	10.1	—	123.3	5	茨西	雲、角	普通	橙	F-2g		
169	土師器	壺か	(12.6)	4.5	—	67.8	10		雲、角	普通	にぶい黄橙	F-2g		
170	土師器	甕	(16.8)	14.2	(8.1)	460.0	20	群東	雲	普通	にぶい黄橙	F-2g	198-1	
171	土師器	壺	(11.6)	15.7	7.0	600.7	85	茨西		普通	浅黄	外面赤彩か 木葉痕	198-2	
172	土師器	甕	16.4	25.8	5.1	1811.3	90	群東	雲	良好	橙	胴部穿孔	224-4	
173	土製品	ミニチュア	—	3.1	(3.4)	23.9	40	茨西	針	普通	橙	F-2g		
174	土製品	ミニチュア	—	3.1	4.3	87.8	70	茨西	雲、角	普通	浅黄	F-2g		
175	土製品	支脚	—	3.4	4.4	120.5	20			良好	橙	F-2g		
176	土製品	土玉	径2.6×2.5孔径0.4×0.5厚3.5重20.8残100								普通	にぶい橙	F-2g	233-2
177	土製品	土玉	径2.6×2.5孔径0.5×0.5厚3.0重17.3残100								普通	にぶい橙	F-2g	233-2
178	石製品	砥石	長13.6幅6.8厚3.7重440.1									灰白	F-2g 砂岩製	235-1

第144表 流路跡出土遺物観察表 (F-3) (第366図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
179	土師器	坏	(13.0)	5.0	—	144.4	75	群東		良好	橙		
180	土師器	坏	12.8	5.1	—	180.9	90	群東		普通	橙	F-3g8	178-10
181	土師器	坏	14.0	4.8	—	156.0	95	群東		普通	橙		178-9
182	土師器	坏	(11.8)	4.8	—	108.0	50	埼玉北	角	普通	橙	F-3g	
183	土師器	坏	12.2	4.5	—	151.4	75	埼玉南	雲、角	普通	橙	F-3g	179-1
184	土師器	坏	(13.6)	3.7	—	40.8	25	埼玉北	雲	普通	明黄褐	F-3g8・18・28	
185	土師器	坏	(14.0)	4.5	—	112.5	65	群東		良好	橙		
186	土師器	坏	(12.8)	4.2	—	65.0	30	埼玉南	雲、針	普通	橙	F-3g	
187	土師器	坏	12.1	4.0	—	116.8	90	埼玉北	角	普通	褐	F-3g	179-2
188	土師器	坏	(12.6)	8.9	—	198.0	40	茨西	角	普通	赤褐		

第145表 流路跡出土遺物観察表 (F-3) (第366・367図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
189	須恵器	蓋	(14.0)	4.5	—	67.6	20			普通	青灰	F-3g47・48・59、F-4g	
190	須恵器	蓋	(15.0)	3.0	—	17.3	10			良好	灰白	F-3g51・59、F-4g37	
191	土師器	甕	(14.0)	9.9	—	173.0	10	群東	雲、角	普通	にぶい黄橙	F-3g、F-3g	
192	土師器	甕	(17.4)	21.3	—	418.6	30	群東		普通	淡橙	F-3g20	
193	土師器	甕	—	30.1	6.3	1121.2	40	栃南		普通	にぶい橙	F-3g	
194	土師器	壺	(18.0)	26.9	7.7	2381.9	80	群東	角	普通	浅黄橙	F-3g	225-1
195	石製品	勾玉	孔径0.2長3.2幅1.8厚0.5重4.5									F-3g	234-2
196	石製品	白玉	径0.75孔径0.23厚0.47重0.42									F-3g	234-1
197	石製品	白玉	径0.72孔径0.21厚0.34重0.29									F-3g	234-1

第146表 流路跡出土遺物観察表 (F-4) (第367~369図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
198	土師器	坏	(11.8)	5.2	—	102.2	40	群東	雲	普通	橙	F-4g	
199	土師器	坏	11.6	4.9	—	124.8	80	埼玉	雲	普通	橙		179-3
200	土師器	坏	(12.0)	4.1	—	33.7	10	群東	針	普通	橙	F-4g	
201	土師器	坏	12.9	5.4	—	232.7	85	栃南	角	普通	にぶい黄橙		
202	土師器	坏	12.8	6.0	—	193.2	95	群東	雲、針	普通	橙	F-4g5	179-4
203	土師器	坏	11.8	4.7	—	208.2	100	群東	角	良好	橙	F-4g38	179-5
204	土師器	坏	12.6	5.8	—	235.8	95	埼玉	雲	普通	橙		179-6
205	土師器	坏	(13.0)	4.9	—	139.5	65	埼玉		普通	明赤彩	F-4g51	179-7
206	土師器	坏	14.4	4.2	—	149.0	70	群東		普通	橙	F-4g2・22	179-8
207	土師器	坏	15.5	4.5	—	93.5	25	埼玉	雲	普通	橙	F-4g2・22	
208	土師器	坏	15.6	4.9	—	185.2	70	埼玉		良好	橙	F-4g3・12・22	179-9
209	土師器	坏	11.6	4.2	—	129.5	70	埼玉	雲、針	良好	赤	F-4g	179-10
210	土師器	坏	(13.2)	4.2	—	44.8	25	比企	雲、針	普通	黒	F-4g63	
211	土師器	坏	(11.4)	4.5	—	72.9	45	埼玉	角	良好	明赤褐	F-4g	
212	土師器	坏	12.4	4.2	—	127.2	75	埼玉	雲、針	良好	暗赤	F-4g	180-1
213	土師器	坏	(12.5)	4.7	—	87.0	20	埼玉		普通	橙		
214	土師器	坏	13.0	5.5	—	225.7	75	茨西	雲	普通	橙		180-2
215	土師器	坏	13.4	4.6	—	244.9	90	栃南	角	良好	明赤褐	F-4g1・31	180-3
216	土師器	坏	12.4	5.0	—	107.9	40	茨西	角	普通	にぶい橙		
217	土師器	坏	(13.6)	4.7	—	57.9	20	栃南	角	普通	黒	F-4g4	
218	土師器	高坏	15.0	4.9	—	136.7	45	栃南		普通	灰白	F-4g	180-4
219	須恵器	蓋	13.5	5.3	—	260.1	95			普通	灰	F-4g	180-5
220	土師器	高坏	(11.7)	9.2	8.0	190.6	50	埼玉	針	普通	にぶい橙		
221	土師器	高坏	17.0	8.0	11.4	491.9	85	群東	雲	普通	橙		198-4
222	土師器	高坏	(11.8)	9.2	8.5	191.9	75	群東	雲、角、針	普通	橙	F-4g	198-3
223	土師器	高坏	18.2	7.9	—	224.2	40	群東	角	普通	赤橙	F-4g	
224	土師器	高坏	(13.7)	9.4	8.4	264.8	90	茨西		普通	にぶい橙		198-6
225	土師器	高坏	12.7	9.7	8.6	308.8	90	茨西	雲	普通	橙		199-1
226	土師器	高坏	(14.5)	9.1	9.3	343.3	70	栃南	角	普通	にぶい褐	外面赤彩か	198-5
227	土師器	高坏	—	7.8	12.0	278.4	45	埼玉	角	普通	にぶい橙		
228	土師器	高坏	—	5.3	(9.4)	158.4	35	埼玉	雲	普通	黄橙	F-4g60	
229	土師器	高坏	—	5.5	10.3	211.1	40	群東	角	普通	橙		
230	土師器	高坏	16.4	4.9	—	203.9	40	茨西	雲	普通	浅黄橙	赤彩か	
231	土師器	高坏	—	5.8	8.8	267.8	40	茨西	雲	普通	橙	F-4g39・49	
232	土師器	甕	17.8	31.5	—	1573.4	80	栃南	雲、角	普通	にぶい黄橙		225-2
233	土師器	甕	(18.6)	30.3	—	873.5	20	栃南	雲	普通	にぶい黄橙	F-4g11・12・21・22	369-232
234	土師器	甕	18.8	23.9	—	1311.8	55	茨西	角	普通	にぶい橙	F-4g5・6・8	225-3
235	土師器	甕	(19.0)	30.1	(6.8)	1897.9	55	茨西	角	普通	にぶい橙	F-4g9	225-4
236	土師器	甕	—	5.8	7.4	178.7	10	栃南	雲、角	良好	橙	F-4g8	369-235
237	土師器	甕	—	4.8	7.2	260.1	10	茨西	角	普通	にぶい黄橙	F-4g8 木葉痕	370-239
238	土師器	甕	—	7.2	6.4	281.1	15	茨西	雲	普通	にぶい黄橙	F-4g30・40	

第147表 流路跡出土遺物観察表 (F-4) (第370・371図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版	
239	土師器	甕	17.4	34.4	7.5	3282.3	65	栃南~茨西	雲	良好	橙		226-1	
240	土師器	甕	22.0	24.2	—	1561.8	70	栃南	角	普通	明褐灰		226-2	
241	土師器	壺	(19.5)	33.3	—	3332.7	55	群東	雲	普通	にぶい黄橙	F-4g49	226-3	
242	土師器	小型甕	11.8	13.9	5.1	562.8	95	栃南	雲	良好	にぶい黄橙		226-4	
243	土師器	罎	—	12.2	—	435.3	70	群東	雲	普通	赤褐	F-4g2		
244	土師器	壺	14.5	21.2	5.2	1453.4	85	群東		普通	橙		227-1	
245	土師器	甗	28.8	35.8	(10.4)	2778.0	85	栃南	雲	普通	にぶい黄橙	F-4g8	227-2	
246	鉄製品	鏃	長4.5幅2.0厚0.2重19.7										F-4g	
247	石製品	白玉	径0.68孔径0.20厚0.46重0.38										F-4g	234-1
248	石製品	白玉	径0.70孔径0.20厚0.48重0.41										F-4g	234-1
249	石製品	白玉	径0.72孔径0.19厚0.42重0.37										F-4g	234-1
250	石製品	白玉	径0.74孔径0.16厚0.43重0.37										F-4g	234-1
251	石製品	白玉	径0.65孔径0.16厚0.46重0.35									186坏内	F-4g	234-1
252	石製品	白玉	径0.67孔径0.17厚0.40重0.28										F-4g	234-1
253	石製品	白玉	径0.66孔径0.18厚0.36重0.29										F-4g	234-1
254	石製品	白玉	径0.67孔径0.23厚0.28重0.21									186坏内	F-4g	234-1
255	石製品	白玉	径0.66孔径0.22厚0.42重0.32										F-4g	234-1
256	石製品	白玉	径0.69孔径0.16厚0.31重0.23										F-4g	234-1
257	石製品	白玉	径0.70孔径0.17厚0.30重0.25										F-4g	234-1
258	石製品	白玉	径0.69孔径0.20厚0.37重0.28										F-4g	234-1
259	石製品	白玉	径0.68孔径0.23厚0.31重0.21										F-4g	234-1

第148表 流路跡出土遺物観察表 (F-5) (第372・373図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
260	土師器	坏	11.6	4.9	—	134.4	80	群東		普通	橙	F-5g26	
261	土師器	坏	(12.6)	4.8	—	106.9	50	埼北	雲	普通	橙	F-5g58	
262	土師器	坏	(13.2)	4.7	—	57.2	25	埼北		普通	橙	F-5g21	
263	土師器	坏	(14.5)	4.4	—	105.7	35	埼北	針	普通	橙	F-5g35	
264	土師器	坏	15.9	4.8	—	85.5	35	埼北	雲	普通	橙	F-5g	
265	土師器	坏	(16.5)	4.1	—	149.9	55	埼北	雲	普通	橙	F-5g45・49	180-6
266	土師器	坏	(13.0)	5.0	—	59.8	20	埼北	雲	良好	赤	F-5g50	
267	土師器	坏	14.8	5.2	—	185.1	50	栃南	角	良好	にぶい黄橙	F-5g28・48	180-7
268	土師器	坏	14.7	5.0	—	186.8	80	栃南		普通	橙	F-5g44	180-8
269	土師器	坏	14.7	5.3	—	188.1	80	栃南	雲、針	普通	橙	F-5g44	180-9
270	土師器	坏	(13.8)	6.6	—	62.5	15	栃南	角	良好	淡橙	F-5g61	
271	土師器	坏	(14.2)	3.9	—	100.9	50	佐野	雲	普通	橙	F-5g34	180-10
272	土師器	坏	13.2	5.0	—	147.5	75	埼北	雲	普通	黒	F-5g24	181-1
273	土師器	坏	(15.2)	5.7	—	222.8	80	栃南	雲	普通	にぶい黄橙	F-5g	181-2
274	土師器	坏	(15.2)	5.7	—	199.2	45		雲	普通	にぶい黄橙	F-5g33・44	
275	土師器	坏	(15.4)	4.8	—	63.9	20	栃南	角	普通	赤	F-5g47	
276	須恵器	蓋	(12.0)	4.2	—	48.2	40	東海		良好	青灰	F-5g54	
277	須恵器	坏	12.3	4.5	—	270.9	95	管ノ沢		良好	青灰	F-5g12	181-3
278	土師器	高坏	15.0	8.6	8.7	393.0	85	茨西	角	普通	にぶい赤褐	F-5g	199-2
279	土師器	高坏	—	6.5	10.4	222.6	40	栃南	雲、角	普通	橙	F-5g45	
280	土師器	小型甕	10.0	6.7	—	150.2	45	茨西	角	普通	灰黄	F-5g29	
281	土師器	小型甕	(10.1)	11.4	4.5	257.2	40	栃南	角	普通	にぶい黄橙	F-5g15	199-3
282	土師器	甗	(21.0)	9.8	—	244.7	10	群東	雲	普通	にぶい黄橙	F-5g24・34	
283	土師器	甗	18.7	17.2	4.2	836.8	95	群東	雲	普通	灰黄	F-5g21	199-4
284	土師器	壺	9.4	17.2	5.6	1066.1	95	群東	雲	普通	橙	F-5g34	199-5
285	土師器	甕	18.0	28.6	(5.9)	1887.0	75	埼北	雲、針	普通	にぶい黄橙		227-3
286	土師器	甕	17.5	29.8	8.0	1905.9	90	茨西	角	良好	明褐灰		227-4
287	土師器	甕	15.8	26.0	—	1366.9	60	群東	雲	普通	浅黄	F-5g22	228-1
288	土師器	甕	16.0	20.9	—	1146.3	45	茨西	角	普通	にぶい橙	F-5g9	228-2

第149表 流路跡出土遺物観察表 (F-5) (第373~375図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版	
289	土師器	甕	—	21.8	5.1	1017.0	75	茨西	角	普通	明赤褐	F-5g5	228-3	
290	土師器	甕	(17.0)	11.0	—	134.6	10	茨西	角	普通	にぶい黄橙	F-5g14		
291	土師器	甕	(15.6)	9.3	—	237.1	10	群東	角	普通	浅黄	F-5g100		
292	土師器	甕	(16.2)	3.4	—	65.9	5	群東	雲、角	普通	橙	F-5g15		
293	土師器	甕	—	9.2	5.6	237.7	15	埼北	角	普通	橙	F-5g24・34		
294	土師器	甕	—	6.9	5.1	630.3	5	群東	雲、角、針	普通	黄灰	F-5g9		
295	土師器	甕	—	5.1	6.8	187.1	10		角	普通	にぶい赤褐	F-5g21、F-5g11		
296	土師器	壺	—	4.5	5.7	285.2	5	群東	雲、針	良好	橙	F-5g1 木葉痕		
297	土師器	甕	(19.0)	30.4	6.8	1132.3	40	群東	雲	普通	にぶい黄橙	F-5g15・16、24~26	228-4	
298	土師器	甕	19.0	29.1	7.2	1408.4	65	群東	雲	普通	にぶい橙	F-5g22・32	229-1	
299	土師器	壺	21.0	31.2	8.7	5678.6	90	群東	雲、角	普通	淡橙	F-5g5・6・23	229-2	
300	土師器	壺	19.8	11.2	—	495.8	15	群東		普通	橙		199-6	
301	土師器	甕	21.6	32.1	7.0	1990.8	60	栃南	雲、角	普通	灰白	F-5g83	229-3	
302	土師器	壺	16.5	25.2	7.0	1996.9	95	茨西	角	普通	淡赤橙		229-4	
303	土師器	壺	12.8	19.6	6.2	1228.1	95	栃南	角	普通	赤褐		230-1	
304	土製品	ミニチュア	3.9	2.9	—	26.5	100		角	普通	明赤褐	F-5g	181-4	
305	土製品	ミニチュア	4.4	3.8	—	53.1	95		雲、角	普通	にぶい橙	F-5g35	181-5	
306	土製品	土玉	径2.6×2.7孔径0.5×0.6厚2.6重17.2残95								普通	褐灰	F-5g	233-2
307	土製品	土玉	径2.6×(2.6)孔径0.6×0.6厚2.6重13.3残60								普通	灰黄褐	F-5g	233-2
308	石製品	白玉	径0.73孔径0.28厚0.43重0.32									F-5g	234-1	

第150表 流路跡出土遺物観察表 (F-6) (第375・376図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
309	土師器	坏	(11.9)	4.7	—	89.3	35	埼北		普通	橙	F-6g43	
310	土師器	坏	(12.0)	4.1	—	38.0	10	埼北		普通	橙	F-6g34	
311	土師器	坏	(12.5)	5.5	—	112.0	45	埼北		普通	橙	F-6g37	
312	土師器	坏	(13.0)	5.1	—	76.6	35	埼北	雲、角	普通	橙	F-6g	
313	土師器	坏	12.0	4.7	—	154.4	95	埼北	雲	普通	橙	F-6g34	181-6
314	土師器	坏	(12.0)	3.2	—	36.1	10	埼北		普通	橙	F-6g23	
315	土師器	坏	12.0	4.1	—	132.2	90	埼南		良好	明赤褐		181-7
316	土師器	坏	13.0	4.2	—	126.7	60	埼北	軽	普通	明赤褐	F-6g24	
317	土師器	坏	12.6	4.8	—	145.4	90	埼北	雲	普通	橙	F-6g	181-8
318	土師器	坏	(12.4)	4.2	—	65.5	20	埼北		普通	橙	F-6g47	
319	土師器	坏	(12.1)	4.8	—	150.2	70	埼北		普通	橙	F-6g34	
320	土師器	坏	14.8	4.9	—	176.2	70	埼北	雲	良好	にぶい黄橙	F-6g34	181-9
321	土師器	坏	(11.9)	4.6	—	68.9	20	群東		普通	橙	F-6g45	
322	土師器	坏	12.2	5.7	—	164.1	95	群東		普通	にぶい橙		
323	土師器	坏	(12.0)	5.0	—	110.3	55	群東	雲、角	普通	橙	F-6g36	
324	土師器	坏	(11.3)	4.9	—	89.5	35	群東		普通	橙	F-6g43	
325	土師器	坏	(12.8)	5.2	—	119.1	60	群東		良好	明赤褐	F-6g47	
326	土師器	坏	12.2	4.9	—	177.9	100	群東	雲	普通	橙	F-6g47	
327	土師器	坏	(12.0)	4.7	—	41.3	20	群東		普通	橙	F-6g	
328	土師器	坏	(14.8)	6.3	—	81.5	35	群東		普通	橙	F-6g38	
329	土師器	坏	(11.7)	4.2	—	46.5	10	群東		普通	橙	F-6g23	
330	土師器	坏	12.1	5.1	—	148.6	75	群東		普通	橙	F-6g34	
331	土師器	坏	12.2	4.4	—	160.9	80	群東	雲、角	良好	橙		
332	土師器	坏	12.2	6.2	—	274.2	85	茨西	雲	普通	にぶい黄橙	F-6g39	181-10
333	土師器	坏	15.7	5.1	—	251.1	80	茨西	角、針	普通	灰黄	F-6g12	182-1
334	土師器	坏	15.0	5.6	—	227.9	75	栃南~茨西		良好	にぶい黄橙	F-6g34・44	182-2
335	土師器	坏	(15.0)	5.7	—	159.6	35	栃南~千葉		普通	浅黄	F-6g45	
336	土師器	碗	(10.2)	6.1	5.7	117.8	45	茨西	角	普通	にぶい黄褐		
337	土師器	高坏	13.0	9.8	9.6	241.4	75	群東	雲	普通	橙	F-6g36・37	200-1
338	土師器	高坏	(12.0)	8.4	8.8	193.2	65	群東	雲	普通	橙	F-6g	200-2

第151表 流路跡出土遺物観察表 (F-6) (第376~379図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
339	土師器	高坏	—	8.5	8.6	167.7	40	群東	角	普通	淡赤橙	F-6g	
340	土師器	高坏	12.8	7.2	—	265.4	45	群東	雲	普通	橙	F-6g	
341	土師器	高坏	—	4.6	9.5	171.9	45	群東	雲	普通	橙	F-6g	
342	土師器	高坏	—	4.7	(9.2)	100.6	20	群東	雲、針	普通	橙	F-6g32	
343	土師器	高坏	—	6.7	8.3	171.0	40	栃南	雲、針	普通	橙		
344	土師器	高坏	(16.4)	12.4	(11.7)	290.4	45	茨西	雲	普通	橙	F-6g	200-3
345	土師器	高坏	(11.7)	10.0	—	240.5	55	茨西	雲、針	普通	明赤褐	F-6g48	200-4
346	須恵器	甗か	(12.4)	4.4	—	12.8	5			普通	暗青灰	F-6g37	
347	土師器	甗か	(21.6)	18.2	—	387.7	35	茨西	角	普通	灰黄	F-6g25	
348	土師器	甗か	(21.5)	15.0	—	436.4	20	茨西	角	普通	橙	F-6g25	
349	土師器	甗	14.0	17.4	7.3	694.3	70	茨西	雲	普通	にぶい黄橙	F-6g12、孔径2.9 甗を焼成後穿孔し顔に転用	231-1
350	土師器	甗	—	5.9	4.4	200.8	10	茨西	雲、針	普通	明赤褐	F-6g36、孔径2.9	
351	土師器	甗	(23.6)	29.9	(8.3)	1250.4	55	栃南	雲	普通	橙	F-6g25・26	230-2
352	土師器	甗	—	9.5	(9.5)	150.1	10	栃南	雲	普通	橙		
353	土師器	甗	16.4	7.2	—	308.0	10	群東	雲	普通	にぶい黄橙	F-6g37	
354	土師器	甗	(19.0)	16.2	—	433.3	25	群東		普通	浅黄	F-6g11	200-5
355	土師器	甗	17.7	31.6	5.2	2191.2	75	茨西	雲、角	良好	にぶい橙	木葉痕あり	230-3
356	土師器	甗	(18.8)	9.3	—	163.6	10	茨西	角	普通	明黄褐	F-6g10	
357	土師器	甗	19.0	23.7	—	1277.6	40	茨西	雲	普通	にぶい黄橙	F-6g12	230-4
358	土師器	甗	(17.8)	9.5	—	153.6	5	茨西	雲、角	普通	にぶい黄橙	F-6g39	
359	土師器	甗	(17.3)	23.5	—	655.0	30	栃南	雲	良好	にぶい橙		
360	土師器	甗	—	7.0	6.8	166.4	10	茨西	角	普通	橙	F-6g29	
361	土師器	壺	—	2.1	(6.4)	81.9	5	茨西	角	普通	浅黄橙	F-6g20	
362	土師器	壺	(14.8)	18.4	7.2	1527.5	90	常陸		普通	浅黄		200-6
363	土師器	甗	15.8	21.0	—	657.8	50	茨西	角	普通	赤褐	F-6g4・17・28	379-364
364	土師器	壺	17.1	24.9	—	2684.3	70	佐野	雲、角	良好	淡赤橙		201-1
365	土製品	ミニチュア	(7.4)	5.2	4.2	69.2	40		角	普通	灰オリーブ	F-6g	182-3

第152表 流路跡出土遺物観察表 (F-7) (第379・380図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
366	土師器	坏	13.4	4.7	—	140.2	50	埼玉北		普通	橙		
367	土師器	坏	18.0	5.1	—	242.4	70	埼玉北		普通	浅黄		182-5
368	土師器	坏	15.5	6.0	—	327.4	95	栃南~茨西	雲、片	普通	にぶい黄橙		182-6
369	土師器	甗	13.1	21.4	8.8	1694.6	95	栃南~茨西		良好	橙		231-2
370	土師器	甗	(12.6)	17.6	—	510.2	25	茨西	雲、角	良好	にぶい黄橙		
371	土師器	壺	(16.0)	15.5	—	895.5	70	栃南	雲、針	普通	にぶい黄橙		201-2
372	土師器	壺	(19.8)	16.7	—	843.6	30	茨西	角	普通	にぶい橙	F-7g1・14	201-3
373	土師器	壺	12.0	17.0	—	493.8	45	栃南	雲、角	普通	黒	F-7g2	201-4
374	土師器	甗	(20.4)	6.3	—	107.4	10	茨西	雲	普通	にぶい黄橙	F-7g	

第153表 流路跡第二次堆積層出土遺物観察表 (第380図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
375	土師器	坏	(11.5)	7.8	—	50.6	20			良好	黒褐	D-2g	
376	須恵器	甗	(6.4)	6.5	—	29.1	10			普通	灰	D-2g	
377	土師器	坏	(14.5)	13.8	—	37.6	15			普通	にぶい黄橙	D-3g	
378	土師器	坏	(11.5)	3.9	—	83.3	45		角	良好	橙	E-3g	
379	須恵器	蓋	(11.2)	3.4	—	27.8	25			良好	灰		
380	須恵器	甗	—	14.1	—	332.7	80			良好	青灰		232-4

8. グリッド・表採遺物

本項では、第3・4次調査区で出土した、遺構に伴わない遺物を一括して扱った。グリッドに帰属することができたものをグリッド出土土器、それ以外のものを表採遺物として取り扱った。

土器は土師器坏・高坏・甕、須恵器坏・高坏などが出土しており、このほか、土玉5点、土製支脚2点、白玉1点、勾玉2点、紡錘車1点、砥石2点、貝巢穴痕泥岩5点、種子2点が出土している。

勾玉は2点出土しており、出土位置はH-3とH-6グリッドである。40はH-3グリッドで出土し

ており、半分以上が欠損している。また51はH-6グリッドで出土しており、両側から二箇所穿孔している。

H-5グリッドでは中世の焙烙破片(44)が、またH-6グリッドでは鉄釉の陶器(50)が出土している。ともに第9号溝跡付近で出土していることから、本来この遺構に帰属したのかもしれない。また、鉄釉の陶器は、江戸時代にまで下ることから、第9号溝跡はこの時期まで開口していた可能性がある。

第154表 グリッド出土遺物観察表(D-3)(第382図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	坏	(17.0)	3.6	—	147.7	45		雲	良好	橙	D-3g	

第155表 グリッド出土遺物観察表(D-4)(第382図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
2	須恵器	坏	—	1.0	(5.8)	27.7	10			良好	暗青灰	D-4g	

第156表 グリッド出土遺物観察表(E-3)(第382図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
3	須恵器	坏	—	1.3	7.0	11.9	10	南比企	針	良好	灰白	E-3g 河川攪乱跡	

第157表 グリッド出土遺物観察表(E-4)(第382図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
4	須恵器	高台付坏	—	2.4	7.0	150.7	30	東海		普通	灰	E-4g 接合痕あり	

第158表 グリッド出土遺物観察表(E-5)(第382図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
5	土師器	坏	13.4	3.7	—	94.6	45	埼玉	角	普通	橙	E-5g	
6	須恵器	坏	(12.6)	3.5	(8.0)	97.4	50	太田か		普通	灰	E-5g	

第159表 グリッド出土遺物観察表(F-4)(第382図)

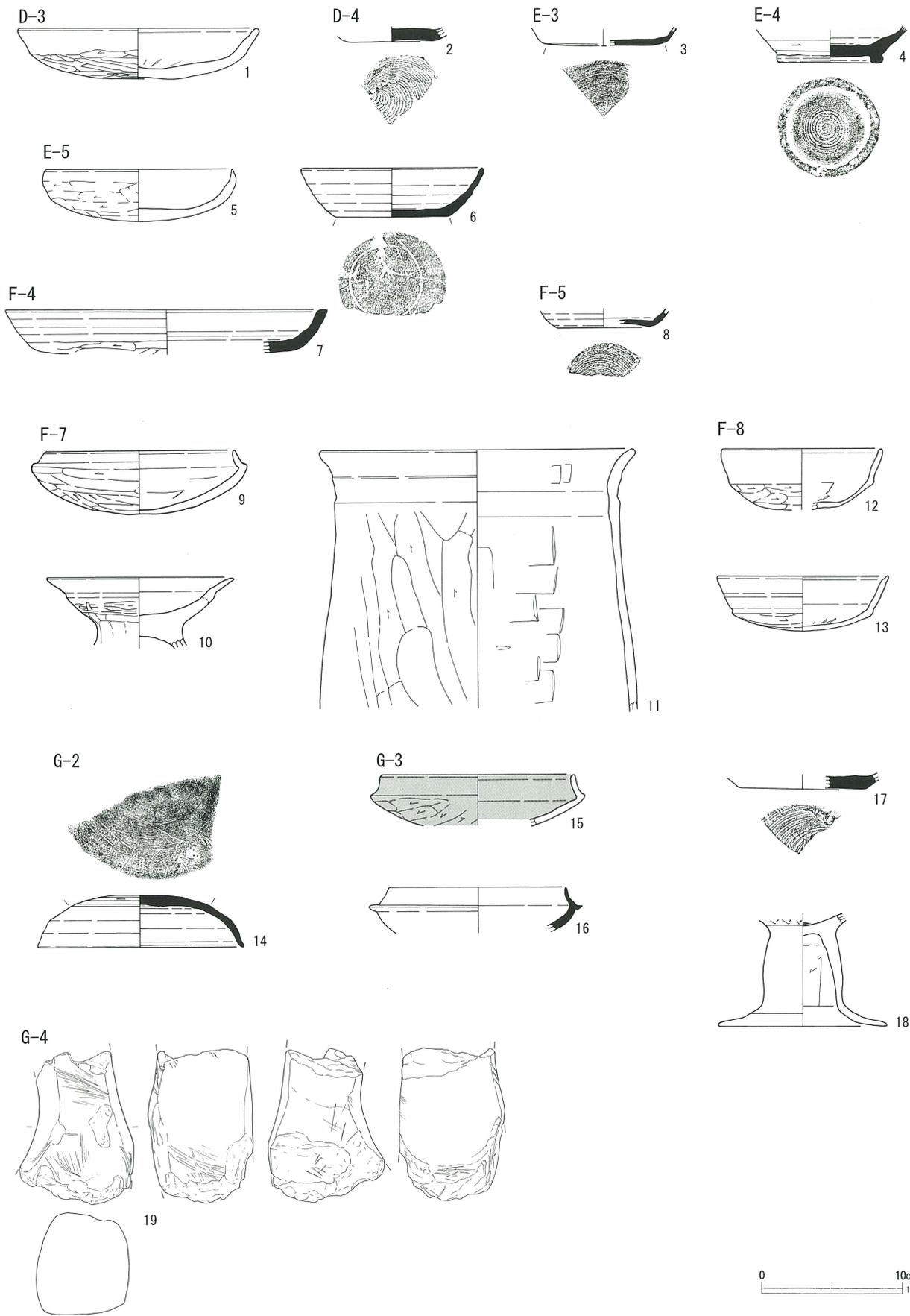
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
7	須恵器	盤	(23.0)	3.1	—	43.0	10			普通	灰	F-4g	

第160表 グリッド出土遺物観察表(F-5)(第382図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
8	須恵器	坏	—	1.3	6.6	10.8	10	南比企	針	普通	灰白	F-5g	

第161表 グリッド出土遺物観察表(F-7)(第382図)

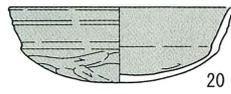
番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
9	土師器	坏	13.4	4.5	—	228.3	80	栃南	角	普通	橙	F-7g3・4	182-4
10	土師器	高坏	(13.2)	5.0	—	99.0	10	栃南		普通	明黄褐	F-7g	
11	土師器	甕	(22.1)	18.5	—	265.3	10	埼玉	雲	普通	浅黄	F-7g41	



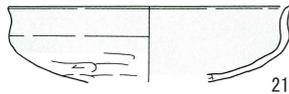
0 10cm 1:4

第382図 グリッド・表採遺物(1)

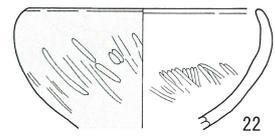
G-5



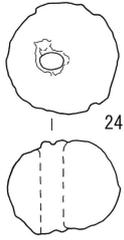
20



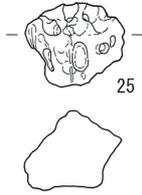
21



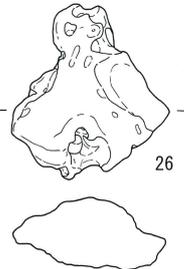
22



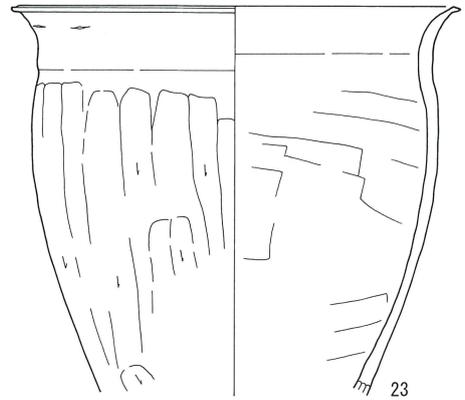
24



25

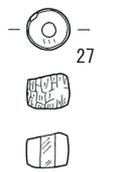


26

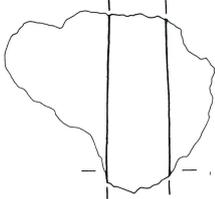


23

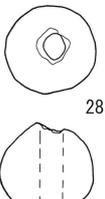
G-7



27

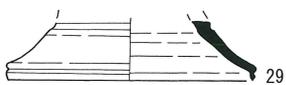


H-1

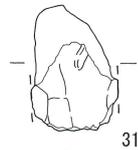


28

H-2



29



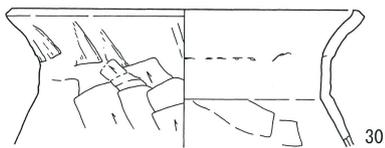
31



32



33



30

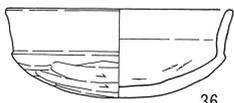


34

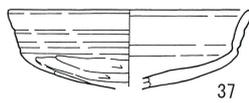


35

H-3



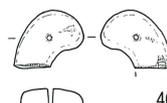
36



37



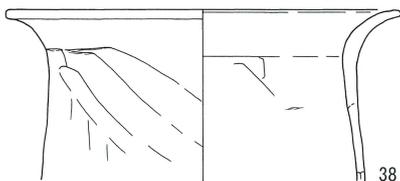
39



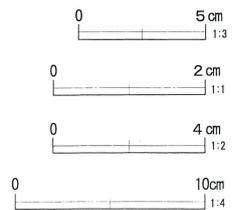
40



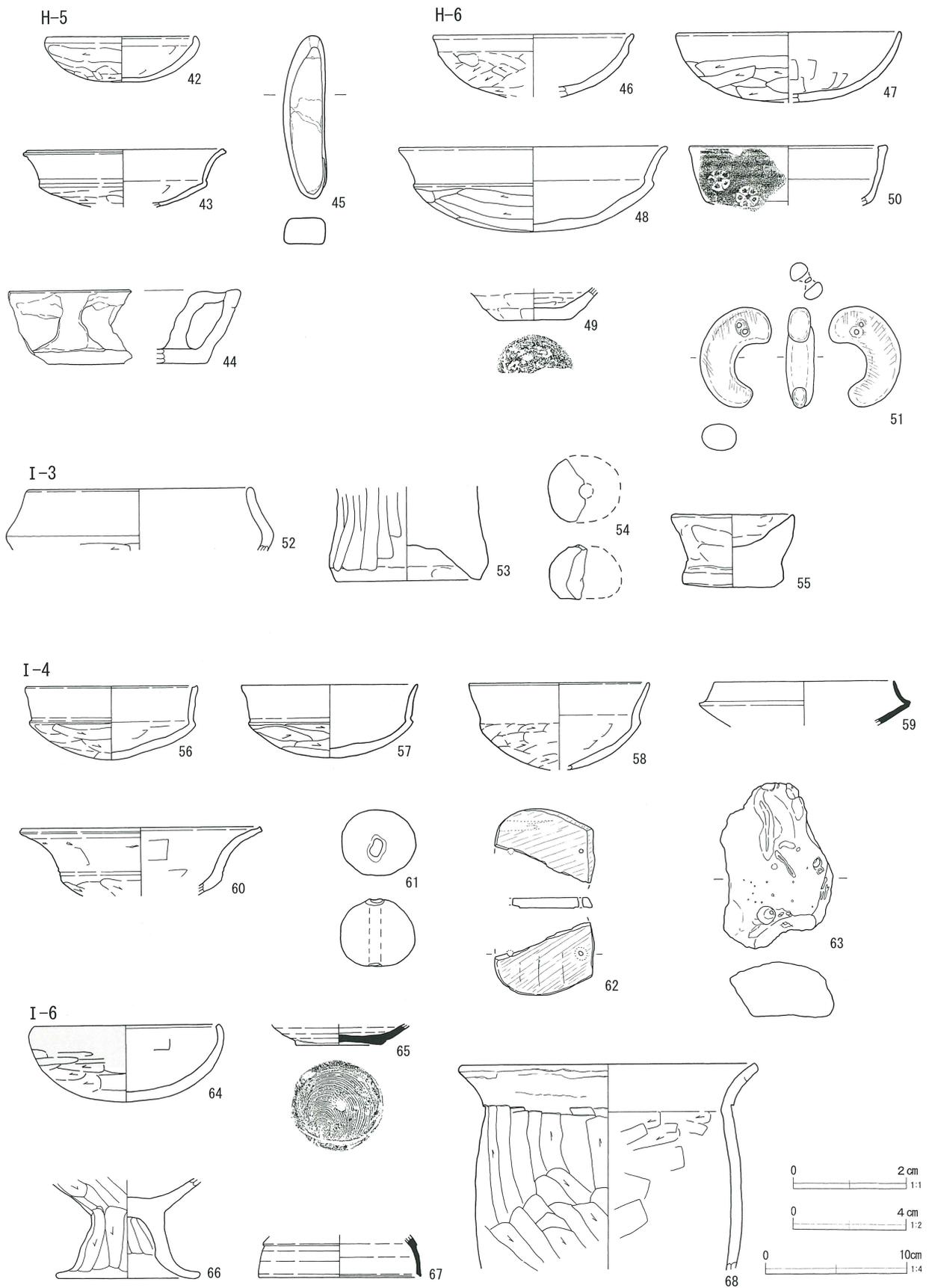
41



38

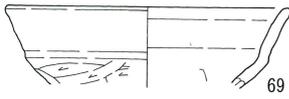


第383図 グリッド・表採遺物(2)



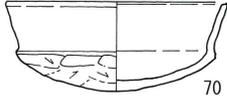
第384図 グリッド・表採遺物 (3)

J-2

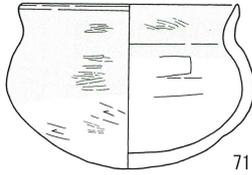


69

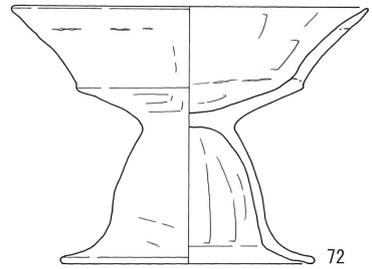
J-4



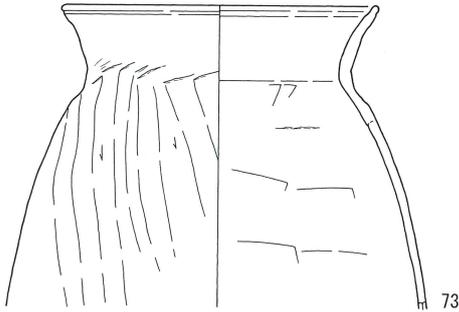
70



71



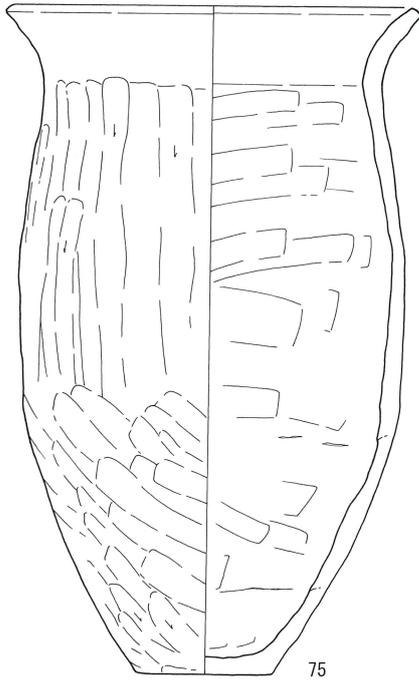
72



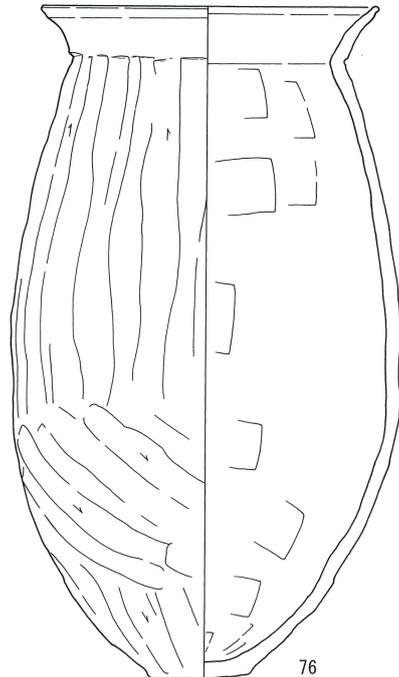
73



74



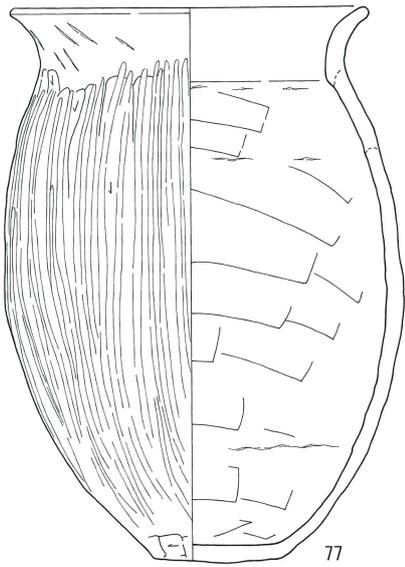
75



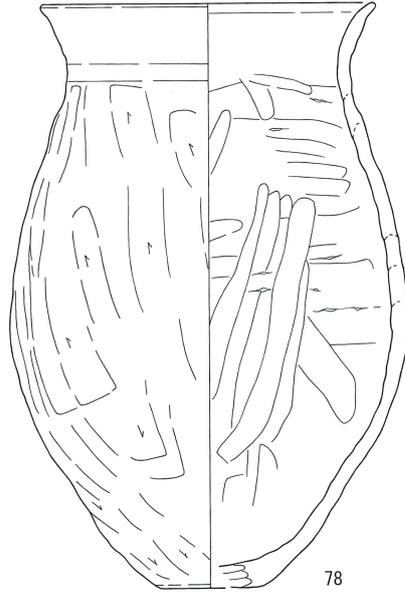
76



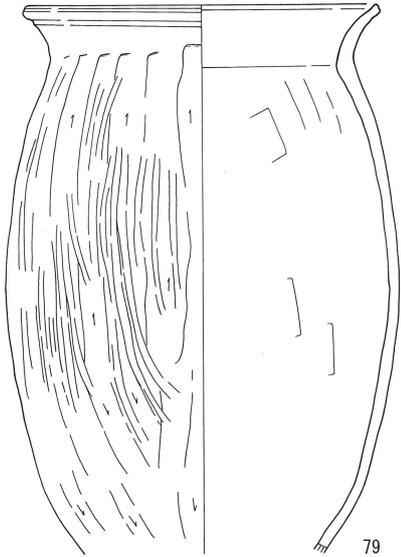
第385図 グリッド・表採遺物（4）



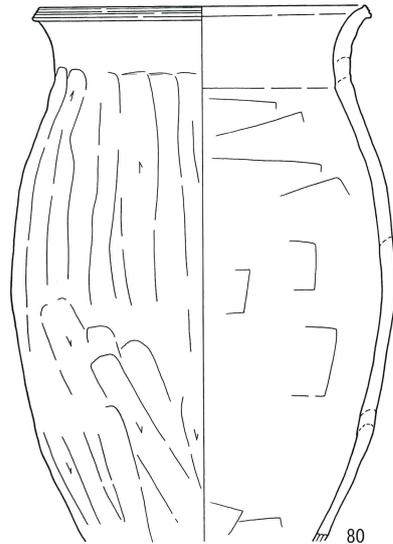
77



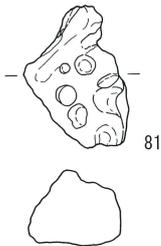
78



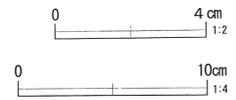
79



80

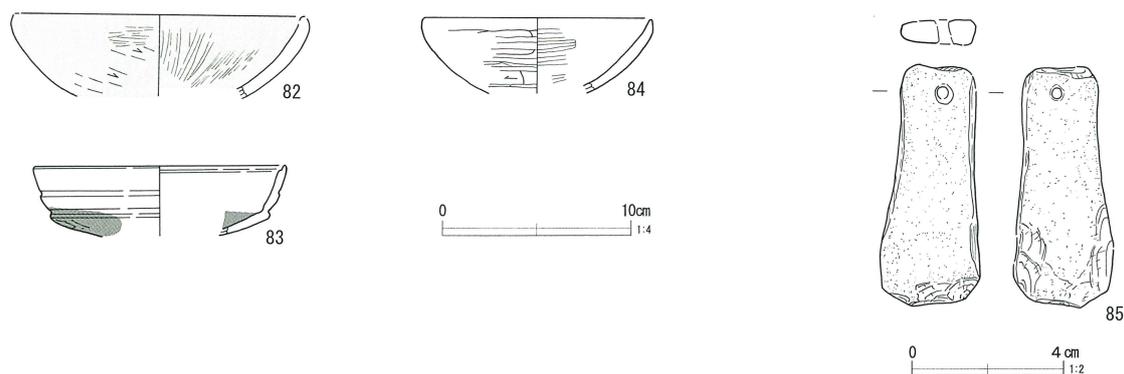


81



第386図 グリッド・表採遺物 (5)

第387図 グリッド・表採遺物（6）



第162表 グリッド出土遺物観察表（F-8）（第382図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
12	土師器	坏	11.2	4.4	—	108.1	80	栃南		普通	橙	F-8g	
13	土師器	坏	(12.1)	3.9	—	73.6	40		雲	普通	橙	F-8g	

第163表 グリッド出土遺物観察表（G-2）（第382図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
14	須恵器	蓋	(14.4)	3.7	—	80.6	40			普通	灰	G-2g,H-2g	182-7

第164表 グリッド出土遺物観察表（G-3）（第382図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
15	土師器	坏	(13.6)	3.7	—	32.9	20		雲	普通	黒	G-3g	
16	須恵器	坏	12.4	3.2	—	22.9	10			良好	暗灰黄	G-3g	
17	須恵器	坏	—	1.1	(9.2)	21.4	破片			不良	灰白	G-3g	
18	土師器	高坏	—	8.0	(12.0)	171.5	60			普通	橙	G-3g	382-19

第165表 グリッド出土遺物観察表（G-4）（第382図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
19	石製品	砥石										G-4g 凝灰岩製	235-1

第166表 グリッド出土遺物観察表（G-5）（第383図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版	
20	土師器	坏	11.9	4.0	—	92.5	70	埼北	雲、角、針	良好	黒	G-5g	182-8	
21	土師器	坏	(15.0)	4.0	—	51.8	20	埼南	雲、角、針	普通	にぶい赤褐	G-5g		
22	土師器	坏	(12.0)	6.4	—	52.0	20			良好	赤	G-5g		
23	土師器	甌か	(23.6)	20.4	—	273.9	5	佐野	雲	普通	橙	G-5g		
24	土製品	土玉	径2.9孔径0.6厚3.0重21.1残100							雲	普通	浅黄	G-5g	233-2
25	貝葉穴磁器		長2.1幅2.1厚2.0重6.1									にぶい橙	G-5g 13孔	238-2
26	貝葉穴磁器		長4.6幅4.1厚1.8重13.7									明黄褐	G-5g,14孔、被熱	238-1

第167表 グリッド出土遺物観察表（G-7）（第383図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
27	石製品	白玉										G-7g	234-1

第168表 グリッド出土遺物観察表（H-1）（第383図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版	
28	土製品	土玉	径2.3×2.4孔径0.7×0.6厚2.2重10.4残100								普通	にぶい橙	H-1g	233-2

第169表 グリッド出土遺物観察表 (H-2) (第383図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版	
29	須恵器	高坏	—	3.1	13.0	12.2	5			普通	暗灰	H-2g 長脚台部		
30	土師器	甕	(18.4)	7.3	—	88.8	10		角、軽	良好	橙	H-2g		
31	土師器	支脚か	4.5(径)	6.6	—	96.1	10		雲、角	普通	にぶい橙	H-2g		
32	土製品	土玉	径3.0×3.0孔径0.6×0.6厚3.2重23.7残95								普通	赤褐	H-2g	233-2
33	石製品	砥石	長4.7幅2.4厚1.7重32.4									黄灰	H-2g 砂岩製	235-1
34	種子		長1.8幅1.7厚1.3重1.2				100					黒	H-2g	236-5
35	種子		長1.9幅1.8厚(1.5)重1.5				75					黒	H-2g	236-5

第170表 グリッド出土遺物観察表 (H-3) (第383図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版	
36	土師器	坏	(11.4)	4.7	—	105.4	30		雲	普通	橙	H-3g		
37	土師器	坏	(12.8)	4.2	—	34.7	25		雲	普通	にぶい黄橙	H-3g		
38	土師器	甕	(20.2)	9.0	—	114.1	5		雲	普通	橙	H-3g 内面炭化物付着		
39	石製品	紡錘車	径4.0孔径0.8厚2.0重42.3										H-3g	236-1
40	石製品	勾玉	孔径0.19長1.6幅1.1厚0.8重3.2										H-3g	234-2
41	貝類・炭泥		長2.3幅1.6厚1.2重2.3									にぶい橙	孔の無い破片、被熱	

第171表 グリッド出土遺物観察表 (H-5) (第384図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版	
42	土師器	坏	(10.6)	3.2	—	37.4	25		雲、針	普通	橙	H-5g		
43	土師器	坏	13.8	4.4	—	119.3	80	埴南	針	良好	橙	H-5g		
44	瓦質土器	焙烙	—	5.1	—	83.2	5			普通	灰	H-5g		
45	石製品	不明	長5.8幅1.5厚0.9重16.0									灰	H-5g 砂岩製	

第172表 グリッド出土遺物観察表 (H-6) (第384図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版	
46	土師器	坏	(14.2)	4.4	—	33.8	20		角	普通	橙	H-6g		
47	土師器	坏	(15.8)	5.0	—	107.5	45			普通	橙	H-6g		
48	土師器	坏	(19.0)	6.1	—	202.9	40		角	普通	にぶい橙	H-6g		
49	土師器	坏	—	2.2	(5.0)	39.7	5		角	普通	浅黄	H-6g		
50	陶器	碗か	(13.8)	4.2	—	24.0	15			普通	灰褐	H-6g 鉄釉 被熱の為白色化		
51	石製品	勾玉	孔径0.3長3.6幅1.4厚1.0重9.6											234-2

第173表 グリッド出土遺物観察表 (I-3) (第384図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版	
52	土師器	坏	(15.8)	4.4	—	32.2	5		角	普通	淡橙	I-3g		
53	土製品	支脚	—	3.3	5.2	55.1	20		雲	普通	にぶい黄橙	I-3g		
54	土製品	土玉	径(2.4)×(2.5)孔径(0.5)×(0.5)厚1.9重4.4残30								普通	にぶい橙	I-3g	233-1
55	土製品	ミニチュア	(4.3)	2.6	3.3	45.4	80		雲、角	普通	にぶい黄橙	I-3g	182-9	

第174表 グリッド出土遺物観察表 (I-4) (第384図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版	
56	土師器	坏	12.0	5.2	—	146.9	85		雲、針	普通	橙	I-4g		
57	土師器	坏	12.6	5.2	—	204.4	95			良好	橙	I-4g	182-10	
58	土師器	坏	(12.7)	6.2	—	169.9	80			普通	橙	I-4g		
59	須恵器	坏	(12.8)	3.2	—	15.8	5			良好	青灰	I-4g		
60	土師器	高坏か	(6.9)	4.8	—	69.2	10		角	普通	橙	I-4g		
61	土製品	土玉	径2.3×2.6孔径0.6×0.4厚2.4重14.5残100								普通	にぶい橙	I-4g	233-2
62	石製品	有孔円板	孔径0.2長2.6幅3.5厚0.4重6.2										I-4g	234-2
63	貝類・炭泥		長5.8幅3.6厚1.8重27.2									にぶい橙	I-4g、21孔、被熱	238-1

第175表 グリッド出土遺物観察表 (I-6) (第384図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
64	土師器	埴	(13.0)	5.5	—	106.9	30		雲	普通	黄橙	I-6g	
65	須恵器	高台付坏	—	1.5	(6.2)	54.3	25			普通	明オリーブ灰	I-6g	
66	土師器	高坏	—	7.1	(10.0)	271.2	40		角	良好	橙	I-6g	
67	須恵器	蓋	(11.6)	3.0	—	10.0	5			良好	青灰	I-6g	
68	土師器	甕	(20.8)	14.6	—	329.2	15			良好	にぶい橙	I-6g	

第176表 グリッド出土遺物観察表 (J-2) (第385図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
69	土師器	坏	(14.8)	4.3	—	40.6	15		雲、角	普通	橙	J-2g	

第177表 グリッド出土遺物観察表 (J-4) (第385・386図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
70	土師器	坏	(11.8)	4.7	—	61.9	35		角	良好	にぶい橙	J-4g	
71	土師器	埴	11.4	8.7	—	615.4	95	比企	角、針	普通	にぶい橙	J-4g	201-5
72	土師器	高坏	(18.6)	13.6	—	362.8	45	群東	針	普通	橙	J-4g 一括	201-6
73	土師器	甕	(16.4)	9.0	—	328.4	25	群東	雲、角	普通	にぶい黄橙	J-4g 一括	
74	土師器	甕	(19.0)	8.3	—	215.1	5	栃南	雲	普通	橙	J-4g	
75	土師器	甕	(21.0)	35.5	7.2	1455.9	40	栃南	雲、角	普通	にぶい黄橙	J-4g	
76	土師器	甕	17.5	35.5	5.0	1921.7	85	佐野	角	普通	にぶい黄橙	J-4g	231-3
77	土師器	甕	(18.6)	29.3	6.8	1591.4	60	佐野		普通	にぶい黄橙	J-4g	231-4
78	土師器	甕	17.6	30.7	(5.3)	1319.1	35	群東	角、針	普通	橙	J-4g	232-1
79	土師器	甕	(18.4)	28.9	—	1293.8	55	佐野	角、針	不良	灰黄褐	J-4g	232-3
80	土師器	甕	(17.2)	28.2	—	1357.0	60	群東	雲、角	普通	にぶい黄橙	J-4g 被熱	238-2
81	貝殻穴蔵泥器		長3.8幅2.5厚1.9重7.5								灰赤	J-4g 9孔、被熱	

第178表 グリッド・表採遺物観察表 (第387図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	タイプ	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
82	土師器	坏	(15.2)	4.3	—	33.8	10		角	普通	浅黄		
83	土師器	坏	13.2	3.7	—	22.0	10			良好	にぶい褐	漆付着か	
84	土師器	坏	(12.0)	4.0	—	18.6	10		雲、角	良好	明赤褐		
85	石製品	有孔砥石	長6.4幅2.7厚0.8重18.4								黒灰	表採 撥形	234-2

第179表 新旧对照表（1）

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
第93号住居跡	第93号住居跡	欠番	第137号住居跡	第181号住居跡	第181号住居跡
第94号住居跡	第94号住居跡	第138号住居跡	第138号住居跡	第182号住居跡	第182号住居跡
第95号住居跡	第95号住居跡	第139号住居跡	第139号住居跡	第183号住居跡	第183号住居跡
第96号住居跡	第96号住居跡	欠番	第140号住居跡	第184号住居跡	第184号住居跡
第97号住居跡	第97号住居跡	第141号住居跡	第141号住居跡	第185号住居跡	第185号住居跡
第98号住居跡	第98号住居跡	第142号住居跡	第142号住居跡	第186号住居跡	第186号住居跡
欠番	第99号住居跡	第143号住居跡	第143号住居跡	第187号住居跡	第187号住居跡
欠番	第100号住居跡	第144号住居跡	第144号住居跡	第188号住居跡	第188号住居跡
第101号住居跡	第101号住居跡	第145号住居跡	第145号住居跡	第189号住居跡	第189号住居跡
第102号住居跡	第102号住居跡	第146号住居跡	第146号住居跡	第190号住居跡	第190号住居跡
第103号住居跡	第103号住居跡	第147号住居跡	第147号住居跡	第191号住居跡	第191号住居跡
第104号住居跡	第104号住居跡	第148号住居跡	第148号住居跡	第192号住居跡	第192号住居跡
第105号住居跡	第105号住居跡	第149号住居跡	第149号住居跡	第193号住居跡	第193号住居跡
第106号住居跡	第106号住居跡	第150号住居跡	第150号住居跡	第194号住居跡	第194a号住居跡
第107号住居跡	第107号住居跡	第151号住居跡	第151号住居跡	欠番	第195号住居跡
第108号住居跡	第108号住居跡	第152号住居跡	第152号住居跡	第196号住居跡	第196号住居跡
第109号住居跡	第109号住居跡	第153号住居跡	第153号住居跡	第197号住居跡	第197号住居跡
第110号住居跡	第110号住居跡	第154号住居跡	第154号住居跡	第198号住居跡	第198号住居跡
第111号住居跡	第111号住居跡	第155号住居跡	第155号住居跡	第199号住居跡	第199号住居跡
第112号住居跡	第112号住居跡	第156号住居跡	第156号住居跡	第200号住居跡	第200号住居跡
第113号住居跡	第113号住居跡	第157号住居跡	第157号住居跡	第201号住居跡	第201号住居跡
第114号住居跡	第114号住居跡	第158号住居跡	第158号住居跡	第202号住居跡	第202号住居跡
第115号住居跡	第115号住居跡	第159号住居跡	第159号住居跡	第203号住居跡	第203号住居跡
第116号住居跡	第116号住居跡	第160号住居跡	第160号住居跡	第204号住居跡	第204号住居跡
第117号住居跡	第117号住居跡	第161号住居跡	第161号住居跡	欠番	第205号住居跡
第118号住居跡	第118号住居跡	第162号住居跡	第162号住居跡	欠番	第206号住居跡
第119号住居跡	第119号住居跡	第163号住居跡	第163号住居跡	第207号住居跡	第207号住居跡
第120号住居跡	第120号住居跡	第164号住居跡	第164号住居跡	第208号住居跡	第208号住居跡
第121号住居跡	第121号住居跡	第165号住居跡	第165号住居跡	第209号住居跡	第209a号住居跡
第122号住居跡	第122号住居跡	第166号住居跡	第166号住居跡	第210号住居跡	第210号住居跡
第123号住居跡	第123号住居跡	欠番	第167号住居跡	第211号住居跡	第211号住居跡
第124号住居跡	第124号住居跡	欠番	第168号住居跡	第212号住居跡	第212号住居跡
第125号住居跡	第125号住居跡	第169号住居跡	第169号住居跡	第213号住居跡	第213号住居跡
第126号住居跡	第126号住居跡	欠番	第170号住居跡	第214号住居跡	第214号住居跡
第127号住居跡	第127号住居跡	第171号住居跡	第171号住居跡	第215号住居跡	第215号住居跡
欠番	第128号住居跡	第172号住居跡	第172号住居跡	欠番	第216号住居跡
第129号住居跡	第129号住居跡	第173号住居跡	第173号住居跡	欠番	第217a号住居跡
第130号住居跡	第130号住居跡	第174号住居跡	第174号住居跡	第217号住居跡	第217b号住居跡
第131号住居跡	第131a号住居跡	第175号住居跡	第175号住居跡	第218号住居跡	第218号住居跡
第132号住居跡	第132号住居跡	第176号住居跡	第176号住居跡	第219号住居跡	第219号住居跡
第133号住居跡	第133号住居跡	第177号住居跡	第177号住居跡	第220号住居跡	第220号住居跡
第134号住居跡	第134号住居跡	欠番	第178号住居跡	第221号住居跡	第221号住居跡
第135号住居跡	第135号住居跡	第179号住居跡	第179号住居跡	第222号住居跡	第222号住居跡
第136号住居跡	第136号住居跡	第180号住居跡	第180号住居跡	第223号住居跡	第223号住居跡

第180表 新旧対照表（2）

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
第224号住居跡	第224号住居跡	第241号住居跡	第241号住居跡	第258号住居跡	第274号住居跡
第225号住居跡	第225号住居跡	第242号住居跡	第242号住居跡	第259号住居跡	第194b号住居跡
第226号住居跡	第226号住居跡	第243号住居跡	第243号住居跡	第260号住居跡	第131b号住居跡
第227号住居跡	第227号住居跡	欠番	第244号住居跡	欠番	第261号住居跡
第228号住居跡	第228号住居跡	欠番	第245号住居跡	第262号住居跡	第270号住居跡
第229号住居跡	第229号住居跡	第246号住居跡	第246号住居跡	第263号住居跡	第209b号住居跡
第230号住居跡	第230号住居跡	第247号住居跡	第247号住居跡	欠番	第264号住居跡
第231号住居跡	第231号住居跡	欠番	第248号住居跡	欠番	第265号住居跡
第232号住居跡	第232号住居跡	第249号住居跡	第249号住居跡	欠番	第266号住居跡
第233号住居跡	第233号住居跡	第250号住居跡	第250号住居跡	欠番	第267号住居跡
第234号住居跡	第234号住居跡	第251号住居跡	第251号住居跡	欠番	第268号住居跡
第235号住居跡	第235号住居跡	第252号住居跡	第252号住居跡	欠番	第269号住居跡
第236号住居跡	第236号住居跡	第253号住居跡	第253号住居跡	欠番	第272号住居跡
欠番	第237号住居跡	欠番	第254号住居跡	第273号住居跡	第273号住居跡
第238号住居跡	第238号住居跡	第255号住居跡	第255号住居跡	欠番	第275号住居跡
第239号住居跡	第239号住居跡	第256号住居跡	第256号住居跡	欠番	第276号住居跡
欠番	第240号住居跡	第257号住居跡	第271号住居跡		

第181表 土坑・井戸跡・溝跡新旧対照表

土坑

新番号	旧番号
第15号土坑	—
第16号土坑	第16号土坑
第17号土坑	第17号土坑
第18号土坑	—
第19号土坑	第19号土坑
第20号土坑	第20号土坑
第21号土坑	第21号土坑
第22号土坑	第22号土坑
第23号土坑	第23号土坑
第24号土坑	第24号土坑
第25号土坑	第25号土坑
第26号土坑	第26号土坑
第27号土坑	—
第28号土坑	—
第29号土坑	第18号土坑
第30号土坑	—
第31号土坑	第128号住居跡
第32号土坑	第233号住居跡脇 ビット

新番号	旧番号
第33号土坑	—
第34号土坑	—
第35号土坑	—
第36号土坑	—
第37号土坑	第172号住居跡
第38号土坑	第237号住居跡 カマド
第39号土坑	第237号住居跡 貯蔵穴
第40号土坑	第150号住居跡 カマド
第41号土坑	第99号住居跡 貯蔵穴
第42号土坑	—

井戸跡

新番号	旧番号
第29号井戸跡	第29号井戸跡
第30号井戸跡	—
第31号井戸跡	第31号井戸跡
第32号井戸跡	第32号井戸跡
第33号井戸跡	第33号井戸跡
第35号井戸跡	第35号井戸跡
第36号井戸跡	第36号井戸跡
第37号井戸跡	第37号井戸跡

溝跡

新番号	旧番号
第8号溝跡	第8号溝跡
第9a号溝跡	第9号溝跡
第9b号溝跡	第9号溝跡
第9c号溝跡	第9号溝跡
第10号溝跡	第14号溝跡
第11号溝跡	第11号溝跡
第12号溝跡	第12号溝跡
第13号溝跡	第13号溝跡
第14号溝跡	第14号溝跡
第15号溝跡	第15号溝跡

V 結語

飯積遺跡第2～4次調査区では、古墳時代後期から奈良・平安時代の集落と中・近世の区画溝や土坑、井戸跡のほか、古墳時代後期に埋没した流路跡を確認した。本遺跡は、考古学的データの乏しい加須低地の自然堤防に立地しており、当該地域の集落の実態を理解する上で貴重な資料である。特に本遺跡が、古くから国境を決定した利根川や渡良瀬川の合流点

に位置しており、現地形にはほとんど現れていない流路跡が確認されたことなど、各方面にわたって、この土地ならではの成果が得られた。

そこで以下では、飯積遺跡を特徴づける「遺構と遺物の出土状況」「自然堤防と集落」「出土土器と周辺地域」、に項目を絞り、飯積遺跡の特色を浮き彫りにしたい。

1. 遺構と遺物の出土状況

(1) 竪穴住居跡の平面形・規模

第388図に、飯積遺跡全調査区の竪穴住居跡の規模を時期ごとに表した。グラフ化にあたってはY軸に主軸長を、またX軸にはこれと直行する軸の長さ(直行軸長)を表した。原点から60°に延びる補助線は、平面形が正方形となるラインで、これより上のドットは主軸方向に長い長方形を、またこれより下のドットは直行方向に長い長方形であることを意味する。

また、各時期ごとの最少規模の住居跡を点線で、最大規模の住居跡を太線で示し、住居番号を付した。

対象資料は、住居の両軸長が計測された151軒である。全時期を通した最小規模の住居跡は、第1号住居跡(9世紀第Ⅱ四半期)で4.9m²、最大規模の住居跡は、第33号住居跡(5世紀第Ⅳ四半期)で62.7m²である。

時期ごとに概観すると、飯積遺跡の成立期である5世紀第Ⅲ・Ⅳ四半期は、一辺が3.5～8mの方形で、住居規模のばらつきが大きい。6世紀第Ⅰ四半期は、規模においては前時期と同様の傾向を示し、一辺が4～7m程度のもので規模はばらつきが見られる。平面形は方形指向がやや崩れ、主軸方向に長い形状、直交軸方向に長い形状の両者が混在する。

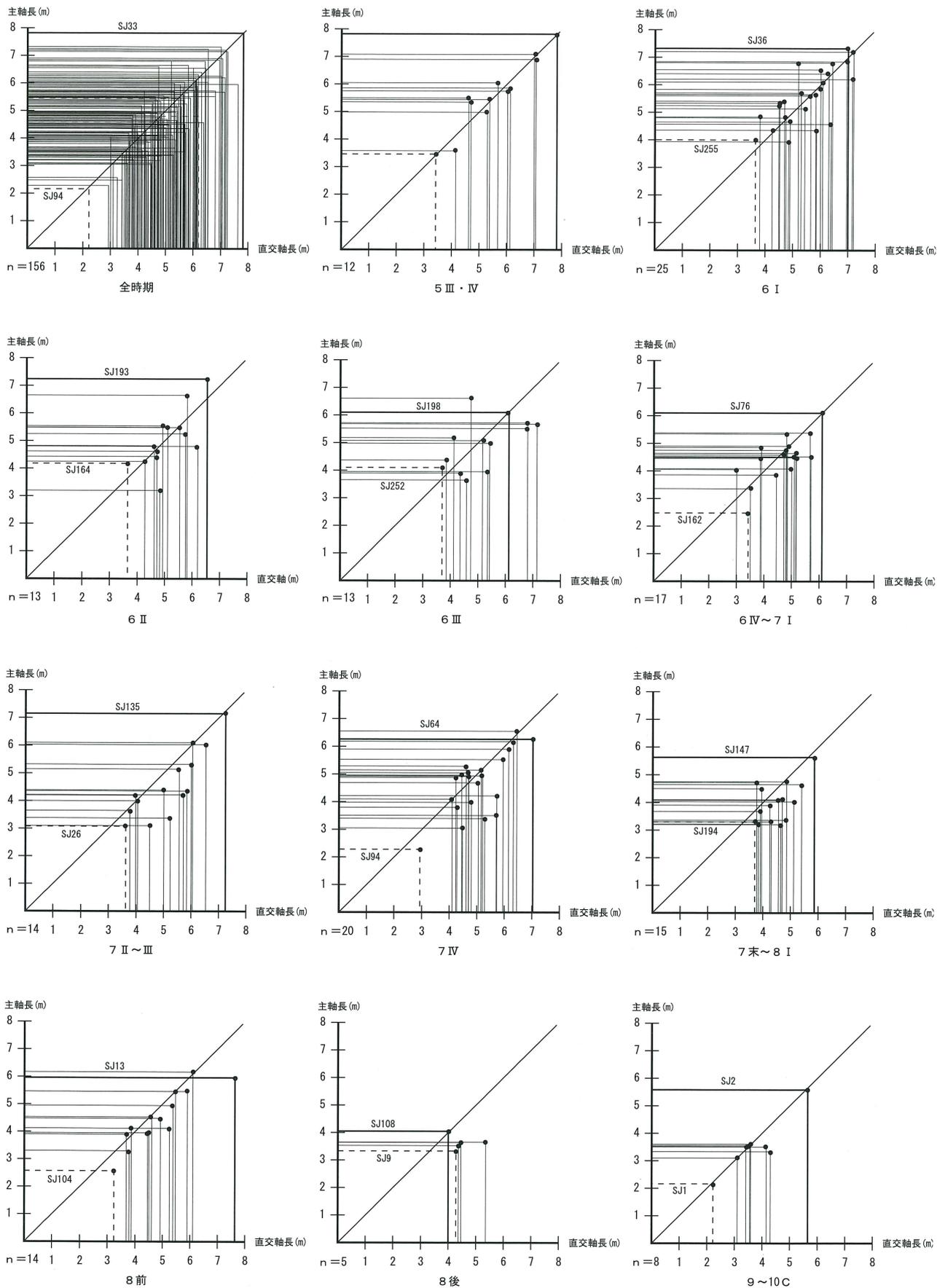
6世紀第Ⅱ四半期になると、やや住居跡の小規模化が進む。一辺7m前後の住居跡がわずかになり、

主体は5mを前後する規模となる。平面形は方形を指向し、おおむね正方形ラインに乗ってくる。住居跡の小規模化は7世紀第Ⅰ四半期まで続き、7世紀第Ⅱ～Ⅳ四半期は再び規模がばらつく。6世紀第Ⅲ四半期以降、7世紀第Ⅰ四半期まで平面形は様々で、7世紀第Ⅱ四半期以降は、おおむね直交軸に長い長方形を指向するが、7世紀第Ⅳ四半期の平面形・規模の変化は、主軸方向や集落配置など、グラフに現れない箇所の変化を伴った構造的な変化なようだ。7世紀第Ⅳ四半期から8世紀初頭は、一部にこれらの変化を伴った住居跡が現れた一方で、古相を示す6mクラスの方角住居が共存しており、転換期の様相を捉えている。

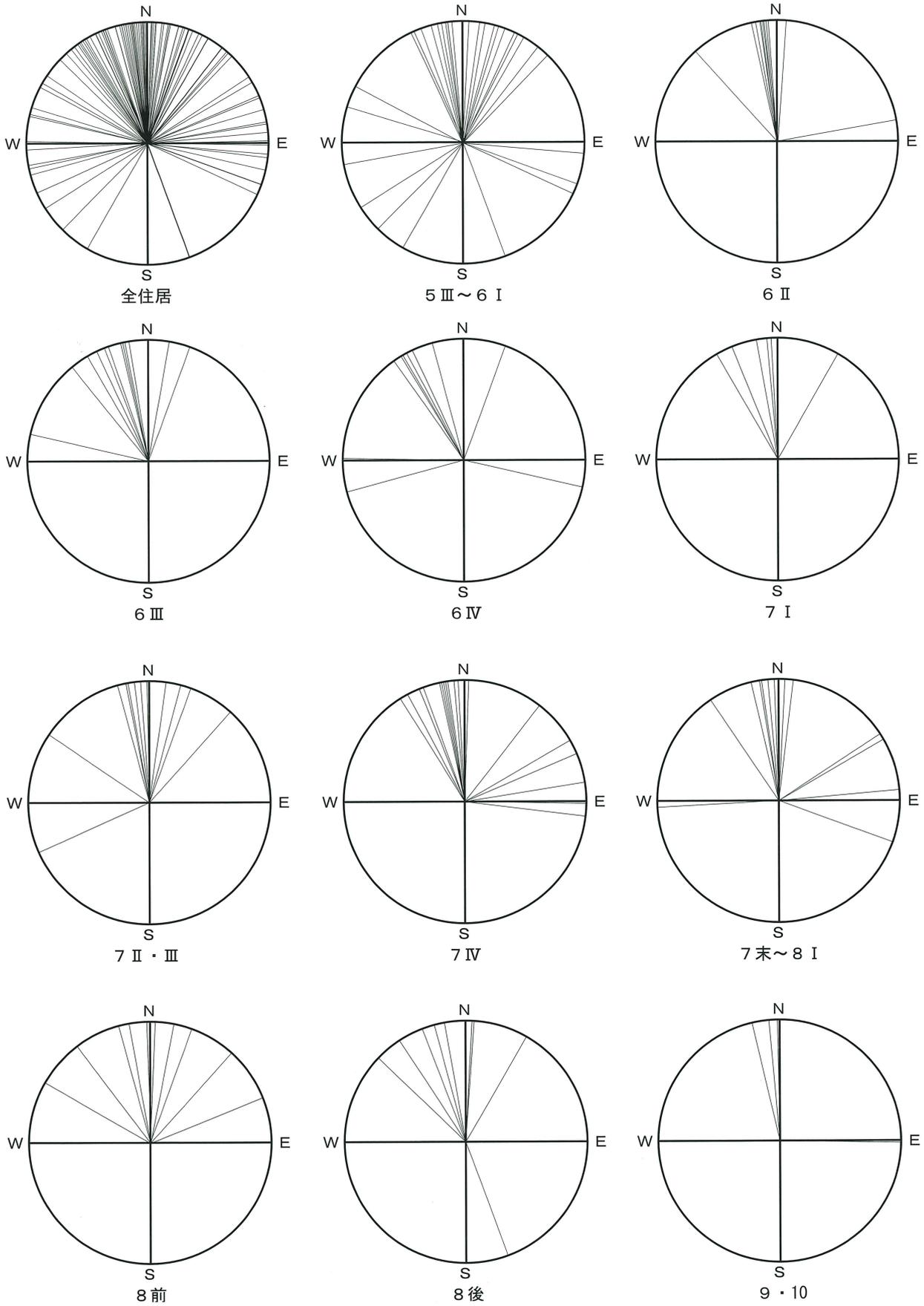
8世紀前半から後半の平面形は、前時期の長方形を保持する。8世紀後半は、前時期まで見られた「方形・大型」の「古墳時代後期的」とも言うべき住居形態が完全になくなる時期である。すなわち、古墳時代後期的な住居形態から奈良時代的な住居形態の移行期は、7世紀第Ⅳ四半期から8世紀前半とすることができるだろう。

概略を示すなら、竪穴住居跡の規模・平面形は、5世紀後半から7世紀後半の「方形・大型」→7世紀末から8世紀中頃の「方形・大型」と「長方形・小型」の共存→8世紀後半の「長方形・小型」→9・10世紀の「方形・小型」の変遷を辿る。

(2) 竪穴住居跡の主軸方向



第388図 竪穴住居跡の主軸と規模



第389図 カマド主軸分布

竪穴住居跡の主軸方向を通時的に眺めると、主軸方向はおおむね北側を指し、東や西、南に主軸をもつ住居跡は例外である。北側に主軸をもつ住居跡は大きく、西に10~30°振れる一群(=西軸群)、東に10°前後振れる一群(=東軸群)に分かれ、集落形成は、この両軸群の盛衰をもって語ることもできよう。そこで以下では、各時期ごとの主軸分布(第389図)と、東西軸群の集落分布について見ていく。なお、各軸群の分布は、集落変遷図左下(第399~405図)にも付したので併せて参照願いたい。

飯積遺跡の成立期である5世紀第Ⅲ四半期には、西軸2軒、東軸1軒の3軒が西側に建てられる。第Ⅳ四半期にはそれぞれ、これを大きく上回る数の住居が建てられ、西側に西軸群、東側に東軸群が集中する。6世紀前半は主軸分布、集落分布ともに偏在する時期で、第Ⅰ四半期には、東側に東軸群が多数建てられ、第Ⅱ四半期には、西側に西軸群が分布する。東軸群-東側、西軸群-西側という分布を引き継ぐ。数量的には前時期と逆転し、東軸群が圧倒的に増える。

6世紀後半は、西軸の住居跡がほとんど姿を消し、東軸群が前時期と同じ分布を見せる。7世紀前半は住居軒数が少なく、東軸群は前時期同様、東側にわずかに見られるだけである。本時期は、西軸群も住居軒数が落ち込むが、分布の原則はある程度遵守されているようである。

7世紀後半は、分布や住居軒数をさほど変えず、西軸住居が多数建てられる。わずかな例外を除き、第Ⅳ四半期の住居はほとんどすべてが西軸という徹底ぶりである。この時期になって、東側に東軸群という原則が破られ、集落全域に西軸群が分布するようになる。続く8世紀前半も西軸群の卓越は変わらないが、分布をやや西側に戻し、東側には東群がややまとまる。9~10世紀は傾向を読むべき住居軒数はないが、主軸は西軸群と真北軸の住居跡に限定される。

以上のように、飯積遺跡の竪穴住居跡は、主軸方

向により東軸群と西軸群に2大別でき、住居は、ある集落配置の原則に則って形成されていたようである。以下、その概要を示すと、集落の成立から7世紀前半に至るまで、東軸群は東寄り、西軸群は西寄りに分布して集落を形成していく。7世紀後半になると、それまでの集落配置の原則が破られ、西軸群が東側まで分布を広げるようになる。

両軸群の時期的推移と分布の消長が何を示すか不明だが、7世紀第Ⅳ四半期の主軸方向の統一と集落配置の変更、分布拡大等の動きは、前項で触れた住居規模や平面形の変化と連動しており、構造的な変化の一つとして理解される。

(3) カマドの構造

本遺跡は、洪水等の影響により住居跡覆土の形成が早かったこと、また、遺構確認を比較的高い位置で行えたことという条件が重なり、カマドの遺存状況が良く、構築、使用、廃棄の諸相についていくつかの成果をあげることができた。そこで以下では、具体的事例をあげ、カマドの構築、使用、廃棄について明らかにする。

a. 構築の様相

カマド掘り方

カマド掘り方は、あらかじめカマド構築場所を土坑状に掘削し、地山と異なる土を詰め込み、そこへ煙道および煙出し穴を掘削したものである。

平面形は、楕円形や不整形など、また断面形は、垂直に掘り込む箱型のものや摺鉢状のものが見られる。また、底面はフラットなものから住居跡側に向かって傾斜するものまで一様でない。煙道部の底面構造(水平型や傾斜型の別)との相関関係も特に見られず、煙道部底面も掘り方内に設けたものや、掘り方底面を掘り込むものまで多様である。

このように、カマド掘り方は、同一時期にあっても実に様々な形状を見せ、また、煙道形態との相関もなく、そこに統一的工法は見られない。あくまでその構築は、壁や天井の崩落防止という最低限の機能が果たせる範囲でという自由度があったらしい。

ところで、掘り方に詰め込まれた土（＝掘り方埋土）は、以下の三種に大別された。

- A. しまりの強い黄褐色粘質土
 - B. Aのブロックを含む砂質粘土
 - C. Bの土に炭化物や焼土ブロックを含んだもの
- Aの構築土は、流路跡第一次堆積層そのものであり、また、第二次堆積層でも、褐色粗粒砂の間層として現れる。掘り方埋土は、集落内やその近辺で比較的簡単に調達されているようだ。

Aの構築土は、第111・141・150号住居跡などで見られ、Bの構築土は、第153号住居跡のほか、南側の住居跡において数多く見られる。統計的データではないが、Aの構築土は、より地山のしまりが弱い流路跡堆積層中の住居跡に多用され、Bの構築土は、比較的地山のしまりが強い自然堤防側の住居跡に用いられている印象がある。

一方、Cの構築土は、第135号住居跡で確認された。掘り方埋土に焼土や炭化物ブロックが混入する理由として、掘り方の掘削や埋土の詰め込みに際して、予め用意した可能性と、修復時の混入の二つの可能性が想定される。第135号住居跡がいずれの場合だったかは不明だが、これらの混入物が含まれていても、B構築土とさほど変わらぬしまりであったことは注記しておきたい。

ところで、掘り方掘削について問題とされるのは、住居本体の掘削や袖部の取り付けとの先後関係である。残念ながら、前者の関係を明らかにできた住居跡はなく、本体が先か、掘り方が先かは不明である。一方、後者の先後関係は、両者が別工程として造られる場合（A）と、一体として造られる場合（B）の二つを想定できる。

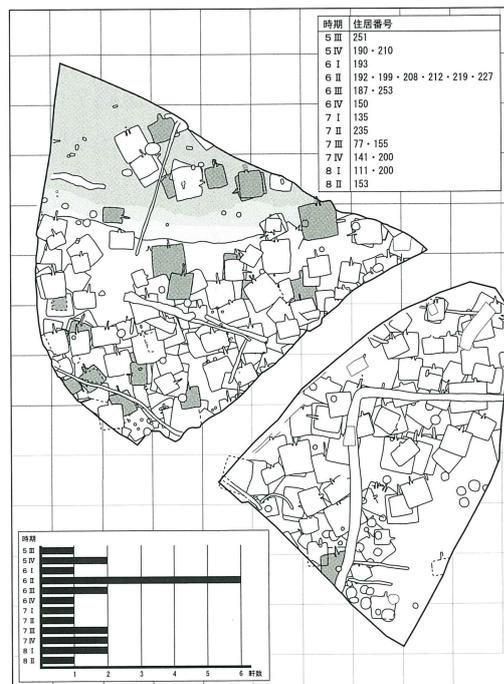
- A. 掘り方掘削→埋土→煙道部+煙出し穴掘削
→袖部敷設（燃焼部作出）
- B. 掘り方掘削→埋土+袖部敷設（燃焼部作出）
→煙道部+煙出し穴掘削

調査では、掘り方をもつカマドすべてに対して、袖部との構築手順を明らかにできたわけではないが、

断面観察の適った第135・141号住居跡や、掘り方埋土と袖構築土が明らかに異なるものは、Aの構築手順が取られていたことが明白である。

一方、第153号住居跡は、カマド掘り方のみならず、カマド設置壁の壁構築土やカマド付近の床面までの掘削、埋土詰め込みを一度に行っており、Bの構築手順を知る数少ない事例である。仔細を見ると、右袖構築土内には補強材の土師器甕が埋め込まれており、この部分に関しては埋土詰め込みに後続するが、これをもってBの構築手順の否定とはならないだろう。少なくとも土器補強部を除く袖構築土は、掘り方埋土とともに詰め込まれており、Bの構築手順も存在したものと考えたい。

さて、本遺跡でカマド掘り方が確認された住居跡は22軒を数えるが、その平面分布と時期別分布を示したのが第390図である。平面分布を見ると、第2次調査区では、わずかに第77号住居跡が見られるのみで、第3・4次調査区では、比較的広域に分布し、流路跡堆積層中では、カマドの確認された住居跡12軒中7軒を占め、出現比率は5割を超える。一方、南側の自然堤防部の出現比率はこれよりかなり低い。



第390図 カマド掘り方分布図

流路跡堆積層は非常にしまりの弱い粗粒砂であることから、流路跡と自然堤防部にみるカマド掘り方の出現比率は、地山の土質差に還元される可能性はある。しかしながら同技術は、古くは5世紀第IV四半期（第251号住居跡）に出現しており、流路跡への集落進出に完全に先行する。それどころか、その時期は、飯積遺跡の成立や周辺地域のカマドの導入とほとんど時間を経っていない。この技術がどこまで遡るかは不明であるが、低地域の集落形成に伴って開発された技術と評価されよう。

カマド構築材

本遺跡のカマド構築土は、その多くが周辺で採集された黄褐色や灰色の粘質土である。このほかのカマド構築材として、土器（土師器甕や甑）を用いた例が22軒の住居跡で確認され、

- | | |
|------------------|-----|
| A. 袖部先端（＝焚き口）補強材 | 18例 |
| B. 袖内部芯材 | 4例 |
| C. 焚き口架構材 | 4例 |

の三者が捉えられた。

Aタイプ 袖部先端に土器を据え、袖構築土の粘土流出を防いだもの。片袖タイプと両袖タイプの二者が見られる。土器の器種は土師器甕に限定され、倒立させ据え付けるのが原則である。第111号住居跡カマド右袖では唯一例外的に、土師器甕を半截し、手前側を逆位に、また奥側は正位に組合せて据えつけていた。

補強材の据え付け位置は、袖の延長上ではなくこれよりやや内側で、結果として燃焼部幅より焚き口幅が狭くなる。焚き口幅は40～50cmくらいの幅がもっとも多い。Aタイプの機能として、構築土流出防止効果は期待されようが、あらかじめ焚き口幅を決定できるという構築上の利点はあったように思う。

また、機能時の補強土器は、検出状況や土層堆積状況から、器表を露出させていたことが明らかとなった。第174号住居跡は、袖補強した外側の器表を構築土で覆った稀な例だが、それでも全面や内側は器表が露出している。なお、第130号住居跡は、左

袖に土器2個体を接続しており、粘土の流出防止という機能の他に、芯材としての機能も具備している。

片袖タイプは一例確認されたが、これが構築当初の旧状を留めたものであるのか、廃棄時に抜き取りが行われた結果であるのかは不明である。

補強材土器の残存率は、完形から20%に満たないものまで見られたが、燃焼部や焚き口付近で出土する破片と接合する例も多いことから、本来的には完形もしくはそれに近い土器が選ばれたようである。

Bタイプ 袖の内部に土器を埋め込み、芯材としたものである。基本的には構築土に覆われ、機能時に視認は不可能である。Aタイプに比べ4例とごく少数である。芯材の埋め込み位置は、袖先端、中央、全体の三箇所が見られるが、先端や中央の補強機能がいかほどであったかはわからない。第115号住居跡は、両袖に土師器甕と甑を3個体ずつ用いた特異な例で、機能時のカマド外面は構築土により土器が覆われ、内面（燃焼部）は土器が露出していた。

Cタイプ 焚口の天井部に土器を架構したもの。4例見られ、いずれも土器2個体を組み合わせている。土器の組み合わせ方により、入れ子タイプと合わせ口タイプに分けられる。そのいずれもが既述のAタイプと兼ねており、袖の補強は焚口架構という形態をとるための最低条件であったようだ。

入れ子タイプに、第139・184・260号住居跡の3例が、また合わせ口タイプに、第241号住居跡が見られる。第391図には復元図を示した（註1）。推定されるそれぞれの焚き口規模（幅×高さ）は、第139号住居跡が53×25cm、184号住居跡が高さ26cm、第260号住居跡が43×26cmである。

一方、合わせ口タイプの第241号住居跡では、焚口部分に2・3の土師器甕が向かい合って潰れ、2の口縁部が3の下位に入り込んでいる。両土器は口縁部径の関係により、完形の状態では合わせ口にはならないが、2は口縁部から肩部までの一部が欠損しており、3を10cm分ほど入れ込むことができる。それどころか、両土器は組み合わせると、頸部のく

びれに、外反する口縁部がフックされ、接着の必要がないほど固定される。また、3の土器は図示した範囲でススが付着しており、2と3が組み合った時の露出部分と完全に一致する。合わせ口タイプの事例をこの他には知らないが、出土状況と観察所見からこの存在を積極的に支持したい。

b. 使用の実態

支脚と転用土器

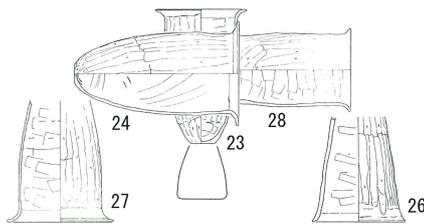
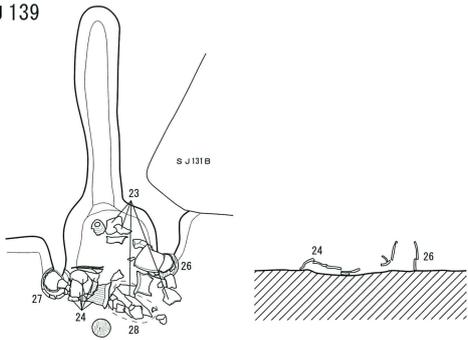
本遺跡で出土した支脚は25例で、内容としては、土製支脚9点、粘土塊3点、転用土器13点である。土製支脚は、粘土紐輪積みタイプ1例（I-9グリッド出土）、中空タイプ5例、中実タイプ2例、高坏脚部と同じ形状のもの1例が見られた。このうち、カマド燃焼部で出土したものは、第208号住居跡出

土例のみで、他はすべて遺構覆土中出土である。

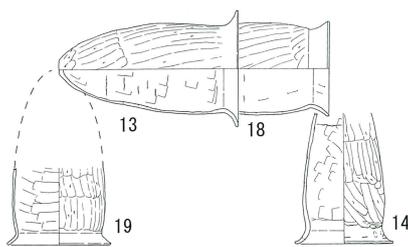
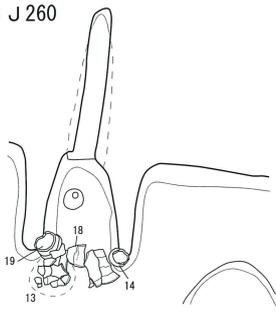
このような出土数、出土状況を示す中で、カマド燃焼部に比較的多く残されていたのが、粘土塊タイプと、支脚に転用した土器である。粘土塊はあらかじめ焼成を施したのではなく、粘土を土柱状にして燃焼部底面に貼り付けるもの（第138号住居跡）や、これが結果として被熱を受け固着したもの（第138号住居跡）などである。

一方、支脚転用土器には、土師器高坏、甕などが見られ、高坏は完形品を、また甕は胴部下半を伏せるのが原則である。第131号住居跡では例外的に、燃焼部底面に小ピットを穿ち、この底面に完形の甕を逆位に据えている。口縁部の全周する土師器甕の安定性は充分であろうことから、小ピットは固定を

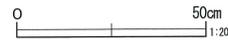
S J 139



S J 260



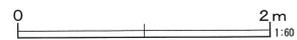
復元図



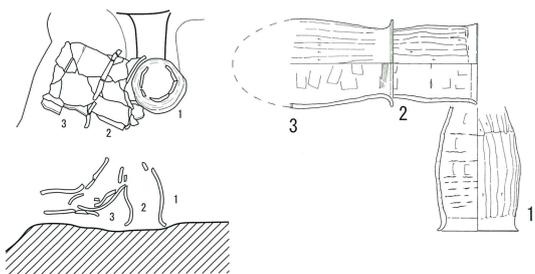
S J 184遺構図



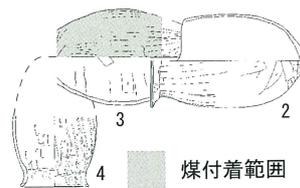
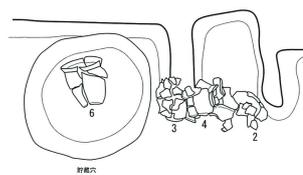
S J 139・241・260遺構図



S J 184



S J 241



煤付着範囲

第391図 カマド構築材

企図したというより、支脚の高さを調節するためのものだろう。

このほか、第260号住居跡の支脚は、土師器甕の胴部下半を伏せたものであるが、左袖部補強材（第310図19）と同一個体であった。以上のことから、袖構築段階にすでに補強材は完形でなかったことが理解される。

土器の収納・保管状況

第193・197・251号住居跡では、カマド近辺で土器の保管・収納状況をそのまま示す状態の土器が出土した。出土位置はいずれもカマド脇で、複数の土器を組み合わせているのが特徴である（第392図）。

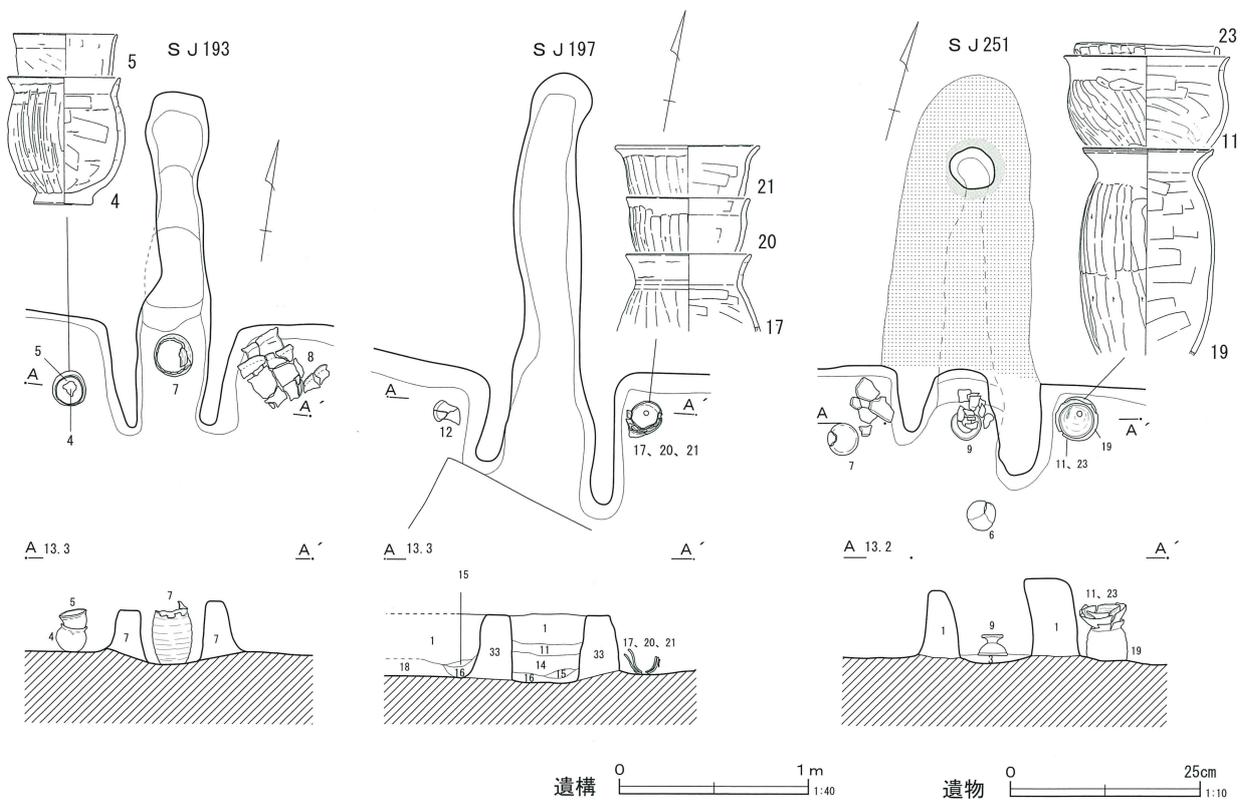
第193号住居跡では、カマド左脇で土師器鉢（5）、土師器甕（4）の2個体が重なって出土した。鉢は底部が欠損しており、甕として転用された可能性が高い。第197号住居跡では、カマド右脇で土師器甕（21）、鉢（20）、甕（17）の3個体が重なって出土した。土師器甕は胴部上半（残存高10cm）までの個体で、器台として転用されている。また、第251号

住居跡でも、カマド右脇で土師器甕（23）・鉢（11）・甕（19）の3個体が重なっており、甕が器台として転用されている点は、第197号住居跡と似る。

なお、器台転用の甕は、土器を受ける口縁部から頸部内面に、スレや擦痕を伴うことが多々あるが、本例ではいずれも観察されなかった。

上記三例は、複数の土器を組合せて収納するのは、土師器甕に限定されたことを教えている。他器種にも敷衍される可能性は考えられるが、類例の乏しい現状では土師器甕に特有のものと理解したい。このうち、第197・251号住居跡は、小型の土師器甕と鉢の組合せであった。土器は、カマド使用時にかげられ、それ以外の場合は、カマド脇に保管していたことがわかる。

また、同例は、土師器甕胴部上半が器台に転用されることの多いことを示している。そこで以下では、上記例を参考に、出土状況から組合せ収納を推定した。推定にあたっては前例にならない、対象器種を土師器甕に限定し、推定の条件は①床面直上である



第392図 組合せ収納例（1）

こと、②両者が隣接して出土していることという2点にし、第393図に復元例を示した。

第115号住居跡ではカマド右脇で、土師器甑（鉢か）（7）と小型甕（6）が隣接して出土した。小型甕が甑と接する頸部内側にはわずかなスレが見られ、この点からも組み合わせ収納は支持される。

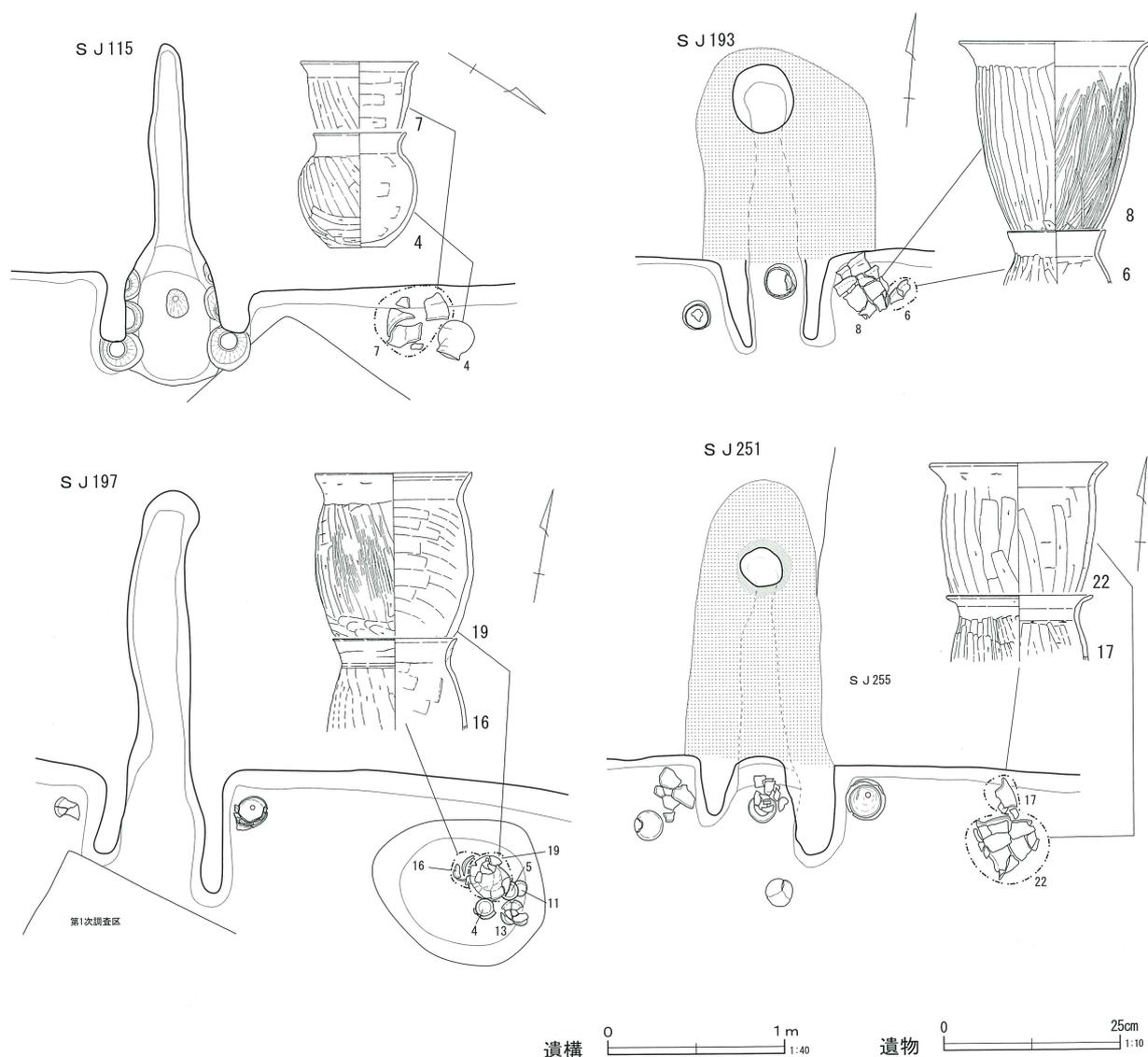
第193号住居跡ではカマド右脇で、土師器甑（8）が、土師器甕（6）の胴部上半（残存高7.7cm）とともに出土した。甕は甑の底部側に位置し、甑はカマド設置壁に倒れるように出土している。

また、第197号住居跡では、カマド設置壁の右側に位置する貯蔵穴内で土師器甑（19）が、土師器甕（16）の胴部上半や、土師器坏4点（4、5、11、

13）に伴って出土している。既述のカマド右脇の組み合わせ収納の出土状況や、伴出した土器の残存率が高いことから、これらの土器が住居廃絶時の遺棄を示しており、胴部上半の土師器甕はこの状態で（器台として）機能していたことが支持される。ただし接する部分にスレのようなものは見られない。

第251号住居跡では、カマド設置壁の右側で土師器甑（22）と土師器甕（17）の胴部上半（残存高9.3cm）が出土した。甑はカマド側に倒れ、その底部側には、口縁部を甑側に向けた甕胴部上半が出土している。出土状況的には、甕は逆位で機能していたと想定する方が自然であるが正位で復元した（註2）。

以上から、カマド設置壁付近は、収納スペースと



第393図 組み合わせ収納例（2）

して広く活用されており、組合わせて収納する例や、器台に転用した胴部上半甕が意外に多かった。特に第197号住居跡では、貯蔵穴の中に土器が据えられ、カマド設置壁側の土坑やピットに「貯蔵」以外の「収納」機能を求めるべき事例が存在するようである。この例以外にも、土坑・ピット内で出土した胴部上半のみの土師器甕は、第109・124・175号住居跡など3例のほか、報告中にて図示は適わなかったが、第29号住居跡などで見られる（註3）。

第124号住居跡では、カマド右脇ピット1（37×32cm、深さ9cm）から、底面に接する土師器甕（4）の胴部上半（残存高16.3cm）が、床面から10cmほど突き出ている。口縁部内面にはスレや擦痕は見られない。また、第175号住居跡では、カマドが確認できなかったが、掘り込みの浅いピット（87×65cm、深さ20cm）の底面に土師器甕（2）の胴部上半（残存高17.7cm）が正位に据えられている。口縁部内面は広範囲にスレしており、調整痕が見えなくなる箇所もある。このほか、第109号住居跡も、カマド右側の貯蔵穴から、土師器甕（19）の胴部上半（残存高16.7cm）が出土している。口縁部内面には明瞭にスレが見られる。

以上三例は、出土位置や出土状況から推定した、ピット埋設の器台転用例であるが、その特徴としては、カマド近辺であること、ピットや土坑の掘り込み規模が小さく、また浅いという諸点が挙げられる。特に第124号住居跡では土師器甕が、床面から10cmほど突き出した出土状況に、調査時点から違和感を持っていたが、器台とこれを埋設したピットという理解で合点がいく。中には、口縁部内面にスレや擦痕のない土器もあるが、先述の組合わせ収納例ですら観察されない土器もあることから、これが否定の根拠とはなり得ない。

c. 廃棄の様相

カマドの廃棄については、すでに先行研究が多数あり、カマドは、その構築から廃棄に至るまでの様々な局面で祭祀が行われていることが現在の共通理解

となっている。中でも、寺沢知子による竈祭祀行為の5分類（寺沢1992）や、堤による廃棄プロセスの想定（堤1992）は、祭祀研究に陥りがちな「想念」ととどまらず、日々我々が目にする資料に基づいた帰納的な作業であることから、その後広く受容され、各地域・時代ごとの事例研究が進められていった。

堤氏によれば、カマドは機能停止後、解体→構築材処置→祭祀行為の3段階を経ており、カマド廃棄時の祭祀行為としては、A.土器・礫・土による封鎖、B.土器破片の敷設、C.完形土器の据置き、D.支脚の土器による被覆、E.祭祀遺物の据置き、F.灯火などが見られ、これらは竈神信仰と深く結びついているという。

BやEの特殊な状況下では、祭祀行為の推定もある程度の蓋然性が保証されようが、その他の出土状況からの推定することの当否ははまだ評価の定まらぬところである。しかしながら、出土状況と具体的な行為をつなぐ中間理論の無い現在、これまでに想定されている出土状況例の集成を行うことは最低限の必須作業となるであろう。

具体的に、カマドに関する祭祀行為の推定は、調理とは直接関与しない食膳具やその他の特殊遺物の出土をもって行うか、カマド機能とは直接結びつかない出土状況から推測していくことが、現在ではもっとも簡便かつ確実な作業ではある。

本遺跡において、調理具以外の遺物を出土したカマドは、混入の可能性のあるものを除外すると22例を数える。時期は、古くは飯積遺跡の形成期である5世紀第Ⅲ四半期で確認され、9世紀までほぼ連続と続いている。出土遺物の内容としては、土師器坏、高坏、須恵器坏などの土器や土製品、土錘、鉄製品、獣骨などが見られ、土師器坏を用いた例がもっとも多く、ほぼ全時期にわたっている。土師器坏は、その数と出土状況により、さらに細分が可能である。

① 1個体・正位…1例（第80号住居跡）

② 1個体・逆位…11例（第4・111・127・130

・139・147・157・166

・201・211・239号 住居跡)

③ 2個体・逆位…1例(第48号住居跡)

④ 3個体・逆位…3例(第133・148・202号住居跡)

これによれば、基本的に土師器坏は、伏せることで祭祀としての機能を全うしたようで、②～④は中沢氏の指摘する「坏伏せ」パターンに相当し、このうち第4・131号住居跡などは、堤氏の「D.支脚の土器による封じ」に相当する出土状況である。

このほか、第81号住居跡出土の土師器甑(9)は、燃焼部から煙道部までの天井(被熱焼土層=16層)に挟まれた状態で崩落しているが、掛け口に直接掛けられた甑は特殊な状態である。燃焼部手前では炭化物集積層上(すなわち甑と同時性)で土師器坏(4)が出土しており、合わせて祭祀行為の痕跡と捉えられよう。

以上のように、祭祀を特徴づける遺物の出土はないが、その出土状況から祭祀の痕跡と認められる事例は多数見られた。

特に、第201号住居跡では、集落成立期である5世紀第Ⅲ四半期においてすでに「坏伏せ」が見られる。これが祭祀の痕跡として保証されるのであれば、集落形成に関わった集団の文化・思想・価値観等を反映しており、彼らを理解するためのひとつの判断材料となる。

ところで、「カマドは壊れるだけでなく、壊されている」という中沢氏の指摘(中沢1986)は、その後多くの事例において追認、支持されてきた。多くの事例でそうであるように、本遺跡においてもほとんどすべてのカマド天井部が崩落している。ところが、第111号住居跡のように、少なくとも廃棄直前まで機能時の状態を保っていた例も見られ、カマド廃棄に伴う破壊を想定できない事例も存在するようである。さらに注意したいのは、カマド祭祀の見ら

れる住居跡が、遺棄遺物を多数残すような住居跡から、まったく遺物の残らない住居跡まで見られるということである。

すでに古くから、「カマドへの祭祀的行為が独立したものでなく、住居廃棄にともなう一連の祭祀的行為の一つとして行われていた」という指摘(寺沢1992)がなされ、またその考え方も多く受容されながら、特異な出土状況ばかりからカマド祭祀が語られ、解釈が先行し、住居廃棄の中に位置づける視点が欠落しているように思う。少なくとも、両者が「一連の祭祀行為」であるなら、カマド遺棄遺物と床面遺棄遺物の有無により、住居廃棄パターンが想定され、それぞれの意味が考究されるべきである。少なくとも飯積遺跡においては、カマド遺棄遺物や床面遺棄遺物の有無により、以下の

I-a カマド遺棄○-床面遺棄○

-b カマド遺棄○-床面遺棄×

II-a カマド遺棄×-床面遺棄○

-b カマド遺棄×-床面遺棄×

という住居廃棄パターンが見られる。住居廃棄にあたっては、家財道具が次の住居へ持ち出される場合、そのまま遺棄していく場合、住居解体後廃棄される場合などが考えられ、これらの処置の中にカマド祭祀の執行が絡んでくるはずである。

どのような場合に道具は持ち出され、どのような場合に遺棄されたのか。また、カマドの破壊が行われなかった第111号住居跡の家財道具が持ち出されていることなど、取り立てて特異な出土状況の見られぬ場合でも、床面遺物とカマド遺棄遺物のあり方から住居の廃棄行為(ひいてはカマドの祭祀行為)に迫れる可能性がある。

ここでは、そこまで立ち入った議論はできなかったが、住居廃絶に伴うカマドへの処遇は、祭祀の執行されなかった場合も含めて、かなり多様であったと推察される。

2. 自然堤防と集落

(1) 飯積遺跡の成立

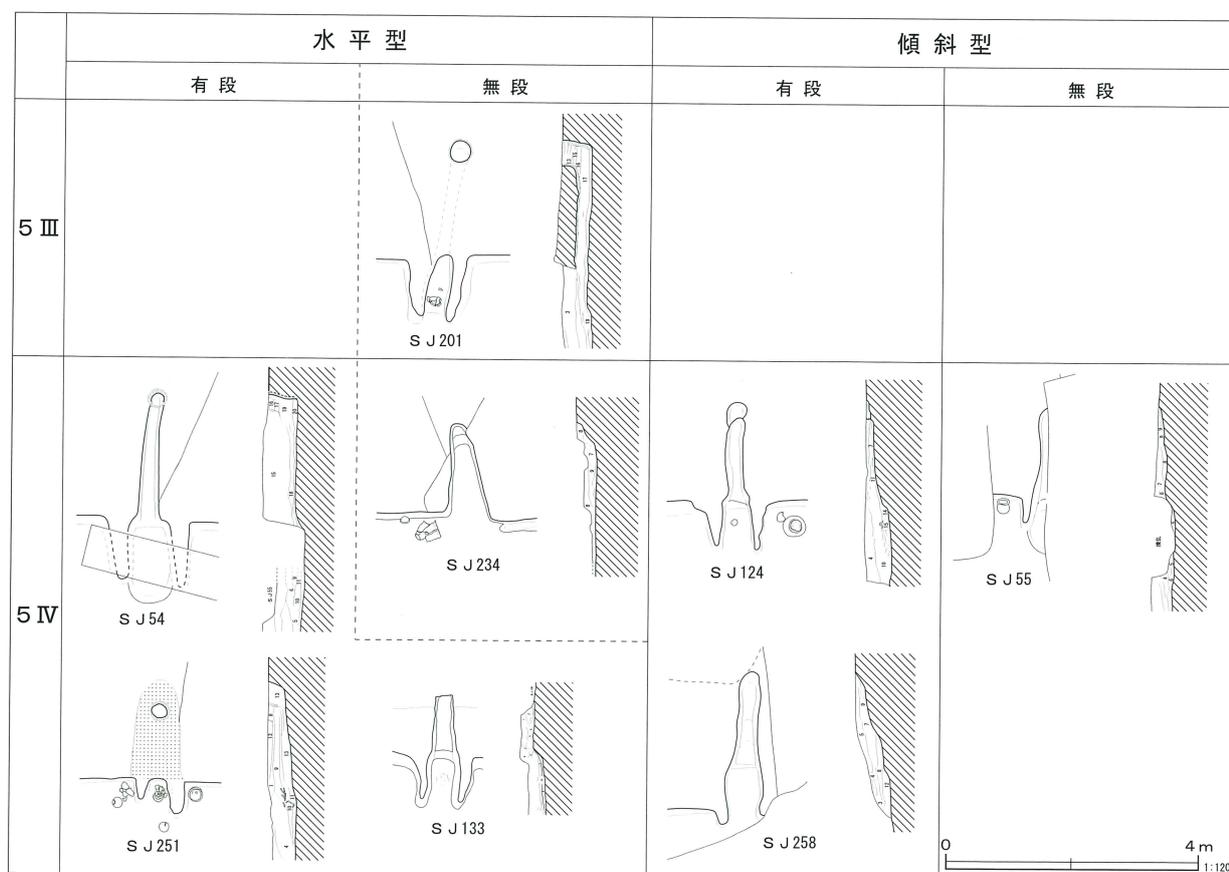
飯積遺跡にはその成立期から、他地域の土器が多数入り込んでおり、国境に位置する飯積遺跡の特色のひとつと評価される。

ところで、飯積遺跡のカマドは、その成立期（5世紀第Ⅲ四半期）から長大な煙道をもっていることにひとつの大きな特徴を見出せる。カマドは、飯積遺跡の集落を成立させた人々の知識と技術、伝統と習慣、時に彼らの嗜好性や価値観などの表象と捉えることができる。彼らは、まずそのデザインをイメージし、構築材を調達し、工夫を凝らしてカマドを構築した。その使用や廃棄方法も、彼らに特有の方法や習慣によって行われていたに相違ない。

すなわち、不動産としてのカマドは、動産である土器には決して現れない、飯積遺跡を成立させた集団の特徴を明らかにできるひとつの重要な要素になるものと考えられる。

そこで以下では、飯積遺跡の成立を理解するため、まず成立期（5世紀第Ⅲ四半期）のカマドの特徴を抽出する。次に、周辺地域のカマドとの比較から、飯積遺跡の成立を担った集団がどの地域からやってきた集団であるのかを推測してみることにしたい。カマドの検討に先立ち、飯積遺跡成立期の土器が、茨城西部、栃木南部などが構成の主体を占め、埼玉北部の土器がほとんどないことを確認しておこう。

- それでは、飯積遺跡成立期のカマドについて見てみよう。第394図には、5世紀第Ⅲ～Ⅳ四半期のカマドを示した。該期のカマドの特徴は、
- ①1.5mを越える長煙道のものが多く、2mに達するものもある
 - ②煙道部底面構造、燃焼部と煙道部の接続は、5世紀第Ⅲ四半期に「水平－無段型」として導入される
 - ③これに加え、5世紀第Ⅳ四半期には「水平－有段



第394図 飯積遺跡成立期のカマド

型]、「傾斜 - 無段型」、「傾斜 - 有段型」のすべてが整う

となる。飯積遺跡成立期のカマドはこのうち、①であげた、長煙道タイプのカマドによってこそ特徴付けられる。そこで以下では、カマド煙道長という属性に焦点を絞り、周辺地域における同時期のカマドについて比較検討した。対象資料は、第395図に右下の一覧に示したとおりで、飯積遺跡で出土した土器の主要分布域の遺跡である。

まず、第395図によれば、県内の5世紀後半の長煙道タイプは、北東部の築道下遺跡 (No.1)、中三谷遺跡 (No.2)、北西部の城北遺跡 (No.7)、などに分布し、南東部や南西部にはほとんど分布しない。長煙道タイプの時期的推移を見れば、このタイプのカマドが一時的なものではなく、その地域において継続して選択・指向された形態であることは明白である。

一方、第396図によれば、5世紀後半段階で長煙道タイプのカマドをもつのは、太田市 (No.10) や前橋市周辺地域 (No.11) をおいて他にはない。しかし厳密には、両地域のカマドは、その受容のあり方と煙道規模においては、城北遺跡や中三谷遺跡、築道下遺跡などとは一線を画される。というのも、前者は面的ではなく点的に受容され、また、長煙道としたカマドも、後三者の1.5mほどまで達するそれとはやはり同一視できない。

また、成立期の土器構成を担った栃木南部 (No.15) や茨城西部 (No.14) には長煙道タイプのカマドは全く見られない。それどころか、周辺の板倉地域 (No.9) や千葉北部 (No.13) のカマド導入は6世紀初頭を待たねばならず、この段階ですでに今回の考察の対象からは外れてくる。補足的に、ごく至近にある清六Ⅲ遺跡、伊勢ノ木遺跡や花和田遺跡とのカマド構造上の類似は一切見られない。

以上の検討から、5世紀第Ⅲ四半期という時期に長煙道タイプをもつ地域は、埼玉北東部、北西部にほぼ限定されること、また、成立期の土器構成の大

幅を占め地域には、長煙道タイプのカマドはほとんど存在しないことが明らかとなった

以上から推せば、成立期に見られた栃木南部、茨城西部、群馬東部などの土器は、飯積遺跡を成立させた集団が持ち込んだものではなく、彼らが交流の結果手に入れたものと判断される。また、飯積遺跡を成立させた集団は、埼玉北部 (東部か西部かは限定できない) の一集団であったと想定することが可能であろう。

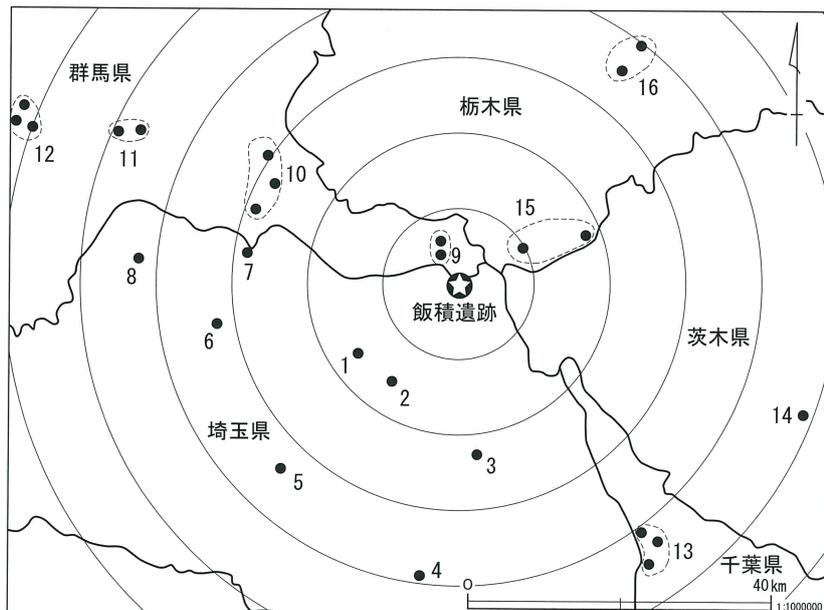
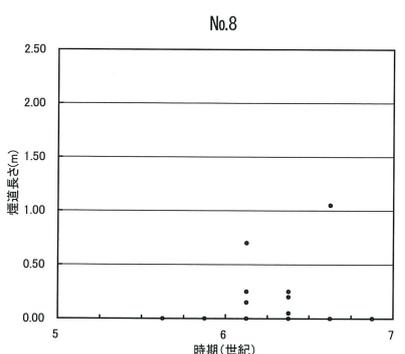
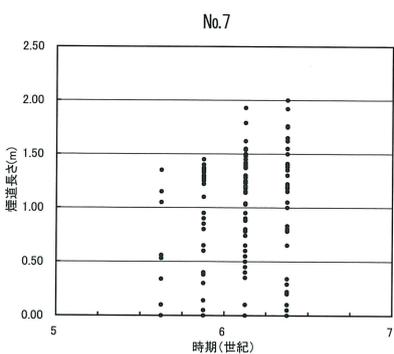
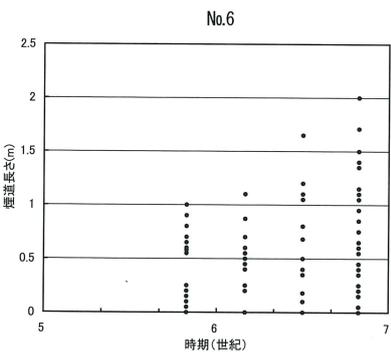
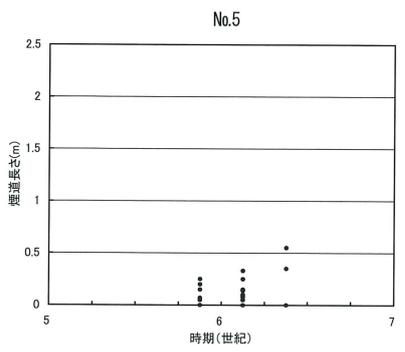
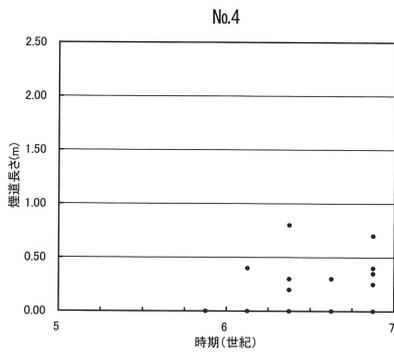
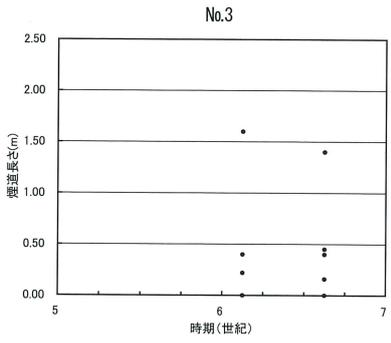
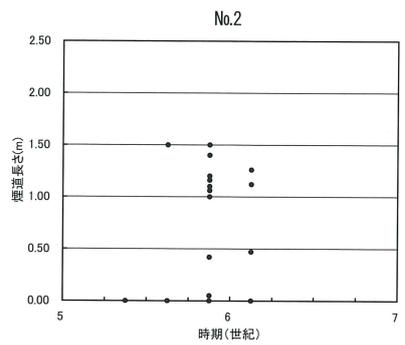
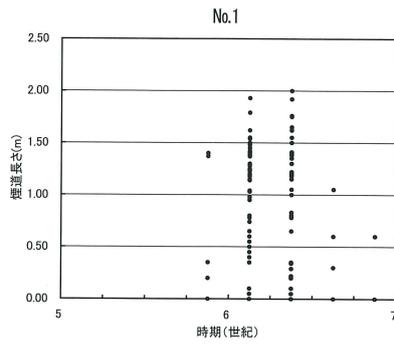
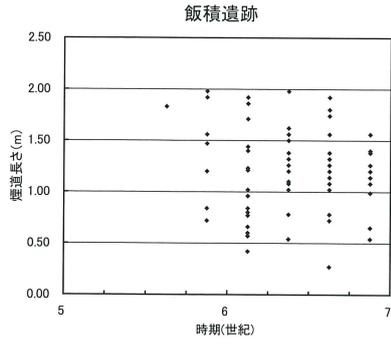
今回の検討は対象資料数に乏しく、対象地域の選択も厳密ではない。また、その導入とも関わってくる該期のカマドの問題は、本来的には煙道長というカマドの一属性の統計的データから検討されるべき問題ではない。しかしながら、5世紀後半における長煙道タイプの排他的な分布様相は、飯積遺跡を成立させたのは埼玉北部の集団であると推論するに十分なものである。

(2) 自然堤防の発達と集落の形成

調査区北側で確認された流路跡は、東西方向に流れており、確認面よりも3m以上高い現地表には、この旧地形がほとんど反映されていない。この理由としては、本遺跡周辺が洪水氾濫の頻発する地域で、沖積作用が極度に進行した結果、旧地表が消えてしまったこと、また後世、合の川の流路が安定したことで自然堤防が発達し、東西に延びる自然堤防や流路跡を埋没させてしまったことによる。

そこで問題となるのは、古墳時代後期まで東西方向に流れていた流路跡が、どの段階で南北方向に流れるようになったかということである。そもそも、本調査区で6世紀中頃に埋没した (ように見える) 流路跡は、この段階で完全な廢河川となったのか、それとも、調査区域外で依然として流れていたのだろうか。以下では、これらの疑問に答えるために、竪穴住居跡の確認面および床面の標高から、自然堤防の形成を復元し、そこから流路の変更について推測してみることにした。

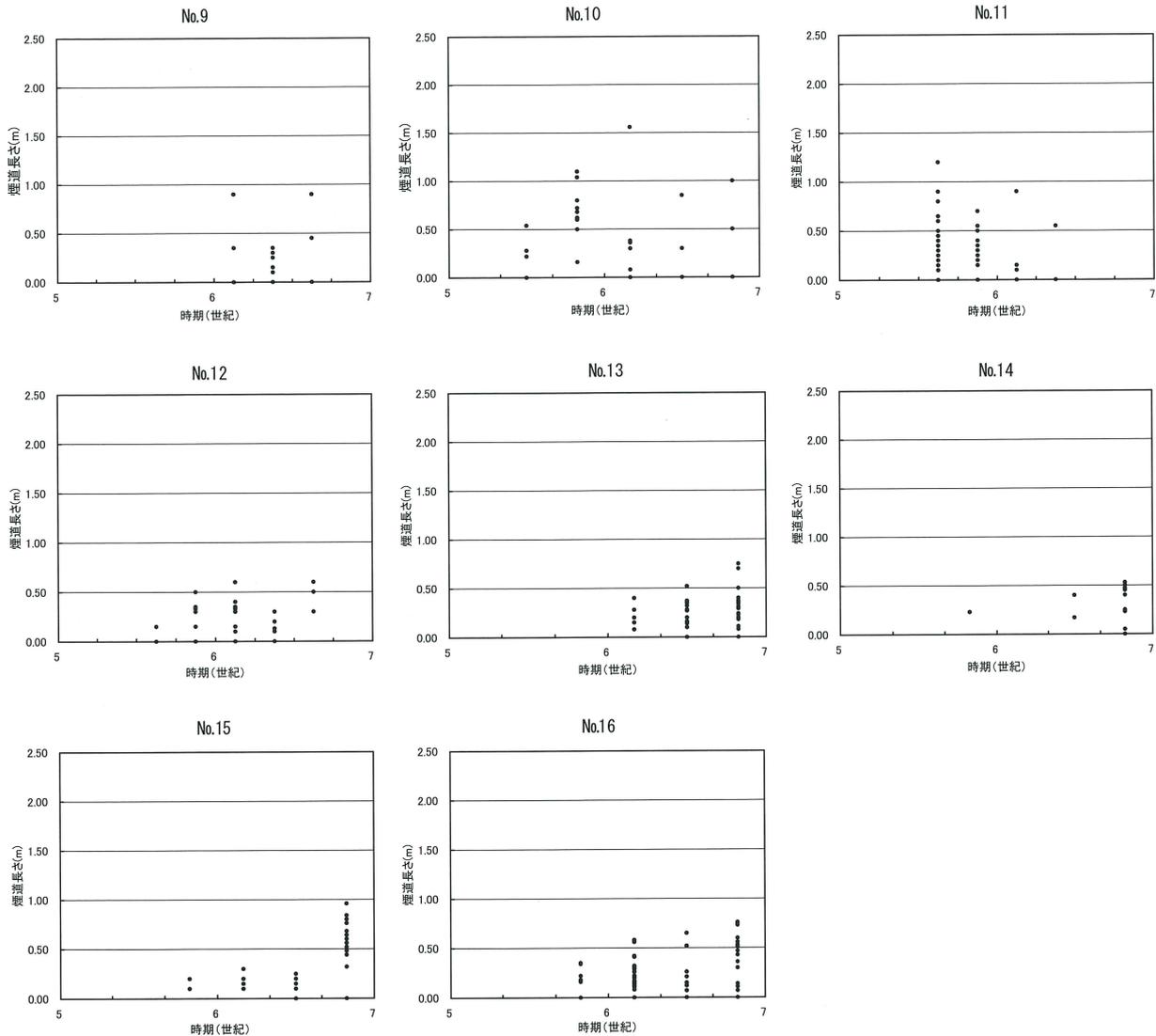
第397図では、図示された範囲の竪穴住居跡の確



〈対象資料一覧〉

No.	遺跡名	資料数	対象時期	市町村	距離
1	築道下遺跡 I~IV	139	5IV~6IV	行田市	16
2	中三谷遺跡	27	5II~6I	鴻巣市	15
3	荒川附遺跡	18	6I~III	蓮田市	23
4	城山遺跡	37	5IV~6IV	志木市	40
5	棚田遺跡	24	5IV~6II	坂戸市	34
5	桑原遺跡	70	5IV~6III	坂戸市	34
6	如意遺跡・如意南	146	5末~6後	川本町	33
7	城北遺跡	129	5III~6II	深谷市	28
8	後張遺跡	43	5III~6IV	本庄市	43
9	花和田遺跡	5	6I~III	板倉町	4.5
9	伊勢ノ木遺跡	8	6I~III	板倉町	4.5
	成塚住宅 I・II 遺跡	3	5後~6前	太田市	30
	成塚石橋遺跡	18	5中~6後	太田市	30
10	年保	2	6前~中	太田市	28
	延享割遺跡	8	5中~後	太田市	29
11	荒砥北三木堂遺跡	50	5III~6I	前橋市	47
	棚島川端遺跡	12	5III~6II	前橋市	49
	熊野堂 I 遺跡	9	6I~II	群馬町	60
12	三ツ寺 III 遺跡	15	5III~6III	群馬町	62
	下芝五反田遺跡	7	5III~6I	箕郷町	62
13	加地区遺跡群	29	6前~後	流山市	45
	上貝塚第二遺跡	6	6前~後	流山市	41
	三輪野山第二遺跡	12	6中~後	流山市	43
14	梶内向山遺跡	12	5後	つくば市	49
15	清六 III 遺跡	20	5後~6後	野木町	9
	金山遺跡 I・IV	16	6後	小山市	18
	惣宮遺跡	22	5後~6後	石橋町	35
16	権現山・百目鬼遺跡	41	5後~6後	宇都宮市	39

第395図 地域別煙道長 (1)



第396図 地域別煙道長（2）

認面および床面レベルを断面に投影し、この標高差から自然堤防の形状を探る手がかりとした。投影範囲は、自然堤防に対しほぼ直行方向になる南北(110×20m)と、自然堤防に沿った東西(90×10m)の2本である。

当然、床面の深さが当時の地形を完全に反映するとは考えないが、同時期の竪穴住居跡の異地点間で床面標高を比べたとき、その時の自然堤防の微地形を反映する可能性がある。また、異なる時期の住居跡群間で、顕著な床面標高差が見られた場合、自然堤防の発達を推測する判断材料となるかもしれない。

以上の視点から、自然堤防と直交する南北方向における床面標高の時期的推移を示し、地形の復元を

試みた(註5)。同時期の竪穴住居跡間や、異なる時期での床面標高を見ると、以下の傾向を指摘できた。まず、南北方向(第398図)では、

- ① 5世紀第Ⅲ四半期から7世紀後半頃までの床面標高は、北側ほど高く、南側ほど低く、同時期の住居跡間で50cmほどの開きがある
- ② 5世紀第Ⅲ四半期7世紀後半頃までの床面標高差は、特に推移しない
- ③ 7世紀第Ⅳ四半期には、南側において、床面標高差が30~40cmほど高い住居跡が営まれるようになる
- ④ 8世紀前半以降、北側と南側の標高差が見られなくなる

という傾向が見られた。一方、東西方向では、

⑤時期による床面標高差はほとんどない

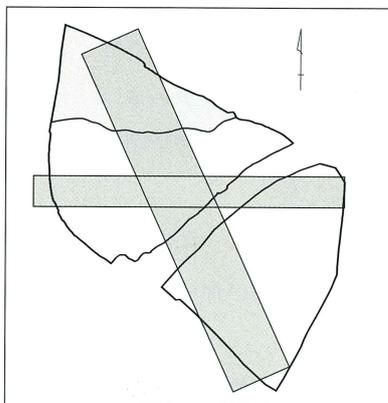
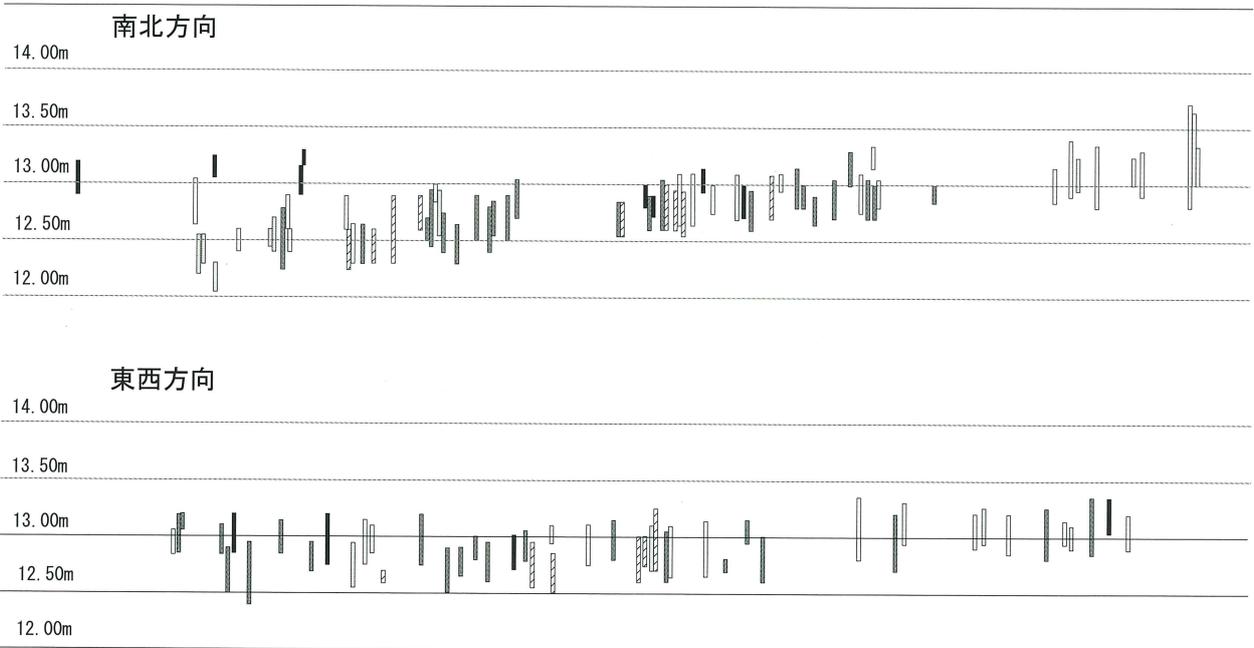
⑥東側と西側との床面標高差はない

という傾向が見られた。以上から、飯積遺跡の自然堤防の地形は、次のように復元される。

まず、5世紀第Ⅲ四半期から6世紀前半頃までの自然堤防は、南側へ向かって緩やかに下がる傾斜であった。この頃、北側は窪地となっている。その後、6世紀中頃に洪水が起こり、流路跡は完全に埋没する。7世紀末頃から8世紀初頭段階では、すでに調査区南側に、全時期に比べて床面標高が30~40cmほど高い住居跡が数軒建ち、北側と標高差がほとんどなくなりおおむね平坦となる。

その後8世紀前半には、自然堤防が垂直方向だけでなく、水平方向にも発達する。それまで調査区南側で下がっていた地形は、自然堤防を南側へ発達させ、少なくとも調査区内では平坦な自然堤防となったようだ。傾斜を始めるのはこれより南側の調査区域外と思われる(註5)。この時期は、前代までの分布域を超えて南東側に集落域を拡大する。この背景には、南側自然堤防の発達が前提となっていたと結論される。

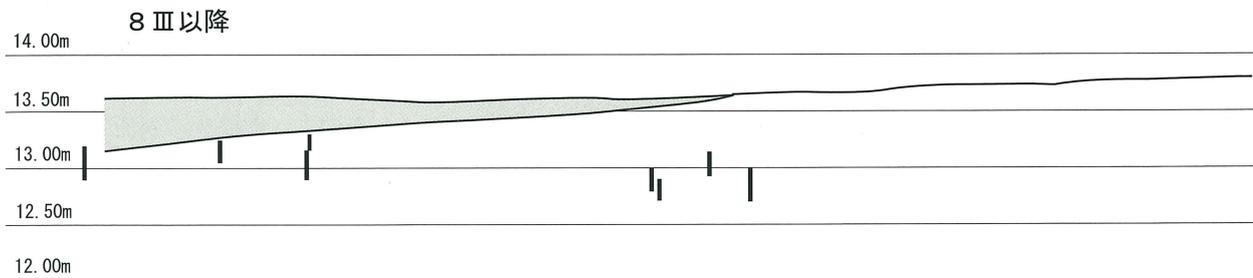
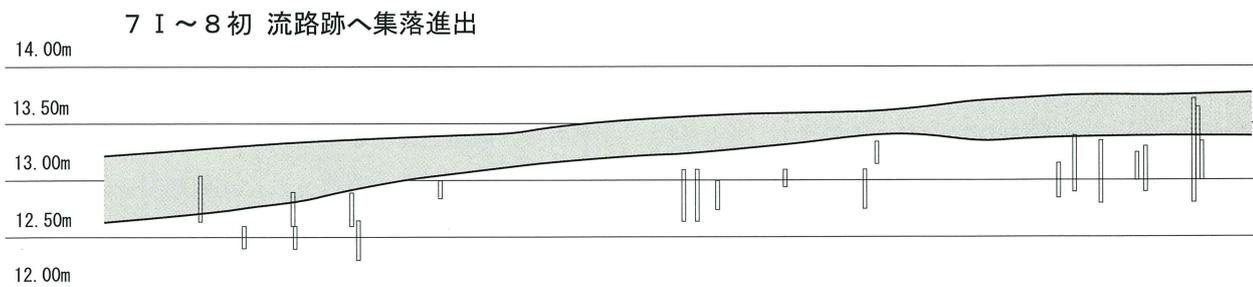
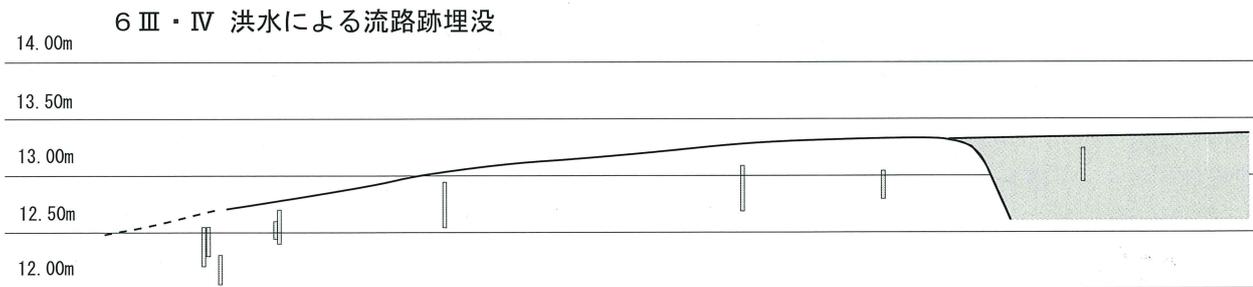
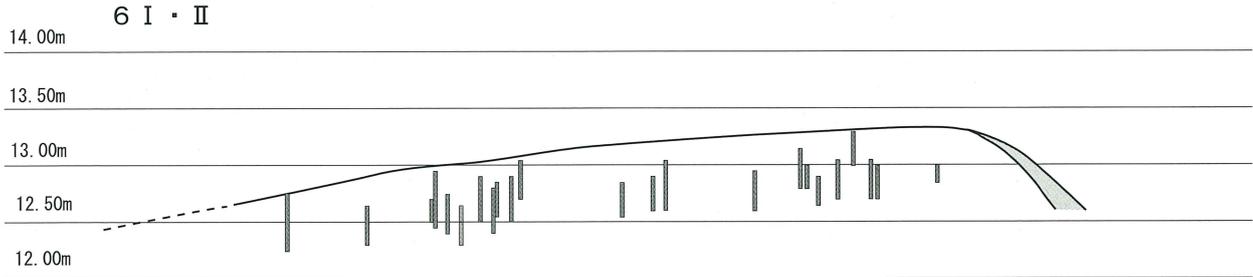
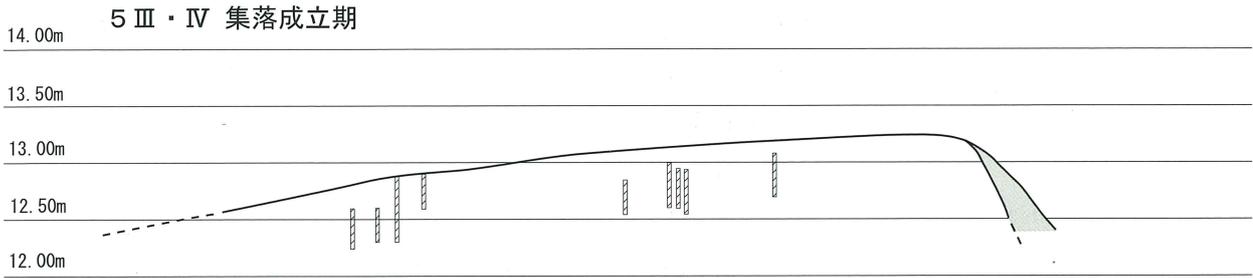
さて、それでは前掲の疑問について考えてみたい。まず、流路跡の埋没時期についてであるが、本調査で流路跡が完全に埋没した6世紀後半以降も、自然堤防は垂直方向や水平方向の発達を続けている。こ



5Ⅲ・Ⅳ
 6Ⅰ・Ⅱ
 6Ⅲ・Ⅳ
 7Ⅰ~8初
 8Ⅲ以降

時期	対象遺構
5Ⅲ・Ⅳ	SJ54・55・78・124・127・132・133・151・201・247・249
6Ⅰ・Ⅱ	SJ4・15・16・21・34・53・59・66・68・69・74・79・81・85・107・113・122・134・164・173・175・190・193・197・208・210・238・256
6Ⅲ・Ⅳ	SJ10・46・70・83・109・120・138・146・172・186・192・198・199・207・220・226・227・232・252・
7Ⅰ~8初	SJ3・5・7・8・11・14・16・18・19・26・28・51・52・58・61・63・64・65・71・72・73・75・77・80・82・86・87・91・92・93・111・112・118・121・130・139・147・149・150・152・153・154・155・157・158・160・165・176・204・209・212・228
8Ⅲ以降	SJ1・2・25・95・97・108・125・126・131・166・214

第397図 竪穴住居跡の床面標高



第398図 床面標高時期的推移

のことから、流路跡はその後も調査区域外において遺跡周辺を流れていた可能性がある（註6）。

次に流路の変更についてであるが、東西方向では、南北方向のように、いずれの時期においても有意な床面標高が見られず、8世紀前半から10世紀前半くらいまでは、合の川方面からの自然堤防の発達を推測させる傾斜はうかがえない。また、鷲神社社殿部基壇の調査では、第3・4次調査区の北側で確認された中世末頃の旧表土（標高15.5m）が、水平ないし西側に向かってわずかに傾斜しているのが確認されており、この時期にはすでに、合の川が土砂を供給していたことが予想される。

これをまとめると、飯積遺跡周辺の流路の変更は、以下のように要約される。まず、飯積遺跡における流路跡は6世紀中から後半に埋没するが、周辺において河川はその後も継続して東西方向に流れていた。飯積遺跡の北側を東西方向に流れる流路から、西側を流れる合の川への流路変更（註7）は、上限を10世紀前半とし、下限を中世末頃とする時期である。

（3）集落の変遷

飯積遺跡の調査では、第2次調査区で92軒（事業団報告書333集）、第Ⅲ・4調査区（本報告書）で152軒、合わせて244軒の住居跡が検出された。これらの住居跡は5世紀第Ⅲ四半期に現れ、10世紀に至るまでほぼ継続して営まれていた。このうち、今回対象としたのは、時期が確定できた176軒（約72%）である。

なお、各図左下には、住居跡主軸方向による東軸群、西軸群の分布を示しており、その変遷については前項にて既述済みである。また、規模と平面形の時期的推移も既述の通りであり、本来はそれぞれを統一的に評価すべきであるが、煩雑さを忌避するため、それぞれ別項を用意した。

5世紀第Ⅲ四半期（集落成立）以前

集落成立以前の飯積遺跡は、北側は窪地（流路）で、南側はこの流路が形成した自然堤防が東西方向に延びていた。時期は不明だが、集落成立以前のあ

る時期、この自然堤防の北側斜面は、河川の攻撃を受けている。その後、河川の攻撃が終わると、周辺は穏やかな堆積環境となったらしい。

5世紀第Ⅲ四半期（第399図）

飯積遺跡の集落成立期である。集落は河川の堆積環境が穏やかになってしばらく経過した川のほとりに営まれた。住居跡は3軒確認されており、第201・233号住居跡は、流路跡から比較的近い場所に占地している。住居跡同士の重複はなく、間隔をあけて分布している。第201号住居跡はカマドをもった住居跡で、第247号住居跡は重複する他遺構による損壊が著しくカマドの有無は不明である。

住居跡は、その成立期から煙道の極端に長いカマドをもっている。北側の凹地斜面部には集落の形成とともに土器の廃棄が行われる。

5世紀第Ⅳ四半期（第399図）

住居跡は19軒と急激に増える。自然堤防の中央付近にまとめられ、同時期内でも激しく重複を見せる。ある一定の間隔をあけながら、住居跡群がまとめられ、この中で重複を見せる。住居跡同士は、規模および主軸方向などが近似することから、第396図に示したようなエリアの中で建て替えを繰り返していたらしい。第251号住居跡は、前時期の第201号住居跡と隣接し、主軸方向も一致しており建て替えの可能性はある。飯積遺跡では最古例となるカマド掘り方を設けており、集落の形成された比較的早い段階で導入されている。

6世紀第Ⅰ四半期（第400図）

住居跡は28軒と前時期に続いて増加し、飯積遺跡最大のピークを迎える。分布は、流路から離れた自然堤防の東側に移り、あたかも流路跡を避けるかのようである。しかしながら、流路跡の斜面地への土器廃棄は、前時期あるいは後代よりも盛んに行われ、儀礼ともいえるべき、土師器坏・高坏や甕、白玉を用いた供献行為も行われた。

住居跡の主軸は、圧倒的多数が東軸群（先述）である。建て替えは、第30号住居跡と、隣接する前時



第399図 集落変遷図 (5 III・IV)

期の第33号住居跡とで行われている可能性がある。
また、第48・67・36・37号住居跡も、それぞれ近似した規模、主軸方向であり、ほぼ同一地点に繰り返し建て替えられたようである。

6世紀第Ⅱ四半期（第400図）

洪水による流路跡の完全埋没が起こる。洪水以前の流路跡には黄褐色粘質土が安定して堆積していたが、突如洪水に見舞われ、褐色粗粒砂に完全に覆われ埋没した。分厚く堆積した粗粒砂の間層には、黄褐色粘質土の薄層を挟んでおり、洪水は複数回あったと見られる。斜面地には、洪水の合間にピットや土坑が掘りこまれている。

住居軒数は16軒と前時期の半数近くまで減少する。その分布は前時期と対照的で、より流路跡に近い西側に営まれた。特に第113・171・193号住居跡は、流路跡にもっとも近い自然堤防の際に等間隔に立地する。住居は西側に偏って作られたため、前時期の住居跡とはほとんど重複しない。それだけでなく、本時期は前時期から一転し、真北からやや西に触れた主軸をもつ住居跡が多数作られた。これらの変更は、集落規模で行われているようである。

同一時期内での重複はわずかに見られるが、これは建て替えの結果と思われ、基本的には前時期と同じ一定間隔をおいた集落設営と思われる。

6世紀第Ⅲ四半期（第401図）

住居跡は16軒を数え、前時期と横ばいである。流路跡からやや離れ、自然堤防の中心よりやや北にまとまる。この分布は、洪水に対するリアクションと捉えられる。

6世紀第Ⅳ四半期（第401図）

流路跡へ住居が進出する。第253号住居跡はその最初の住居跡であるが、進出位置は洪水砂層ではなく、これより前に堆積した粘土層上である。流路跡への集落進出を、試行的に始めた時期と位置づけられよう。

検出された住居跡は9軒で、前時期よりやや減少するが、これは集落の盛衰を測るものではなく、居

住域の中心が移動した結果と考えられる。住居同士の重複関係は無く、各々が等間隔に配置される。

なお、流路跡堆積層には、被熱痕跡を伴う土坑が分布するようになる。いずれも出土遺物がほとんどなく、遺物から時期を特定することはできないが、堅穴住居跡との関係からは、7世紀第Ⅲ四半期以降や8世紀第Ⅰ四半期以降のものが見られる。他遺構との重複がないものは、本時期まで遡れることから、これらの土坑の上限期として押さえておきたい。

7世紀第Ⅰ四半期（第402図）

前時期に比べ13軒と微増するが、住居の全体数、集落自体の増減は不明である。引き続き流路跡に住居跡が営まれるが、設営の単位は小規模である。

7世紀第Ⅱ・Ⅲ四半期（第402・403図）

検出された住居跡は、第Ⅱ・Ⅲ四半期ともに5軒ずつと著しい減少を見せる。両時期は非常に良く似た分布を示し、ともに第2～4次調査区の東側に偏っている。居住域の中心が移ったのかもしれない。

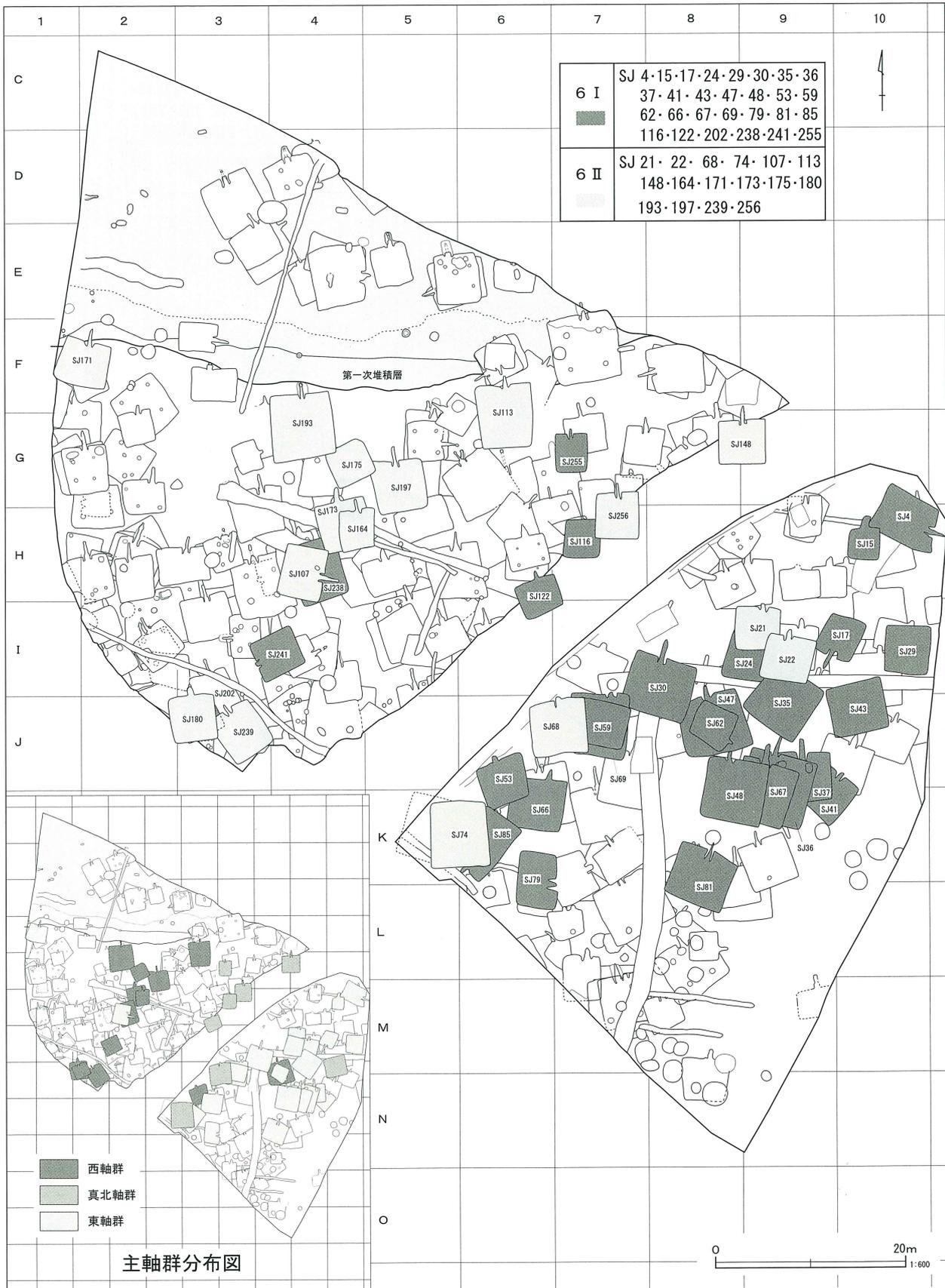
第Ⅱ四半期は、前時期の分布に対し、流路跡から離れた場所に占地するようになる。また、第Ⅲ四半期はこれに継続して集落が設営されている。

7世紀第Ⅳ四半期（第403図）

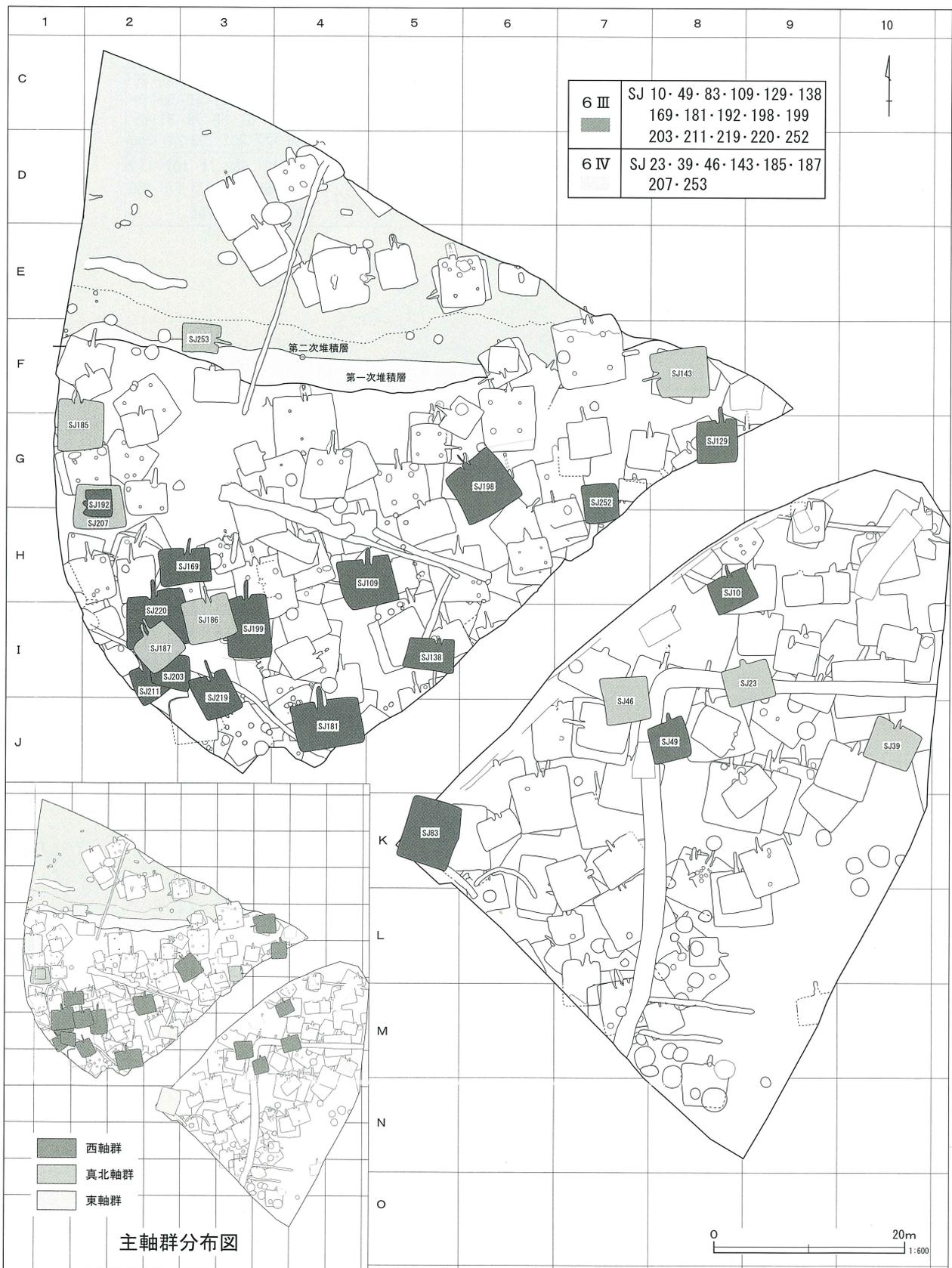
住居構造の変化が起こり、また、流路跡へ本格的に集落が進出した時期である。より正確に述べるなら、前時期までの構造的特徴を持った住居に、新しい要素をもった住居が加わってくる時期と言い表せよう。住居軒数は前時期に比べ22軒と急増し、調査区全体に展開する。

住居跡の平面形・規模は、前時期までの「方形・大型」から、第44・51・94・152・144・188号住居跡に見るように、「長方形・小型」へと変化する。また、同一時期内での重複状況は、前时期的な住居跡においてのみ見られ、「長方形・小型」の新しい様相をもった住居跡は、これまで以上に間隔を空け、主軸方向も北西から北北西へと強く規制される。

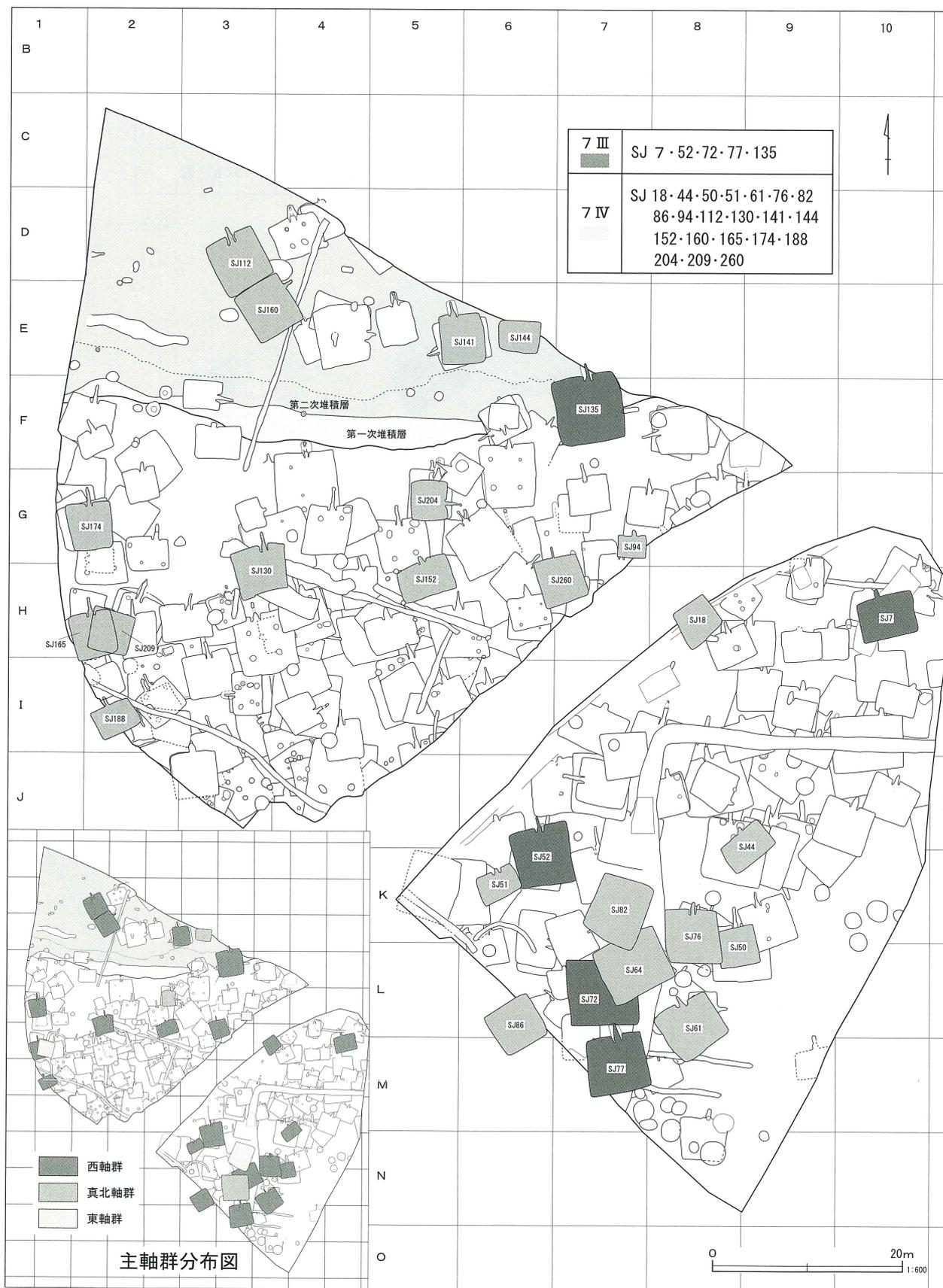
以上に見たように、古墳時代的な構造をもつ住居跡の中に、奈良時代的な構造を持つ住居の出現を見



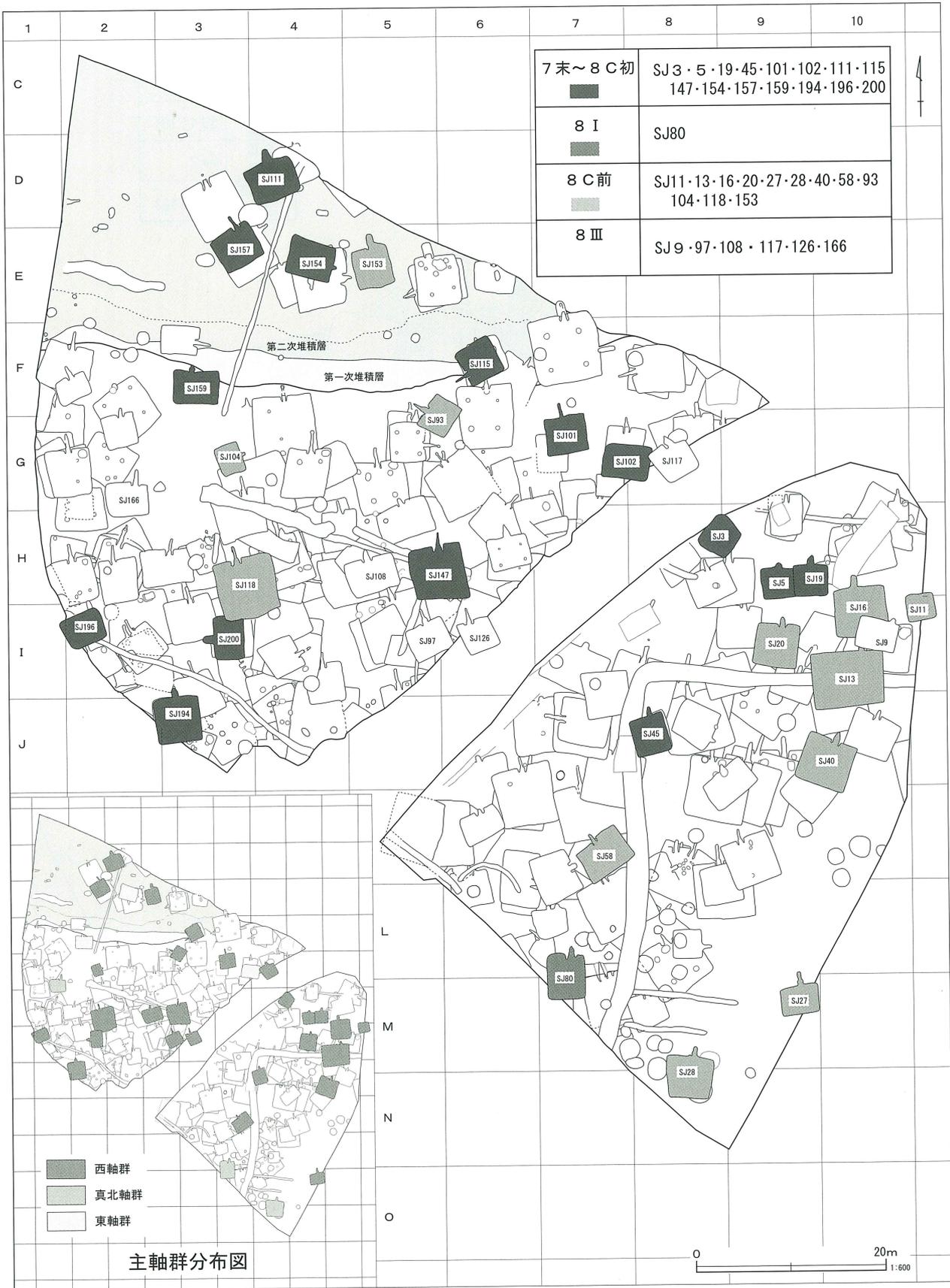
第400図 集落変遷図 (6 I · II)

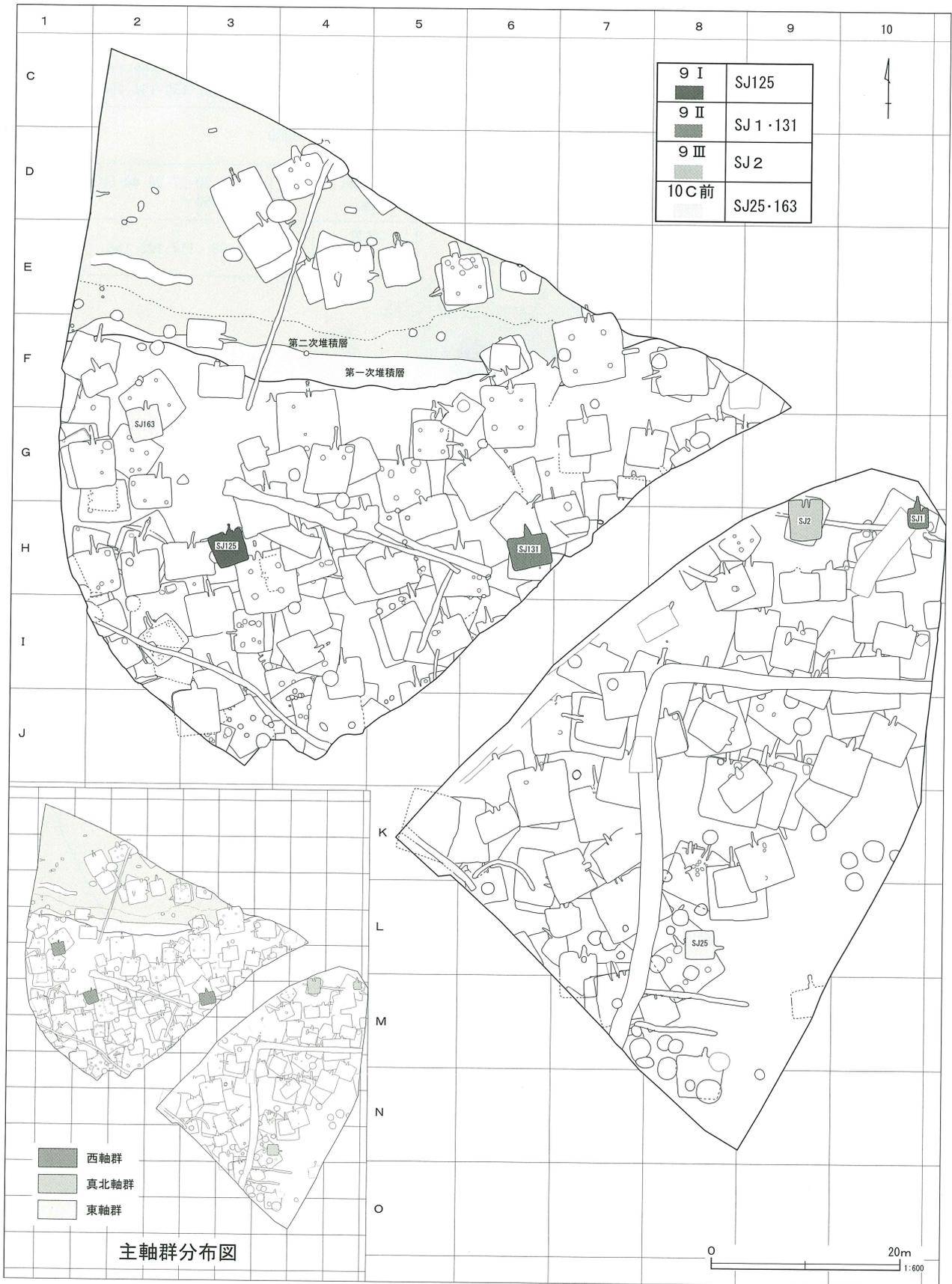


第401図 集落変遷図（6 III・IV）



第403図 集落変遷図 (7 III · IV)





第405図 集落変遷図（8 IV～9 III・10前）

たのが本時期の特徴と言えよう。

7世紀末から8世紀第Ⅰ四半期（第404図）

住居軒数は15軒を数え、引き続いて流路跡への集落形成が行われる。古い様相を持った住居軒数は前時期に較べて減り、新しい様相をもった住居が増加する。

8世紀前半（第404図）

集落域の拡大に特徴付けられる。検出された住居跡は12軒で、住居跡の小型化が進む。東側では分布密度がやや高くなり、第27・28号住居跡のように、これまでに住居の分布していなかった場所に住居を営むようになる。前時期までは、これらの住居跡の北西側が住居分布域であり、集落の限界であった。南東側への自然堤防の発達が前提となって集落は拡大していったようである。

8世紀第Ⅲ四半期（第404図）

住居跡数が6軒と半減するが、分布密度としては前時期と大きな差異はない。自然堤防の中央付近に多く占地する。本時期の住居跡カマドは煙道部の長大なものが多く、また燃焼部の壁切り込み長も前時期に比し長くなる。

8世紀第Ⅳ四半期～9世紀第Ⅲ四半期（第405図）

本時期のおよそ100年もの間、集落は第Ⅰ四半期自然堤防の北側で、僅かに1軒の住居跡が検出された。第Ⅱ四半期の住居跡は2軒検出された。自然堤防中央部に1軒と東端近くに1軒が見られる。第Ⅲ四半期は、自然堤防中央近くで1軒の住居跡が検出された。竪穴住居跡から平地式建物への住居構造の変化も想定せねばなるまいが、竪穴住居跡を掘り込むピットもほとんど見られず、また遺物量も少ないことから、集落自体の衰退があったと捉えられる

10世紀前半（第405図）

小型・方形の住居跡が2軒検出されている。これ以降、住居跡は見られなくなり、集落はこれにて終焉する。

10世紀後半以降

集落が終焉した後、中世末頃まで遺跡において人

的介在が一切なくなる。中世末頃までには西側から土砂の供給がなされ、現在確認される合の川旧流路の流れがこの間に形成されたい。中世末から近世には、区画溝や方形区画、溝跡、井戸跡などが掘られた。万治2年（1660）には飯積鷲神社が勘定される。

（4）自然堤防と流路

飯積遺跡は、利根川と合の川の分流するその付根という立地が特徴的である。第二章「遺跡の立地と環境」では、近世初頭の利根川東遷事業について触れてみたが、これより以前の中世や古代に遡る河川、流路の復元は、文献史学方面から中世の国境と河川についての考察（武井1989）があるほかは、ほとんど見られず、飯積遺跡周辺の河川環境を復元するのは難しい（註8）。このような状況の中で、今回の調査では、6世紀中頃の洪水によって埋まった流路跡を確認できた意義は深い。この成果は、周辺地域における古墳時代の流路を明らかにできる可能性をもつであろう。

そこで以下では、本調査の成果と現状で明らかにされている自然堤防上の遺跡から、それぞれの自然堤防の同時存在を求め、当時の河川流路を復元することで飯積遺跡の流路跡を周辺環境に位置づけたい。

この検討を行う前に、飯積遺跡周辺の微地形を確認しておこう（第406図）。『中川水系』「河畔砂丘」の項では、飯積遺跡周辺の微地形について分布図を示している（平社・佐藤1989）。これによれば、自然堤防Aは、飯積遺跡の北東で、合の川に沿って二本（自然堤防A1とA2）が並走し、中耕地でひとつ（自然堤防A3）となっている。そして、この併走した自然堤防の間を流路跡（＝流路跡①）としている。また、同書では示されていないが、飯積遺跡の立地する自然堤防A6は、現存集落の分布や現地地表の観察などから、図示したように東西方向に延びていたものと推測される。

次に、第1表（p7）を参考にしながら両自然堤防上に位置する古墳時代の遺跡を見てみると、まず、

自然堤防 A1 では須賀遺跡 (2)、自然堤防 A2 では山越遺跡 (3) が位置している。また、飯積遺跡の立地する自然堤防 A6 では、南側隣接地にある「鶴島 (10)」のほか、「飯積 (11)」を挙げることができる。

上記の自然堤防とこれに立地する古墳時代の遺跡分布からは、以下の推測が成り立つ。

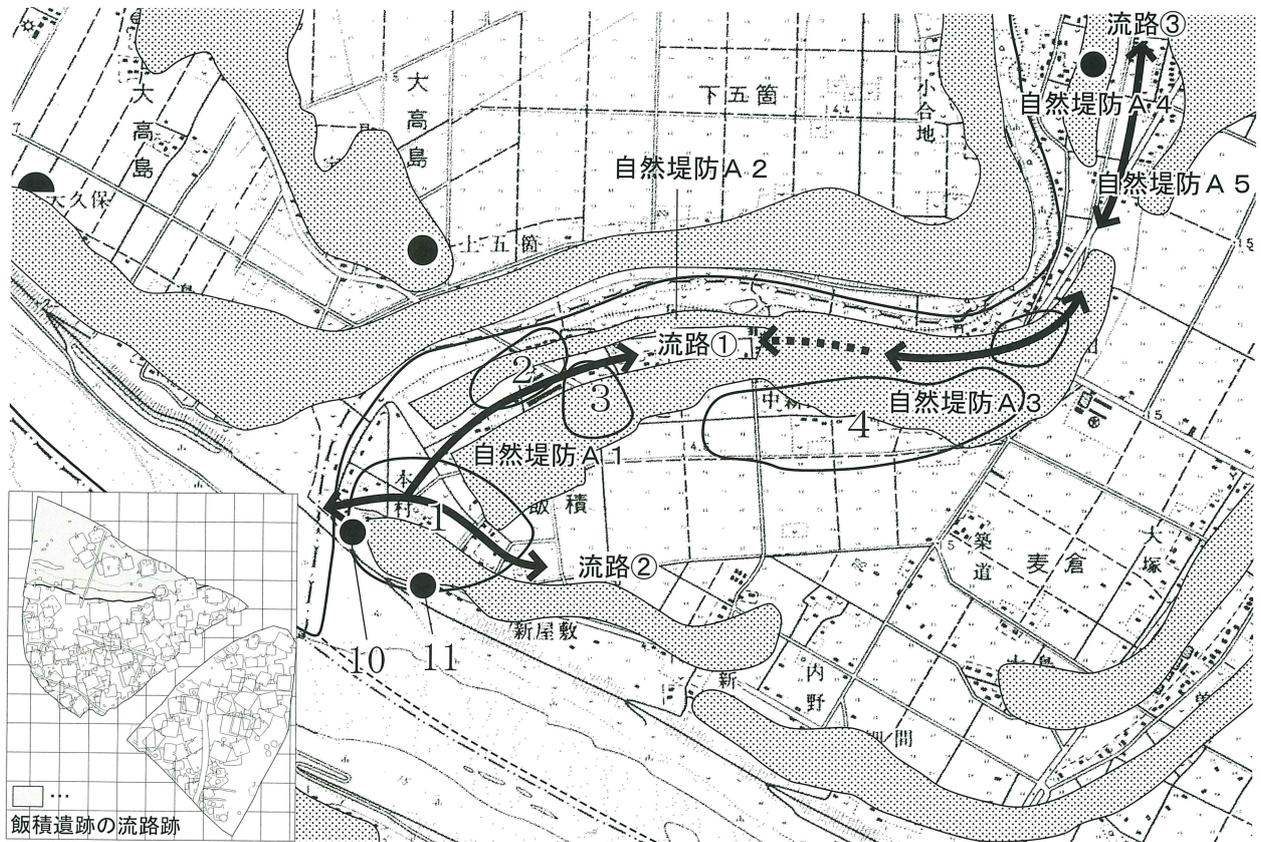
- ①自然堤防 A1 と A2 間を流れる流路①は、古墳時代まで遡れる可能性がある
- ②自然堤防 A1 と A2 を覆うように分布する A3 は、これより新しい自然堤防である
- ③自然堤防 A4 と A5 の間も流路の可能性があり (=流路③)、流路①に相当する可能性がある
- ④飯積遺跡と「飯積」の存在から、自然堤防 A6 は東西方向に延び、本遺跡の流路跡はこの北側を流れていた可能性がある (=流路②)

以上から、飯積遺跡の流路跡は、第406図の矢印で示したように、流路①、または流路②の流れの一

部である可能性がある。自然堤防上の遺跡から察する限り両流路は古墳時代後期まで遡り、新旧関係は不明だが並存していた可能性もある。

また、自然堤防 A3 は A1・A2 や A4・A5 の自然堤防を覆っており、「A1・A2、A3・A4 (古) → A3 (新)」の新旧関係が予想される。流路①・③が古墳時代後期頃の流路であるならば、おそらく自然堤防 A3 は、武井氏が指摘する13世紀から15世紀の国境である、合の川の自然堤防と推測される。また、自然堤防 A1・A2 と A4・A5 の一連の流路は、合の川よりも古い、古墳時代頃の流路(「古合の川」ともいうべきか)であったと考えられ、本遺跡の流路跡も、この一部であった可能性がある。

また、自然堤防 A3 付近で見られる、中世の自然堤防が古墳時代の流路跡を埋没させる現象こそ、本遺跡で見られる、10世紀前半以降中世末頃までの自然堤防が、東西方向の古墳時代の流路跡や自然堤防と切り合うその関係に他ならないのではないか。



第406図 飯積遺跡周辺の流路

次に、範囲をやや広げて河川流路を眺め、飯積遺跡の流路跡を周辺地域の中に位置づけてみたい。第407図では、第二章「立地と環境」(第5図)で触れた周辺遺跡のうち、飯積遺跡と並行して営まれた古墳時代から奈良・平安時代の遺跡をプロットした。図示範囲には、利根川水系の、「古合の川」、谷田川、利根川が見られる。

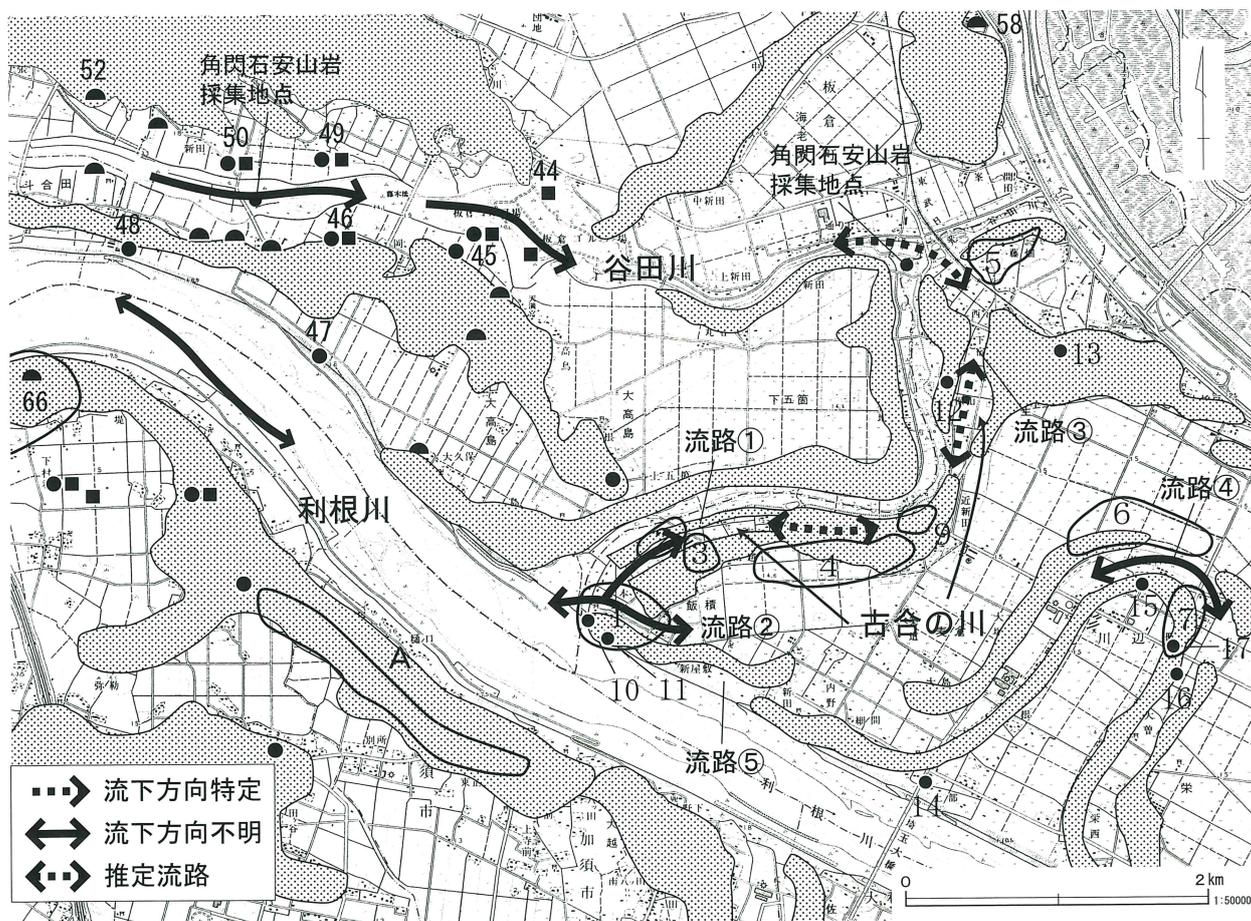
まず、先ほど推定した「古合の川」は、本遺跡から流路①へ北上し(ただし流下する方向は不明)、蛇行をしながら流路③へ接続、さらに北上を続けて谷田川の合流地点へ至る。

一方、古墳時代における谷田川の流れは、数々の自然堤防上の遺跡やこれらで確認される洪水層(註9)、また、流域における角閃石安山岩を石室石材に用いた後期古墳(道明山古墳(52)、筑波山古墳(53)、舟山古墳(54)など)の存在や角閃石

安山岩の採集地点(註10)等々から確実視され、流下方向も西から東へと明らかにされている(宮田2001b)。また、利根川流域でも城遺跡(47)や新村下遺跡(48)で洪水層が確認され、当時の利根川流路の存在が保証される。

以上を整理すると、古墳時代の河川は、谷田川、「古合の川」、利根川が見られ、谷田川は「古合の川」と、また「古合の川」は利根川と接続していた。利根川、谷田川は現在とさほど変わらぬ流れであったが、合の川は、現在確認される旧流路よりやや東側に流れていたと復元される。

また、北川辺町内を蛇行する自然堤防Bでは、中世の板碑を出土する地点が多く、さらに遡ると太田遺跡(6)や曾根遺跡(7)のほか、「柳生新田」(15)、「越中沼東」(16)、「飯積三軒」(17)などで古墳時代の遺物が多数確認され、飯積三軒では4



第407図 古墳時代から古代の流路

世紀後半頃まで遡る土師器壺が見られる。このことから、自然堤防Bを流れた流路④も古墳時代後期まで遡上する可能性がある。

先述の流路②の走行方向の延長が流路④へ指向しているが、両者の関係は不明である。自然堤防A6の南側の流路(=流路⑤)も考慮しておくべきなのかもしれない。

以上、飯積遺跡をとりまく地域の、自然堤防とこれに立地する遺跡の分布状況から、当時の自然堤防の遡上時期を把握し、これを形成した河川流路の時期を求め、飯積遺跡で確認された流路跡を周辺環境に位置づけた。

この結果、武井氏が指摘した、合の川の遡上時期(13~15世紀)はほぼ追認できるが、これより古い

3. 飯積遺跡の出土土器と周辺地域

飯積遺跡は、国境の集落である。武蔵、下総、下野、上野国の国境が、複雑に入り組む場所に営まれた集落である。利根川、渡良瀬川、思川などの河川は、流路を複雑に変え、南進、あるいは東進していたため、国境形成にも大きな影響を与えていた。そして大河は地域を分け、また地域と地域をつなぐ経路となっていた。

飯積遺跡は、八つの地域に囲まれていた。ここでいう地域は、土器の型式と組み合わせで確認できるまとまりである(註11)。便宜的に群馬東部、埼玉北部、埼玉南部、千葉北部、茨城西部、新治、栃木南部、佐野周辺などの名称で呼称することとした。

この地域の範囲は、古墳時代の5世紀第Ⅲ四半期から奈良時代の8世紀前半まで継承された。そして飯積遺跡へこの八地域から、特色のある土器がもたらされた。そのため飯積遺跡の土器は、複雑な組み合わせとなった。

その組み合わせの実態と、それを生んだ歴史的背景について、ここではまとめておくこととする。そのため、第408~420図を準備した。同図は、四半世紀ごとに移り変わる飯積遺跡の土器と、その組成、

合の川の流路(「古合の川」)が存在する可能性があり、飯積遺跡の流路跡もこの一部の可能性があるという成果が得られた。

以上の検討は、かつての河川のごく一部である「流路跡」と、古記録や遺跡・散布地の分布という確度の低い資料から、推論に推論を重ねたもので、資料の乏しい当地域において、現状で与えられた資料から、どこまで当時の河川の様相を捉えられるかという試みであり、これがどれほどの妥当性をもつかはわからない。また、本来的には飯積遺跡が集落形成を終える10世紀以降の流路を検討し、古墳時代からの流路の変遷を明らかにすることは適わなかった。今後の検討課題である。

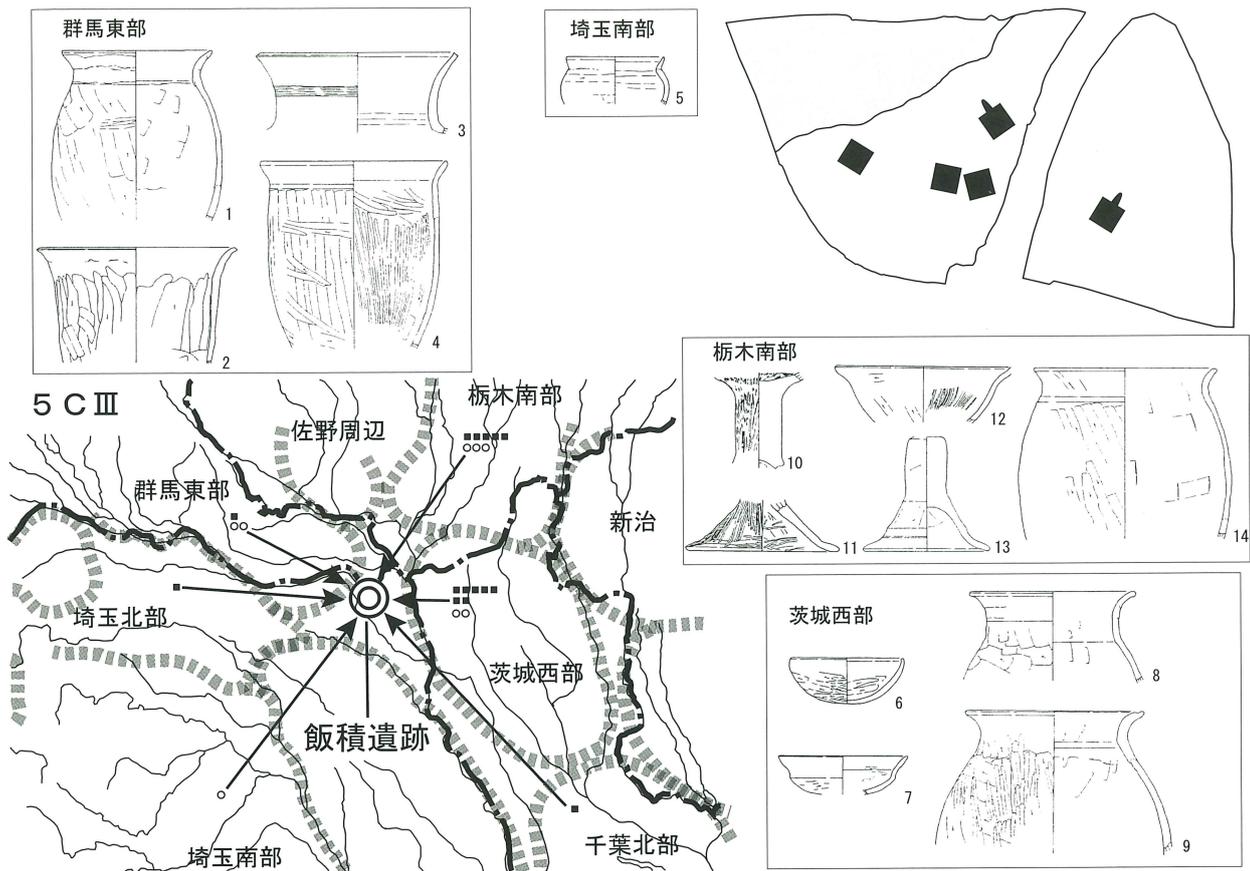
集落規模の変遷、各地域からの搬入量の相対的な比較を行った図である。

この図の作成にあたり、まず、竪穴住居跡から出土した土器について、一点ごとに器形や成形・整形の特色、胎土などから、どの地域のいつ(時期)の土器と共通する土器かを明らかにした。

つぎに竪穴住居の一括資料に基づき、飯積遺跡出土土器の編年作業を行い、共通地域ごとの土器の変遷を追った。そして土器の出土した住居の時期を確定し、飯積遺跡へ四半世紀ごとにもたらされた土器(註12)を地域別に合計した。

そして同図では、食膳具(坏、椀、皿、高坏等)を■、煮沸具(甕、甑、壺等)を○であらわし、大きな記号を10点、小さな記号を1点として、地域ごとの合計数を表現した。また、時期によって竪穴住居の構築数、ひいては土器の消費量が異なるため、右上に竪穴住居の分布を示した。

なお、飯積遺跡では、5世紀第Ⅲ四半期後半から10世紀後半までの竪穴住居や土器が出土したが、8世紀第Ⅳ四半期以降、竪穴住居の構築数が、二、三軒と極端に少なくなり、出土土器も激減するため、



第408図 5世紀第Ⅲ四半期の土器と地域

ここでは分析を控えた。

以下、四半世紀ごとに動向を追っていく。

5世紀第Ⅲ四半期

東から西に流れる流路跡（谷）の南側に竪穴住居が登場した。集落規模としては、けして小さくない。飯積遺跡は、埼玉北部特有の長い煙道のカマドが取り付く竪穴住居で構成された集落であった。

しかし、第408図にみるように集落を構成する土器は、圧倒的に栃木南部、茨城西部の地域の土器であった。竪穴住居から出土した土器は少ないが、流路跡（谷）から大量の土器が出土し、その傾向はさらに拡大する。

長大な煙道のカマドと、東関東の土器といった「ねじれ」現象は、飯積遺跡誕生の複雑な歴史的背景を示している。

5世紀中葉、栃木県南部には、小山市に摩利支天塚古墳、群馬県東部には、太田天神山古墳、女体山古墳といった巨大な前方後円墳が築かれた。この大

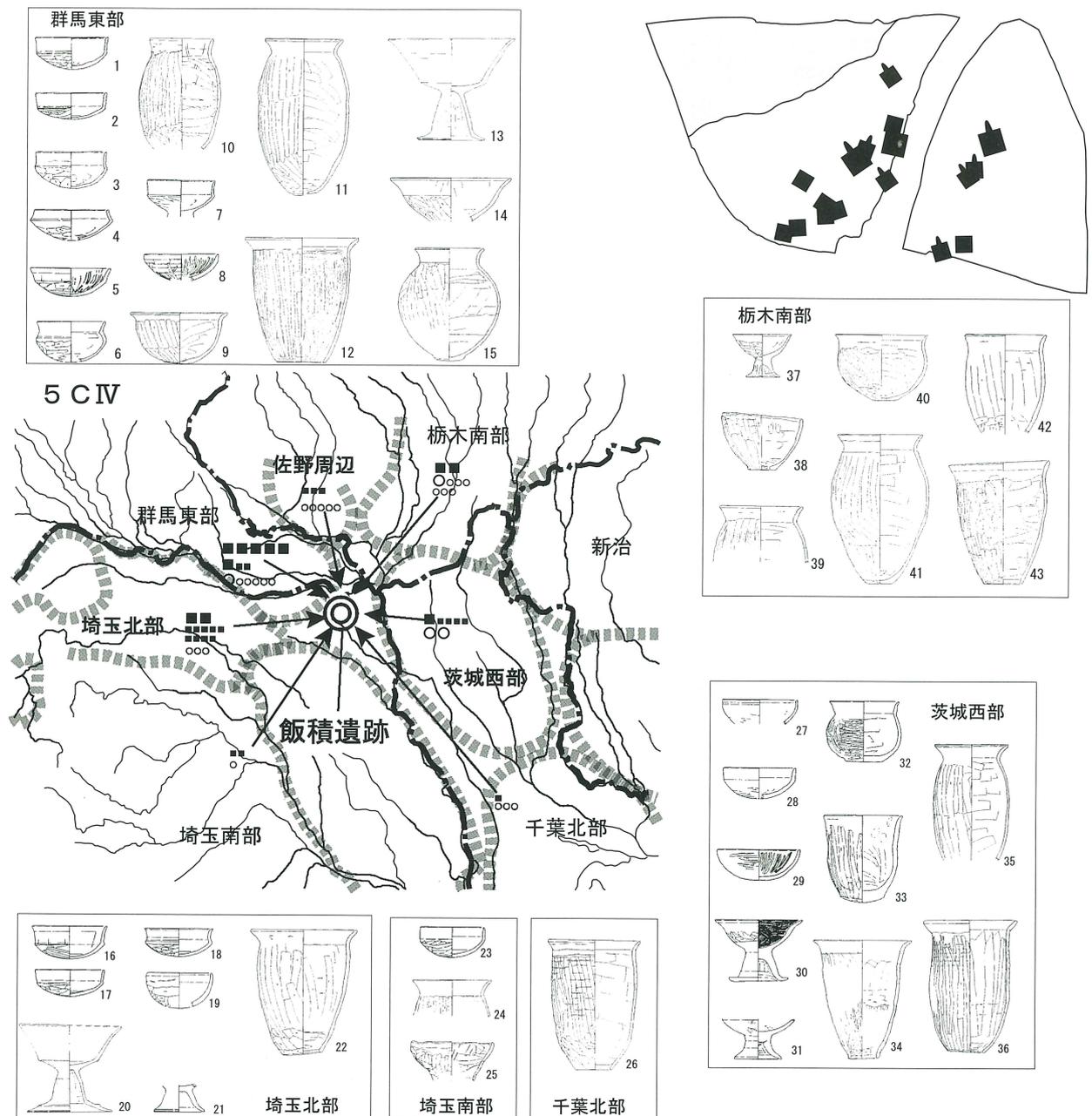
形前方後円墳に象徴される地域権力に、楔を打ち込む形で埼玉北部で埼玉古墳群が形成される。

埼玉古墳群は、稲荷山古墳の辛亥銘鉄剣が示す、大王の杖刀人首として活躍した人物につながる人々が営んだ古墳群である。埼玉古墳群の登場と前後して、埼玉北部、とくに深谷市、熊谷市、行田市に広がる妻沼低地には、多数の集落が出現した。その集落では、長大な煙道のカマドを設けた竪穴住居が建てられた。

つまり、飯積遺跡は、埼玉古墳群にかかわる集落では、東北端の集落として誕生したのであった。そのため、大掛かりな共同作業による竪穴住居の建設は、出身となった埼玉北部の住居型式が採用され、生活消費財の土器は、地理的にも近い栃木県南部、茨城県西部の人々との交流によって獲得されたのだと考えたい。

5世紀第Ⅳ四半期

流路跡（谷）の南に登場した集落は、三～四倍と



第409図 5世紀第Ⅳ四半期の土器と地域

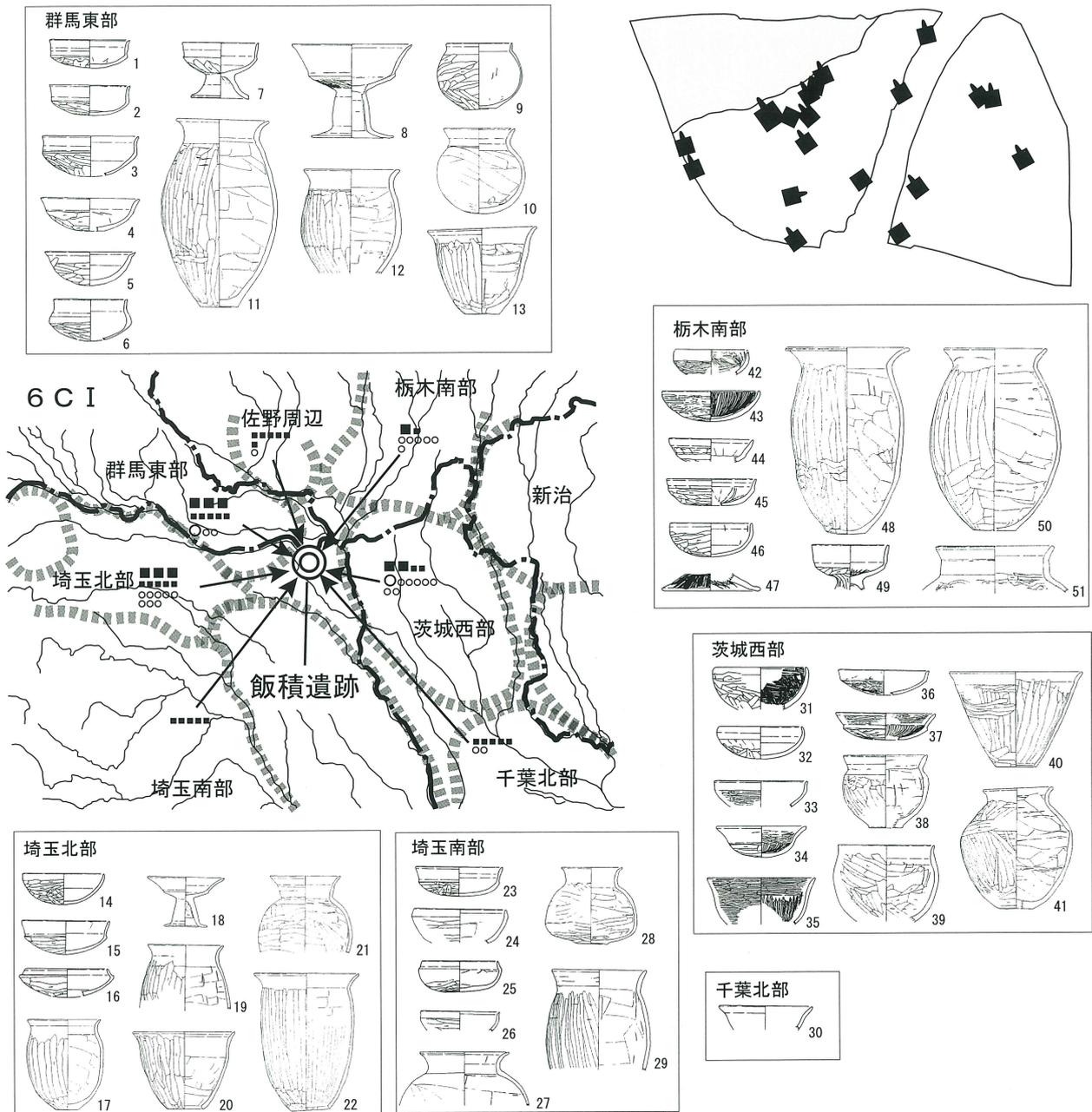
なり、急速な成長を遂げた。カマドは、やはり長い煙道のカマドが用いられ、埼玉北部との緊密なつながりを保つ。飯積遺跡を取り囲む地域は、その後も奈良・平安時代まで、煙道の短いカマドであったが、飯積遺跡は、奈良時代まで長い煙道を踏襲し、埼玉北部とのつながりを絶やさなかった。

一方、飯積遺跡で用いられた土器は、第409図が示すように群馬東部、埼玉北部から急速に供給が増加した。とくに群馬東部、太田市周辺との交流が積

極的になったのは、渡良瀬川を媒体とした交流が高まったためである。

流路跡（谷）の底近くの堆積土には、渡良瀬川の太田市や足利市近郊の頁岩系の転石、あるいは佐野市近郊の結晶岩系の転石が含まれており、飯積遺跡までのルートは明確ではないが、6世紀第Ⅱ四半期まで、飯積遺跡の北側に渡良瀬川水系の河川が流れていた。

このころ、太田市菅の沢窯の製品が、埼玉北部や



第410図 6世紀第Ⅰ四半期の土器と地域

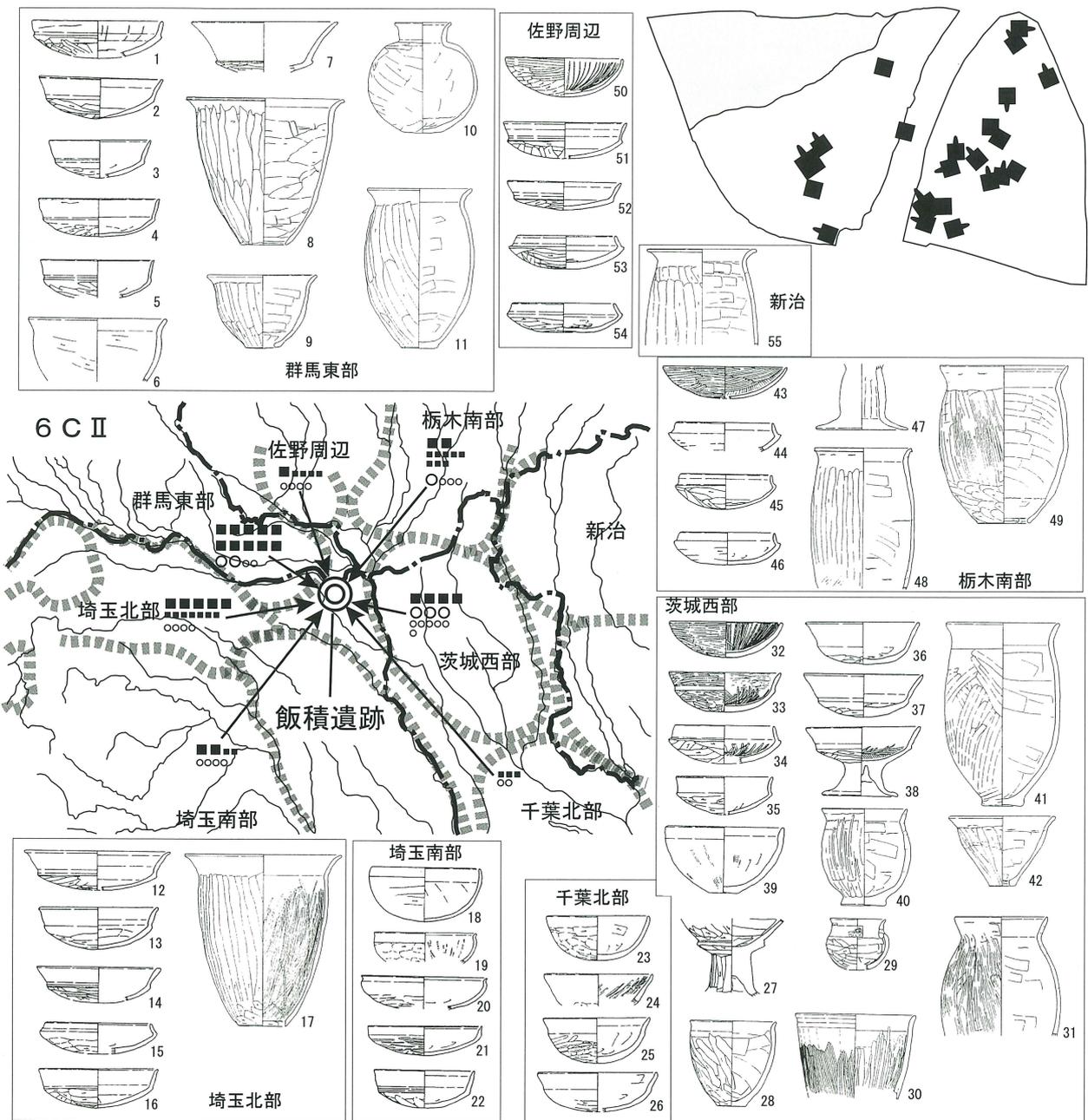
埼玉古墳群などへ積極的にもたらされたことも飯積遺跡が、群馬東部、埼玉北部の土器を多く用い始めたことと、深くかかわっていたと考えたい。

また、高さ20cmを超える大形高坏は、群馬東部、埼玉北部の一般的な高坏と形式的に共通するが、一般集落からの出土はとても少なく、いわゆる豪族居館の出土に限られる。この高坏は、須恵器の大形器台、または木器の大形高坏を意識して、豪族居館で供え物を捧げる道具として用いられた土器である。

つまり、大形高坏の出土は、背景に豪族居館、大形高坏を用いた豪族などの存在をうかがうことができ、飯積遺跡の集落規模や土器の出土量等を考慮すると、近くに豪族居館、または、その豪族が営んだ大形古墳が、埋没している可能性が高い。

あるいは、竪穴住居から出土していることを考えると、祭祀の実行者となる豪族に奉仕していた者が、祭祀の後、土器の賜与を受けたのかもしれない。

いずれにせよ、古墳の存在がこれまで確認されて



第411図 6世紀第Ⅱ四半期の土器と地域

いなかった北川辺町、あるいは埼玉県東部地域にあって、大形古墳や豪族居宅が存在する可能性が高まった。大きな発見である。

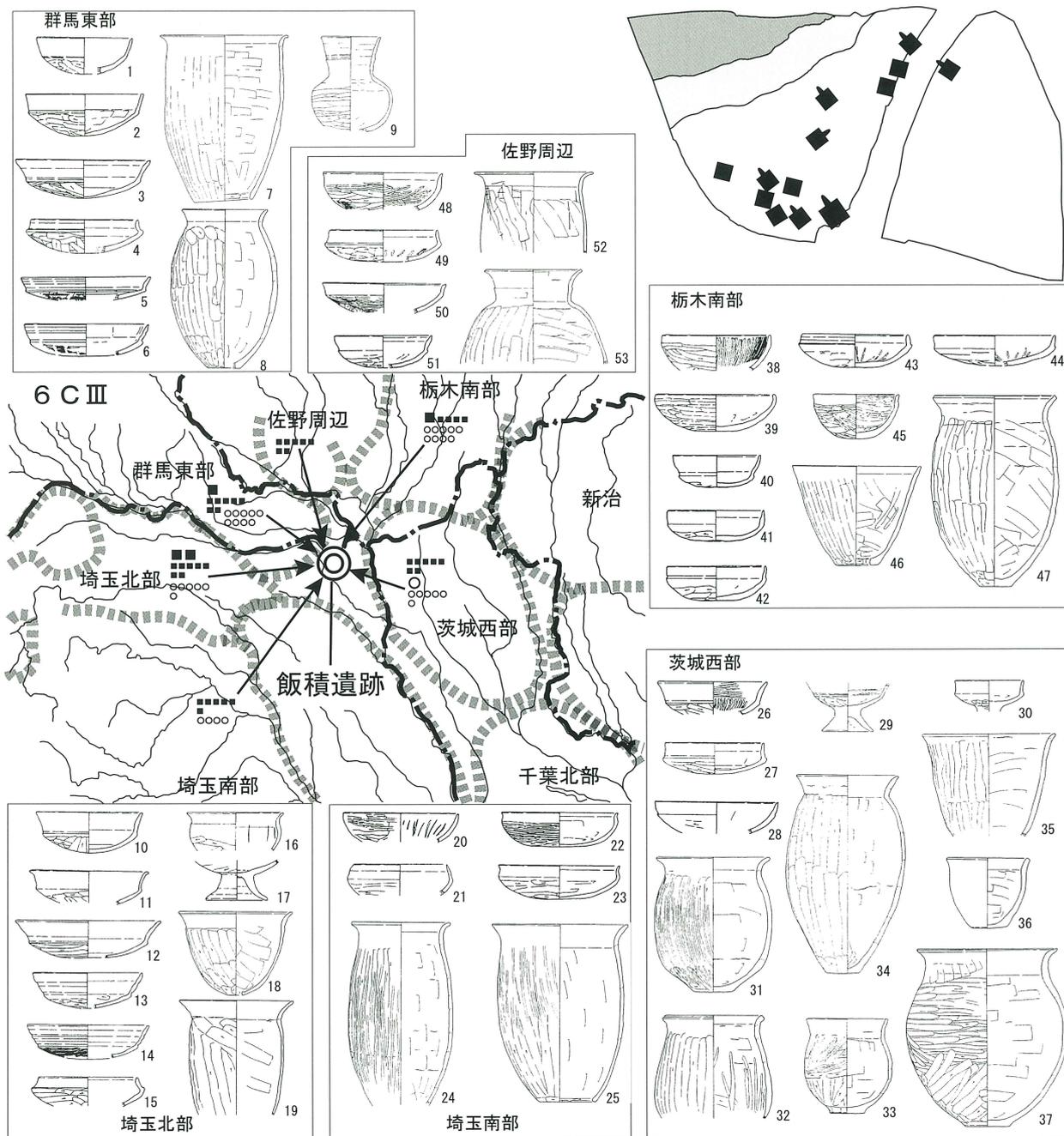
6世紀第Ⅰ四半期

集落の規模は大きくなり、東にさらに展開する。その一方、出土土器は、群馬東部、埼玉北部を主体としながらも、栃木南部、茨城西部の土器も豊富に供給されていた。さらに、佐野周辺や埼玉南部、千葉北部などの土器もみられ、飯積遺跡が地域間交流

の拠点として成長した遺跡であったことがわかる。

このころ、埼玉古墳群最大の二子山古墳が築かれ、前後して、太田市や佐野市、小山市などにも大形古墳が築かれた。そして、令制下の埼玉郡域には、河川沿いの自然堤防上に大型集落が点在する。

元荒川の行田市築道下遺跡、蓮田市荒川附遺跡、星川の行田市小針遺跡、これらの遺跡の一つとして飯積遺跡は、河川を媒介とした物資の流通、地域間交流の結節点としての機能を担っていた。



第412図 6世紀第III四半期の土器と地域

6世紀第II四半期

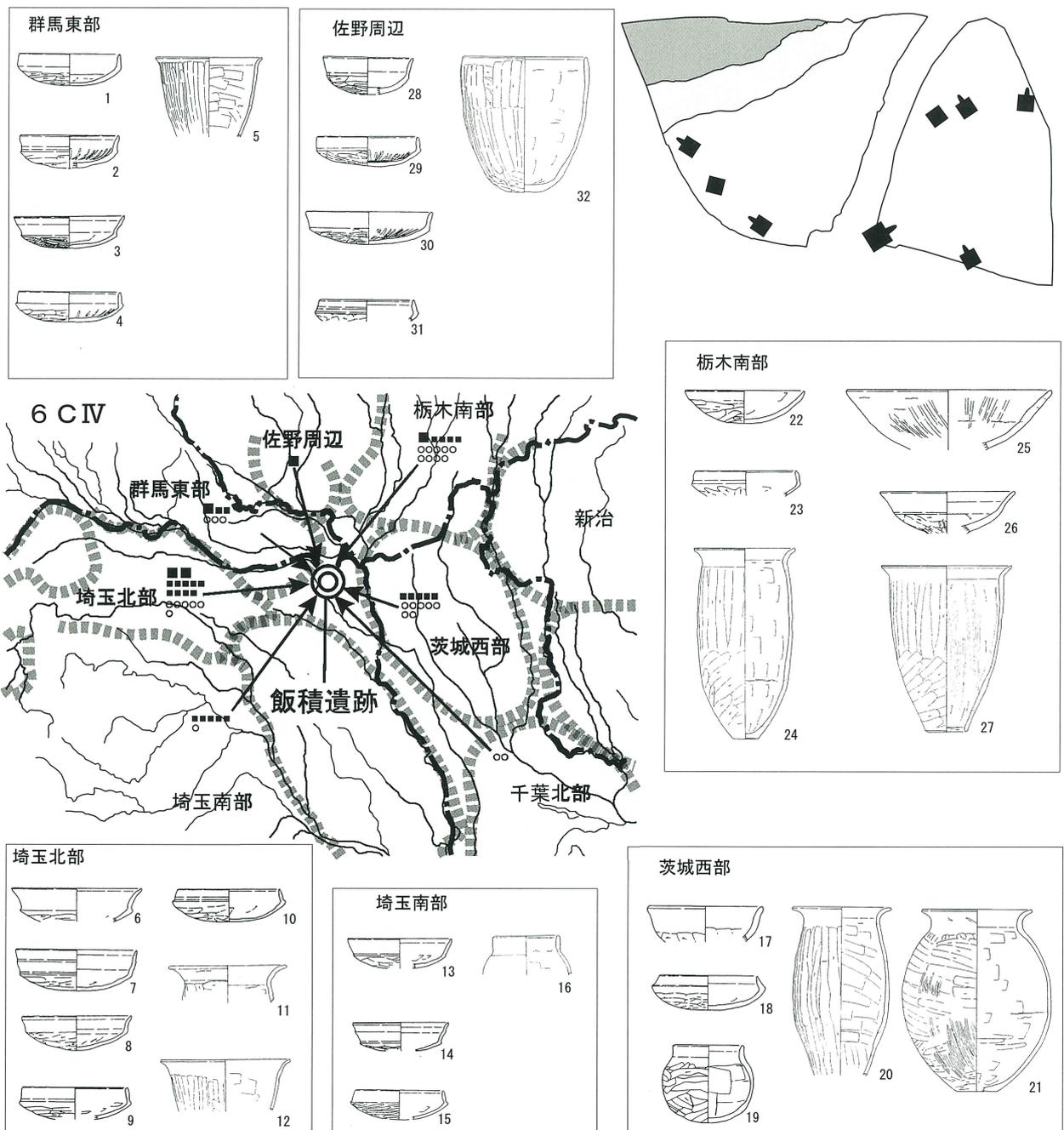
集落の転換は、突然、訪れた。北側を流れていた河川が、洪水によって埋まったのである。この洪水は、利根川水系の河川によって引き起こされた。洪水埋没層には、群馬県榛名山から噴出した角閃石安山岩（軽石）が含まれていた。

6世紀前葉、榛名山二ツ岳の噴火で降下した軽石は、関東平野を被い、雨水や風によって中小の河川

に運ばれて利根川に集まり、台風などの局地的な豪雨が引き金となって、大きな洪水を引き起こした。

北川辺町の西、板倉町を東西に流れる谷田川も、その洪水に巻き込まれ、飯積遺跡は、その影響を受けたのである。そして、集落北側の河川（谷）は、自然堤防と同じ高さまで埋まってしまった。

この洪水以前、集落は、河川（谷）の縁辺、間際まで迫っており、竪穴住居の向きも河川（谷）と同



第413図 6世紀第IV四半期の土器と地域

一方向を示していた。大形の竪穴住居が等間隔に並び、その間に小形の竪穴住居が並ぶ構成であった。

一方、出土土器の編成をみると、群馬東部、埼玉北部の土器が、以前に比べ優勢になったが、栃木南部、茨城西部の土器も続いて見られ、わずかではあるが、佐野周辺や埼玉南部、千葉北部などの土器も確認できた。

ところで飯積遺跡の土器は、坏や椀、高坏といった食膳具と、甕や甑、壺などの貯蔵・煮沸具が、各

地域から両者とも供給されていた。祭祀や協業などで人々が、地域間を移動した場合、食膳具が移動の対象となるはずである。

しかし、飯積遺跡の集落では、貯蔵・煮沸具も他の土器と同量を消費した。つまり、集落の土器は、一貫して周辺地域から供給を受け、器壁の色、形などにかかわらず用いられていたか、周辺地域から土器をもたらした人々が、飯積の集落で編成され、生活を営んでいたと考えてみるべきである。